倉吉市文化財調査報告書　第99集

鳥取大学附属図書館
郷土資料室

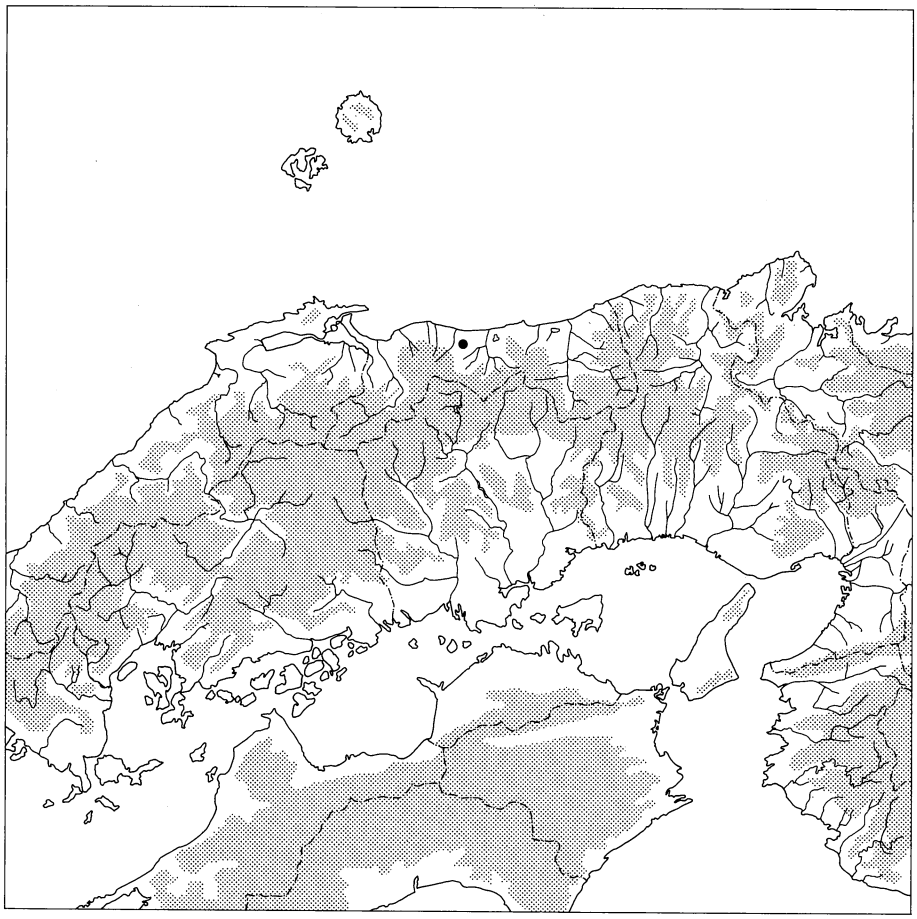
駄道東遺跡発掘調査報告書

平成10年度

倉吉市教育委員会

倉吉市文化財調査報告書　第99集

駄道東遺跡発掘調査報告書



遺跡略号　４ＥＴＤ

平成10年度

倉吉市教育委員会

<10>0100572460

序

この報告書は、国営船上山ダム・小田股ダム建設に係る採石事業に伴う事前調査として、中国四国農政局東伯農業水利事業所の委託を受け、平成９年度および10年度に倉吉市津原・谷において実施した発掘調査の記録です。

昭和55年、中国四国農政局の西高尾ダム建設計画に始まった倉吉市谷のダム建設工事に係る谷原石山採石事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和62年度の郊家平古墳群発掘調査、平成６年度の二タ子塚遺跡発掘調査と続き、今回の駄道東遺跡発掘調査において終了をみました。

今回の駄道東遺跡発掘調査は、二タ子塚遺跡に連なる丘陵尾根部分に位置し、調査により10基の古墳を検出しました。古墳は戦後の畑造成によりその墳丘の大部分を失っており、古墳としては残りが良くありませんが、二タ子塚遺跡とともに古墳の成立を考える上で貴重な資料となるものです。

発掘調査の記録としては不十分であり、満足すべきものではありませんが、多くの方々に活用され、郷土の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査にあたりご協力いただきました中国四国農政局東伯農業水利事業所、船上山ダム建設工事大成・住友・日本国土開発共同企業体、ならびに関係各位に対し、深く感謝の意を表するものであります。

平成11年３月

倉吉市教育委員会

教育長　足　羽　一　昭

例　　言

1　本報告書は、倉吉市教育委員会が、中国四国農政局東伯農業水利事業所の委託を受け、国営船上山ダム・小田股ダム建設に係る原石採取事業に伴う事前調査として、平成９年度及び10年度に倉吉市津原字駄道東・二夕子塚、谷字玉ヶ平において実施した埋蔵文化財の発掘調査の記録である。

2　発掘調査団は次のような組織・編成である。

団　　長　足羽　一昭（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員　名越　　勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

手嶋　義之（倉吉市文化財保護審議会委員　９年度）

調　査　員　根鈴　輝雄（倉吉博物館主任学芸員）　眞田　廣幸（文化課課長補佐兼文化財係係長）

森下　哲哉（文化財係主任）　根鈴智津子（文化財係主事）

加藤　誠司（文化財係主事）　岡本　智則（文化財係主事）

岡平　拓也（文化財係主事）

調査補助員　山根　雅美・松田　恵子

事　務　局　故石田佐喜子（教育次長９年９月まで）

新田　征男（教育次長　９年10月から10年６月まで）

波田野頌二郎（教育次長　10年７月から）

生田　淳美（文化課課長　９年度）　山脇　將暉（教育次長兼文化課課長　10年度）

藤井　敬子（文化財係主任　10年７月から）　山崎慎之介（文化財係主事　10年６月まで）

福澤　昌子（文化財係主事）　金田　朋子（臨時職員）

内務整理　泉　美智子・世浪由美子・妻藤　君江・松嶋あつ子・竹歳　暁子・山崎有香子・山本　　錦

3　現場での調査は森下が担当し、10年度は山根が補助した。遺構の図面整理は森下・泉・世浪・妻藤が担当し遺物実測は森下が担当した。遺構・遺物写真は森下が担当し、松嶋・竹歳・山崎・山本が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤が担当した。

4　第Ⅳ章鑑定の分析結果については、鳥取大学医学部法医学教室　井上晃孝助教授に人骨の取り上げと鑑定報告のご寄稿をいただいた。記して謝意を表します。鉄器保存処理は、財団法人元興寺文化財研究所保存科学センターに依頼した。

5　遺構測量のための基準杭測量及び方眼測量を中央技研株式会社に委託した。

6　本書の執筆は、各調査員が討議し森下が行った。編集は森下・松田・世浪が担当した。

7　第１図（地形図）は、建設省国土地理院発行の１：25,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆したものである。第２図は、平成９年度修正測量の１：2,500国土基本図　倉吉平面図を使用した。

8　挿図中の方位は、特に注記を行わない限り国土座標第Ⅴ座標系の北を示す。

9　遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。

10　発掘資料は倉吉博物館で保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 1
Ⅲ　調査の概要 …… 7
　1　遺構 …… 8
　2　遺物 …… 39
Ⅳ　鑑定 …… 46
Ⅴ　郊家平古墳群調査区 …… 47
Ⅵ　まとめ …… 48
報告書抄録

挿　図　目　次

第1図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図 …… 3
第2図　駄道東遺跡調査区位置図 …… 4
第3図　駄道東遺跡遺構全体図 …… 5
第4図　1号・6号・8号墳調査前地形測量図 …… 7
第5図　1号・6号・8号墳、1号溝状遺構平面図 …… 8
第6図　1号・6号・8号墳、1号溝状遺構断面図 …… 9
第7図　1号墳1号埋葬施設遺構図1 …… 12
第8図　1号墳1号埋葬施設遺構図2 …… 13
第9図　1号墳2号埋葬施設遺構図 …… 15
第10図　1号墳3号埋葬施設遺構図 …… 16
第11図　2号・7号・9号墳調査前地形測量図 …… 17
第12図　2号・7号・9号墳平面図 …… 18
第13図　2号・7号・9号墳断面図 …… 19
第14図　2号墳2号埋葬施設遺構図1 …… 20
第15図　2号墳2号埋葬施設遺構図2 …… 21
第16図　2号墳1号埋葬施設遺構図 …… 23
第17図　2号墳3号埋葬施設遺構図 …… 24
第18図　3号～5号墳調査前地形測量図 …… 25
第19図　3号～5号墳平面図 …… 26
第20図　3号～5号墳断面図 …… 27
第21図　6号墳1号埋葬施設遺構図 …… 28
第22図　7号墳1号埋葬施設遺構図 …… 29
第23図　7号墳2号・3号埋葬施設遺構図 …… 30
第24図　7号墳4号～6号埋葬施設遺構図 …… 31

第25図　８号墳１号埋葬施設・９号墳１号埋葬施設遺構図 …… 32
第26図　10号墳調査前地形測量図 …… 33
第27図　10号墳平面図 …… 34
第28図　10号墳断面図 …… 35
第29図　10号墳１号埋葬施設遺構図 …… 36
第30図　１号箱式石棺墓遺構図 …… 37
第31図　１号貯蔵穴、１号・２号土壙遺構図 …… 38
第32図　土器１ …… 41
第33図　土器２ …… 43
第34図　鉄製品 …… 44
第35図　石製品 …… 45
第36図　郊家平古墳群調査区位置図 …… 47

図　版　目　次

図版１　遺跡　調査区空中写真　調査区遠景　調査区全景
図版２　遺跡　調査区全景
図版３　遺跡　調査区北側　調査区南側
図版４　遺構　１号墳全景　１号墳完掘
図版５　遺構　１号墳１号埋葬施設蓋石、棺内、掘り方
図版６　遺構　１号墳１号埋葬施設鉄鏃出土状況　１号墳２号埋葬施設掘り方　１号墳３号埋葬施設蓋石、棺内
図版７　遺構　２号墳完掘　２号墳１号埋葬施設
図版８　遺構　２号墳２号埋葬施設蓋石、棺内、石棺掘り方
図版９　遺構　２号墳３号埋葬施設、掘り方　２号墳２号埋葬施設掘り方
図版10　遺構　３号～５号墳　３号墳全景
図版11　遺構　４号墳全景　５号墳全景
図版12　遺構　６号墳全景　６号墳１号埋葬施設
図版13　遺構　７号墳全景　７号墳周溝高坏一括出土状況
図版14　遺構　７号墳１号埋葬施設蓋石、掘り方　７号墳２号埋葬施設
図版15　遺構　７号墳３号埋葬施設　７号墳４号埋葬施設供献土器出土状況、掘り方
図版16　遺構　７号墳５号埋葬施設　７号墳６号埋葬施設蓋石、掘り方
図版17　遺構　８号墳全景　８号墳１号埋葬施設、敷石
図版18　遺構　９号墳全景　９号墳１号埋葬施設
図版19　遺構　10号墳全景　10号墳１号埋葬施設
図版20　遺構　１号箱式石棺墓　１号貯蔵穴・１号土壙　２号土壙
図版21　遺構　郊家平古墳群調査区　第１トレンチ　第２トレンチ　第３トレンチ　第４トレンチ
図版22　遺物　１号・４号墳出土土器
図版23　遺物　７号墳出土土器
図版24　遺物　古墳以外の出土土器、敲石・磨石
図版25　遺物　鉄製品

I　発掘調査に至る経過

昭和55年度から計画された中国四国農政局東伯農業水利事業所による国営西高尾ダム建設、並びに平成４年度から計画された国営船上山ダム・小田股ダム建設に係る原石採取事業は、倉吉市谷地内に所在する山塊が選ばれ、ダム建設に必要な大量の岩石採取が行われることになった。このため倉吉市教育委員会文化課は、計画された予定地内の文化財を把握し、協議の結果変更が困難であると判断された２地区、倉吉市谷字郊家平・シヲレ道に所在する郊家平古墳群と倉吉市津原字駄道東・二夕子塚に所在する二夕子塚遺跡・駄道東遺跡について発掘調査を行うことになった。

郊家平古墳群については、昭和61年度に谷原石山の岩石採取に伴う道路改修に係る埋蔵文化財の調査依頼があり、計画の変更が困難な古墳群のうちの２基について発掘調査することになり、昭和62年４月23日から昭和62年６月６日まで実施した。

二夕子塚遺跡・駄道東遺跡については、平成４年２月に国営東伯農業水利事業船上山ダム・小田股ダム建設工事に係る谷原石山採石場の拡張計画が提示された。このため拡張範囲の予定地を再踏査したところ、計画地内の丘陵尾根中央部で古墳の高まりを確認した。また予定地の北端付近は、昭和48年頃の分布踏査において古墳２基を確認した地区であった。こうした状況からさらに計画範囲内の遺跡確認と広がりをつかむため予備調査を平成５年５月11日から６月11日まで実施した。この結果、丘陵尾根部分を中心に古墳の周溝、箱式石棺墓、弥生土器・土師器などが検出され遺跡の存在が明らかとなった。このため倉吉市教育委員会は東伯農業水利事業所と協議し、今後予定される原石採取計画と調整を図りながら、採取範囲に含まれる遺跡地の発掘調査を実施することになった。最初は既存の採石場に近い尾根部分二夕子塚遺跡3,200㎡を調査することとなり、調査は平成５年９月５日から12月28日まで実施した。さらに二夕子塚遺跡に続く駄道東遺跡5,000㎡を、事業の関係から平成９・10年度の２ヵ年にわたり実施することになった。

駄道東遺跡の調査は、倉吉市教育委員会が主体となり東伯農業水利事業所の委託を受けて、平成９年度が平成９年10月29日から平成10年３月５日まで遺跡南西側2,300㎡を、平成10年度が平成10年５月11日から平成10年９月４日まで遺跡北東側2,700㎡をそれぞれ調査した。

註

1　根鈴輝雄他　『郊家平古墳群発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1988

2　竹宮亜也子　「津原地区（二夕子塚遺跡）」『倉吉市内遺跡分布調査報告書Ⅷ』　倉吉市教育委員会　1995

3　高取英雄他　『二夕子塚遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1995

II　位置と歴史的環境

駄道東遺跡は、倉吉市街地から北西に約７㎞離れた倉吉市津原字駄道東・二夕子塚、谷字玉ヶ平に所在する。丘陵の北側は、谷字清水谷に接し、南西側は津原字二夕子塚に接する。平成６年度に調査された二夕子塚遺跡は、調査区の南西側に接する。調査地は、南西から北東に伸びる標高60～70ｍ前後の大栄町と境を接する丘陵尾根で、丘陵最高所の二夕子塚遺跡から北東に下ったやや幅の広い尾根部分に立地する。水田面との比高差は約60ｍを測る。遺跡の所在する灘手地区（旧灘手村）の地形は、低湿地とこれに突き出す洪積性の丘陵地からなる。この低湿地は標高約１～２ｍで、江戸時代中期頃に干拓されるまでは浅い潟湖であった。丘陵地帯は大山の火山活動に

より形成された洪積性の丘陵が南北に伸び、小規模な谷が樹枝状に入り組んでいる。丘陵尾根の平坦面は広く標高20～60ｍの起伏の少ない丘陵である。本遺跡はこの灘手丘陵の北西に位置する。調査前は、調査区全体が戦後に開発された畑作の放棄された後の荒れた雑木林と杉・桧林であった。同一丘陵には二タ子塚遺跡のほか、北側先端付近で昭和48年度に調査された清水谷古墳群が所在し、この丘陵の取り付き部分にあたる倉吉市谷字郊家平・シヲレ道には昭和62年度に調査した横穴式石室を主体部とする郊家平古墳群が所在する。

清水谷古墳群は、昭和48年度の調査により箱式石棺墓を主体部とする古墳２基を検出し、この内清水谷１号墳の主体部の箱式石棺では、内行花文鏡と大量の鉄鏃が出土した。そして郊家平古墳群では、山裾に８基存在し昭和62年度にこの内３基が調査されている。いずれも直径10ｍ前後の円墳で横穴式石室を主体部とする６世紀後半から７世紀前半の古墳であった。そのなかで１号墳は、約２ｍ四方の玄室床面をもち、奥壁１枚・両側壁各２枚ずつを立てかけ、羨道との境界に玄門石を据えるもので、閉塞石が存在していた。また鉄器類が豊富に副葬されており、なかでも残長64.2cmの鉄刀には柄頭部分と鐔部分に銀の象嵌が施されていた。平成６年度に発掘された二タ子塚遺跡では、土壙墓10基、土壙墓に伴う溝４条、古墳５基、周溝内埋葬施設２基を検出した。この内５基の古墳は、丘陵東側の傾斜変換点に所在し全ての周溝が接するように造られていた。さらに周溝は全て尾根側の３方をコの字状に巡らせたもので、南端の５号墳が最小で北にいくほど大きくなり、古墳発生時の築造過程をしめす古墳群であった。さらに本遺跡周辺の遺跡以外にも、灘手地区には数多くの遺跡が存在する。第１図の遺跡分布図の範囲を中心にその分布状況を述べる。

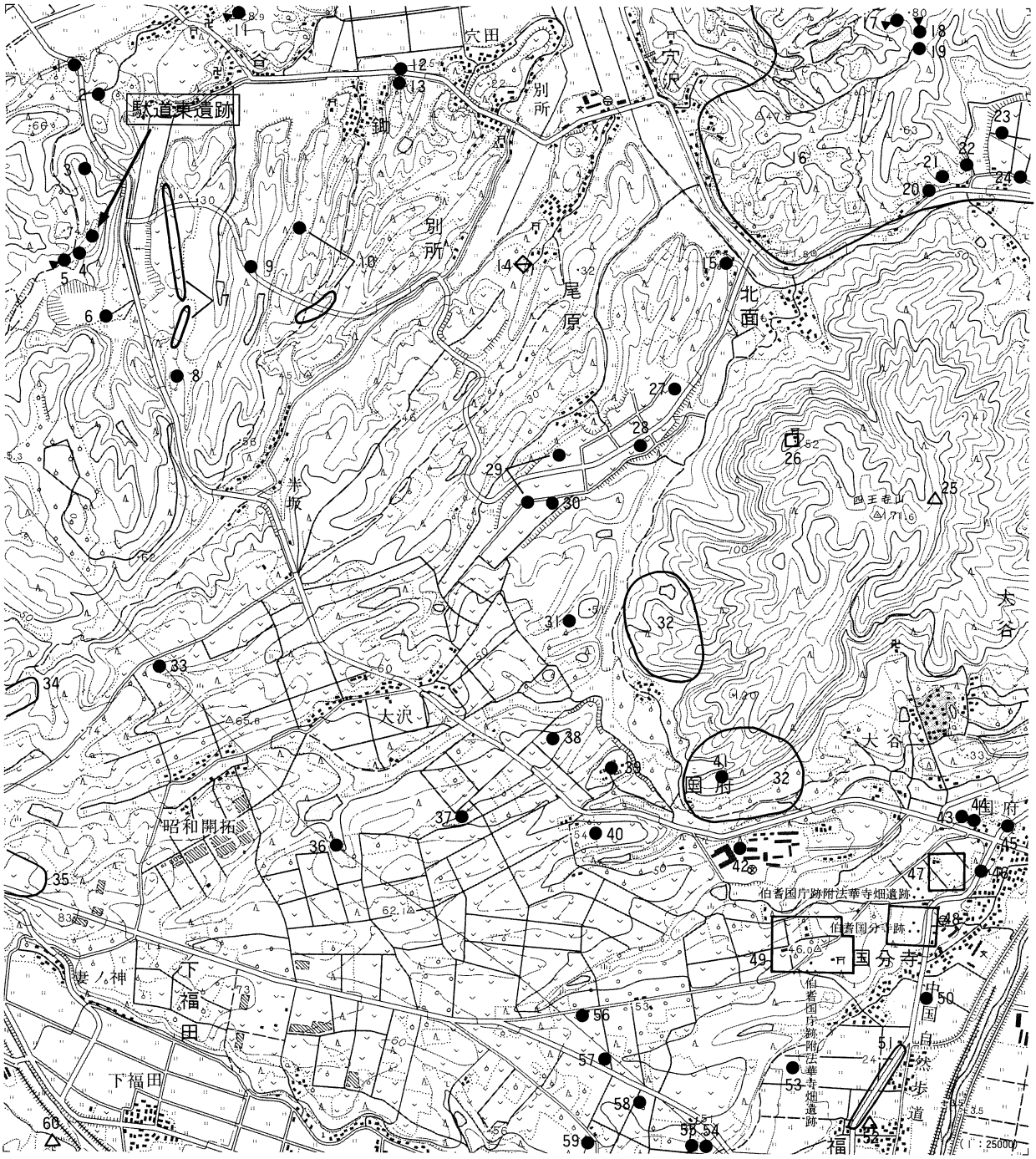
倉吉市西郊に存在する遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけてのものが多く存在し、駄道東遺跡が所在する灘手地区においてもこの傾向がうかがえる。しかしこうした状況のなかでも旧石器時代や縄文時代の遺跡も存在する。旧石器時代の遺物には上神51号墳(19)の墳丘盛土の中より採集された黒曜石製の船底形細石刃石核や、高鼻２号墳(13)の墳丘盛土中より出土したチャート製の細石刃石核がある。遺跡には黒曜石製や安山岩質製の国府型ナイフ形石器が出土した中尾遺跡がある。いずれも遺物だけであり遺構は未だ確認されていない。

次に縄文時代の遺跡には早期の竪穴式住居と礫群、押型文土器が出土した取木遺跡(27)や84基の落し穴と前期から晩期にわたる縄文土器の出土をみた中尾遺跡がある。近年多く確認されるようになった落し穴遺構を検出した遺跡には頭根後谷遺跡(７)・大仙峯遺跡(９)・大山遺跡(10)・イキス遺跡(15)が知られている。この他縄文土器が出土した遺跡は中峯遺跡(40)や上神猫山遺跡そして四王寺山周辺の予備調査において検出されている。

弥生時代の遺跡は、天神川とその支流である国府川・小鴨川が形成した沖積平野の下流域に長瀬高浜遺跡や松ケ坪遺跡といった集落が存在するが継続せず、弥生時代中期以降は倉吉市の西郊に広がる火山灰台地の久米ケ原丘陵上に多くの遺跡が営まれるようになり、灘手地区についても多く存在する。集落跡では、遠藤谷峯遺跡(38)・白市遺跡(39)・中峯遺跡・道祖神峰遺跡・西前遺跡などがある。墳墓では前期の土壙墓群を検出したイキス遺跡(15)や後期の土壙墓群を確認した二タ子塚遺跡(４)のほか、大谷後ロ谷墳丘墓(32)・三度舞墳丘墓・柴栗遺跡群などが知られる。

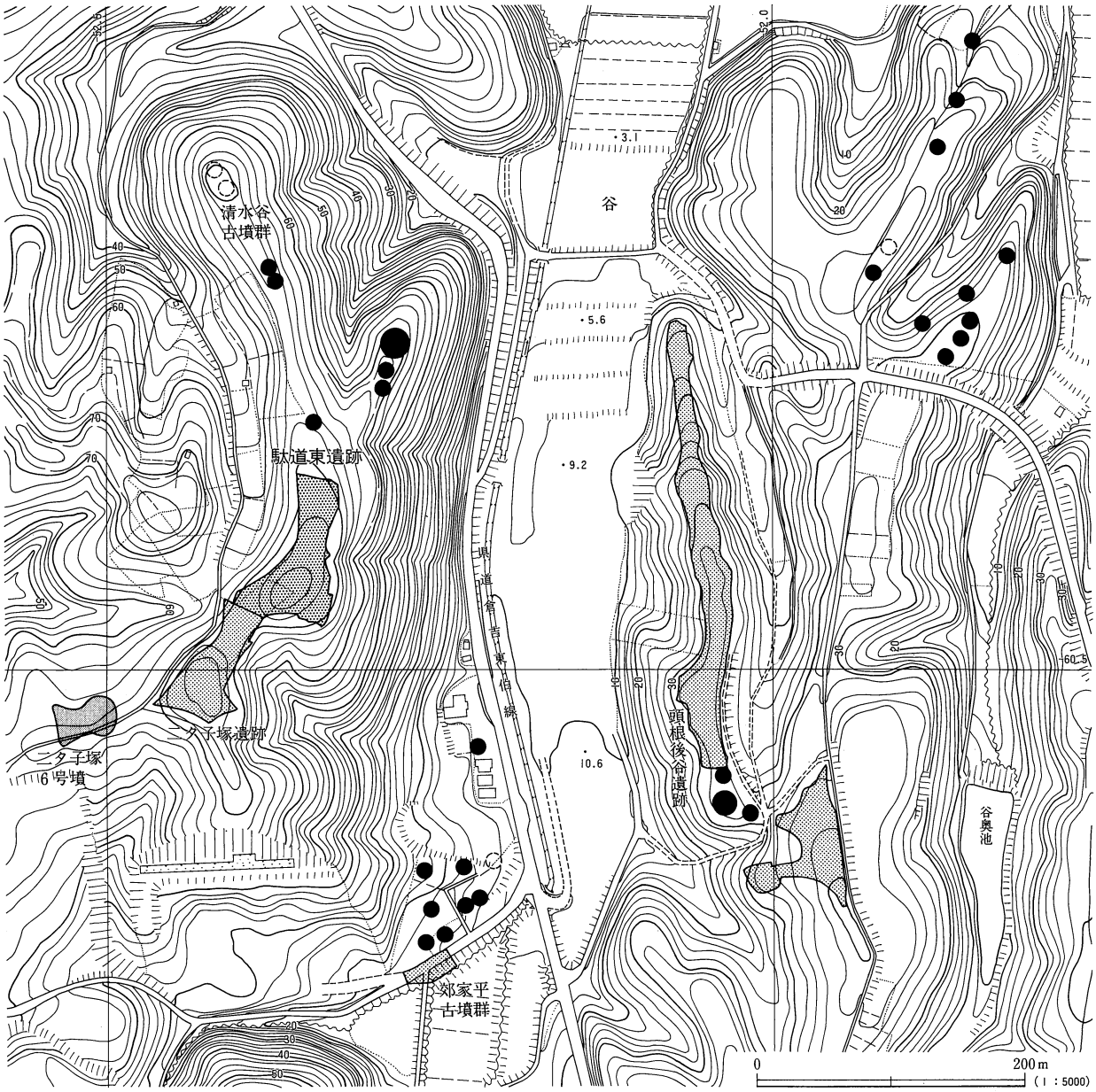
本遺跡の周辺には、これまで前期古墳は確認されておらず、丘陵上に営まれる古墳の多くは後期のものであった。しかし二タ子塚遺跡の１号墳～５号墳は、出土遺物から古墳時代前期の古墳であることが明らかとなった。

1	西焼ス古墳群	5	二タ子塚６号墳	9	大仙峯遺跡	13	高鼻２号墳	17	上神45号墳
2	清水谷尻１号墳	6	郊家平古墳群	10	大山遺跡	14	伯尾山窯跡	18	上神48号墳
3	清水谷尻古墳群	7	頭根後谷遺跡	11	大塚山古墳	15	イキス遺跡	19	上神51号墳
4	二タ子塚遺跡	8	東鳥ヶ尾古墳	12	高鼻１号墳	16	上神古墳群	20	上神119号墳



第１図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

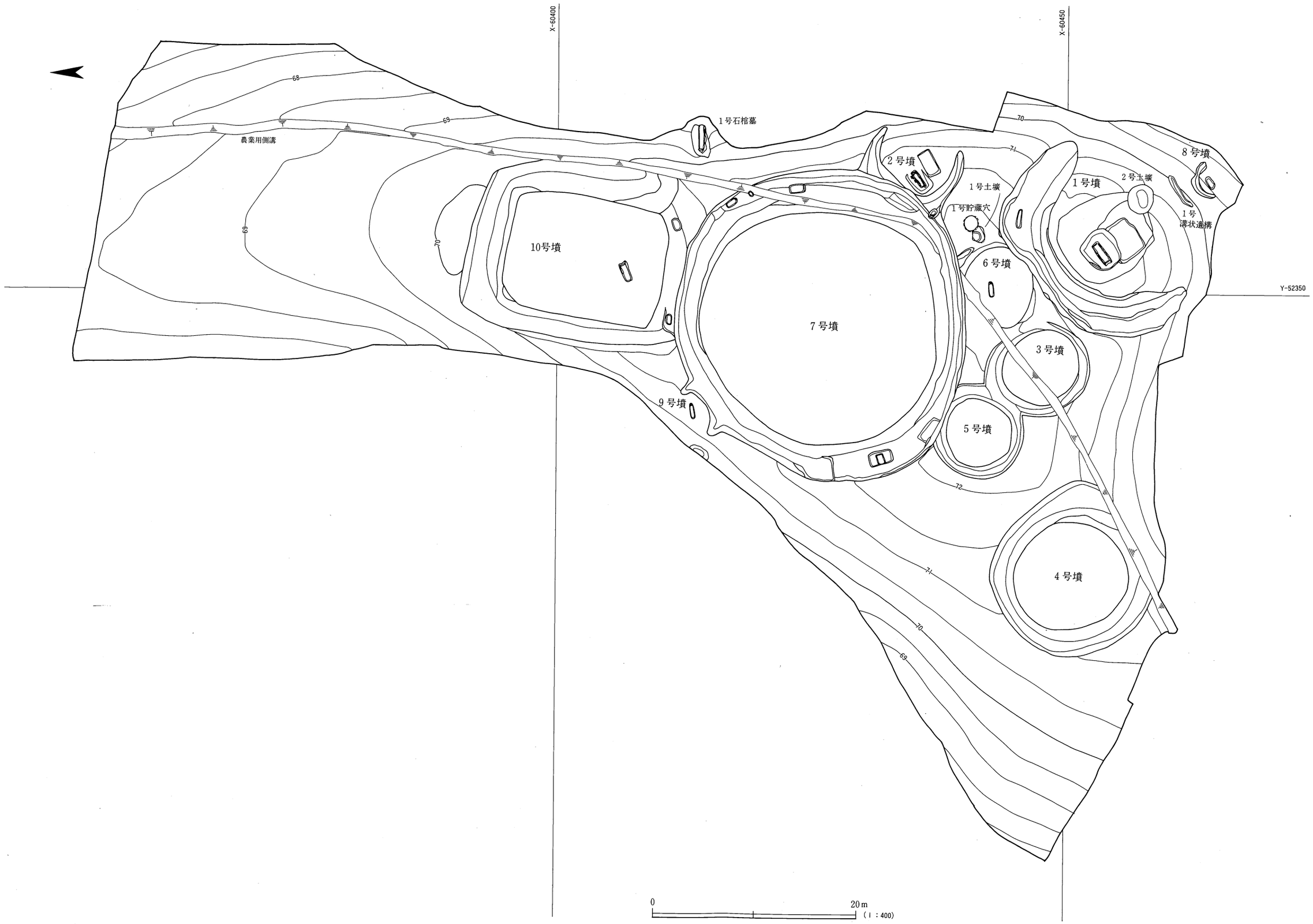
21	クズマ遺跡	29	コザンコウ遺跡	37	大沢前遺跡	45	擲塚遺跡	53	嶋ノ掛遺跡
22	イガミ松遺跡	30	道祖神峰遺跡	38	遠藤谷峯遺跡	46	宮ノ下遺跡	54	矢戸遺跡１次
23	西山遺跡	31	両長谷遺跡	39	白市遺跡	47	伯耆国分尼寺跡	55	矢戸遺跡２次
24	桜木遺跡	32	古墳群	40	中峯遺跡	48	伯耆国分寺跡	56	福田寺遺跡１次
25	大谷城跡	33	昭和開拓遺跡	41	大谷後ロ谷墳丘墓	49	伯耆国衙跡	57	東福田寺遺跡
26	四王寺跡	34	ケンカ塚古墳群	42	向野遺跡	50	河原毛田遺跡	58	岩屋遺跡
27	取木遺跡	35	稚児ヶ墓古墳群	43	古神宮古墓	51	今倉遺跡	59	福田寺遺跡２次
28	一反半田遺跡	36	大道谷遺跡	44	打塚遺跡	52	今倉城跡	60	下福田城跡



第２図　駄道東遺跡調査区位置図

なお、倉吉地方では前期古墳が小鴨川の支流国府川の左岸と向山の東側に分布し、後期になると直径10ｍ前後の円墳からなる古墳群が各地区の丘陵尾根を中心に存在する。前方後円墳としては高鼻２号墳(13)・大塚山古墳(11)・二夕子塚６号墳(５)が知られている。この内調査された高鼻２号墳は箱式石棺を埋葬主体としており、墳丘測量調査が行われた二夕子塚６号墳では前方部と後円部とにそれぞれ１基の横穴式石室を確認した。円墳群では、小鴨川の左岸に広がる向山丘陵の向山古墳が良く知られるところであるが、四王寺山周辺では上神古墳群や大谷古墳群が存在する。この内調査されたものには、郊家平古墳群(６)をはじめ頭根後谷遺跡・大山遺跡Ｄ地区・清水谷古墳群(２)・西焼ス古墳群(１)・取木遺跡・一反半田遺跡(28)・両長谷遺跡(31)がある。この時期の集落は、その多くが弥生時代から継続された遺跡であり、久米ケ原丘陵や灘手丘陵に存在する。調査された集落跡では、宮ノ下遺跡(46)・擲塚遺跡(45)・西山遺跡(23)・頭根後谷遺跡(７)・クズマ遺跡(21)が営まれる。

奈良時代では、久米ケ原丘陵の東端部周辺に伯耆国衙(49)・伯耆国分寺(48)・伯耆国分尼寺(47)が近接して設けられ、さらに国府川に沿った不入岡地区には、伯耆国の物資収納施設と推定された大型掘立柱建物群を検出した不入岡遺跡が存在する。このほか古代の山陰道と考えられる道路跡が河原毛田遺跡(50)で検出されている。

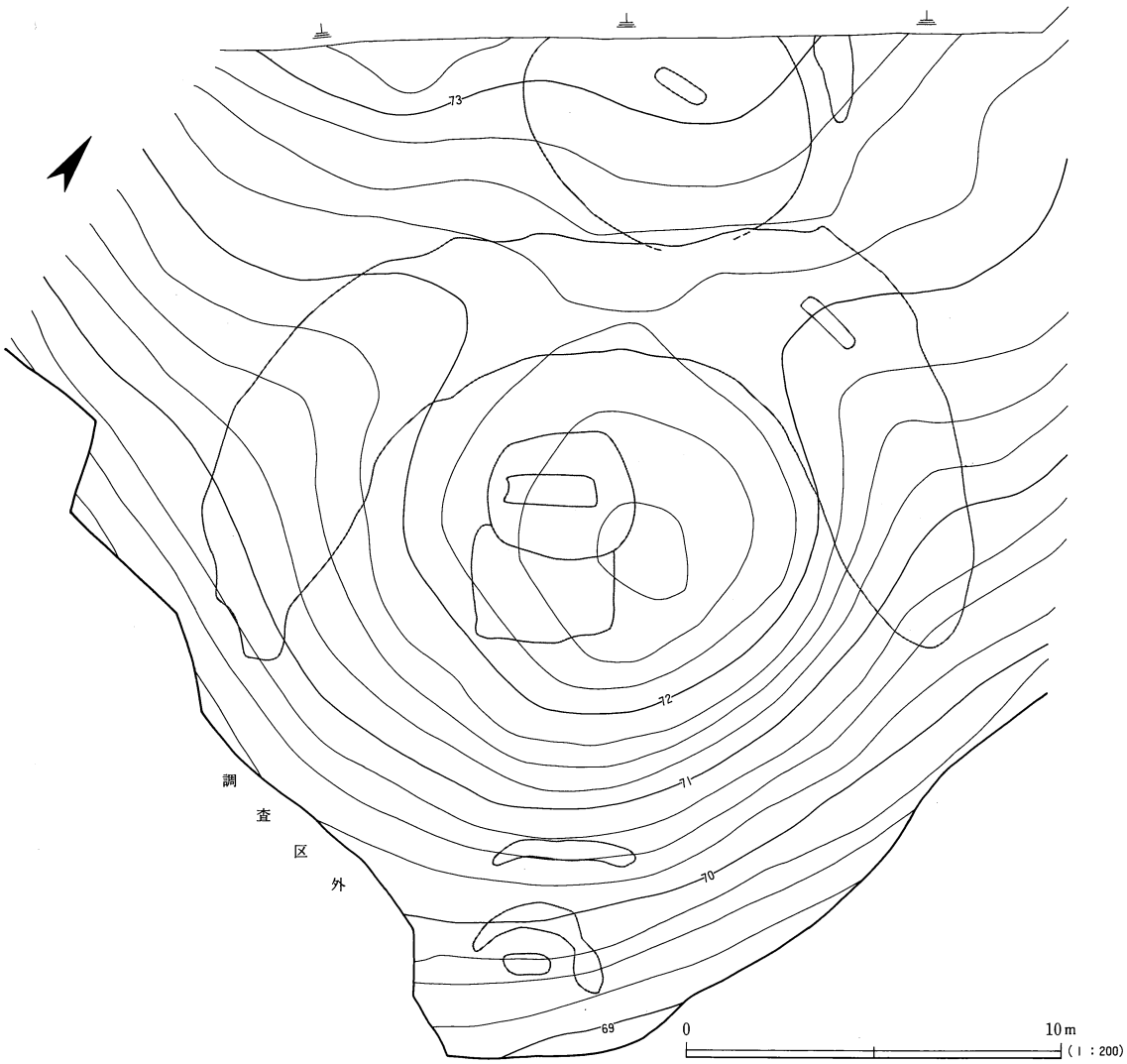


第3図　駄道東遺跡遺構全体図

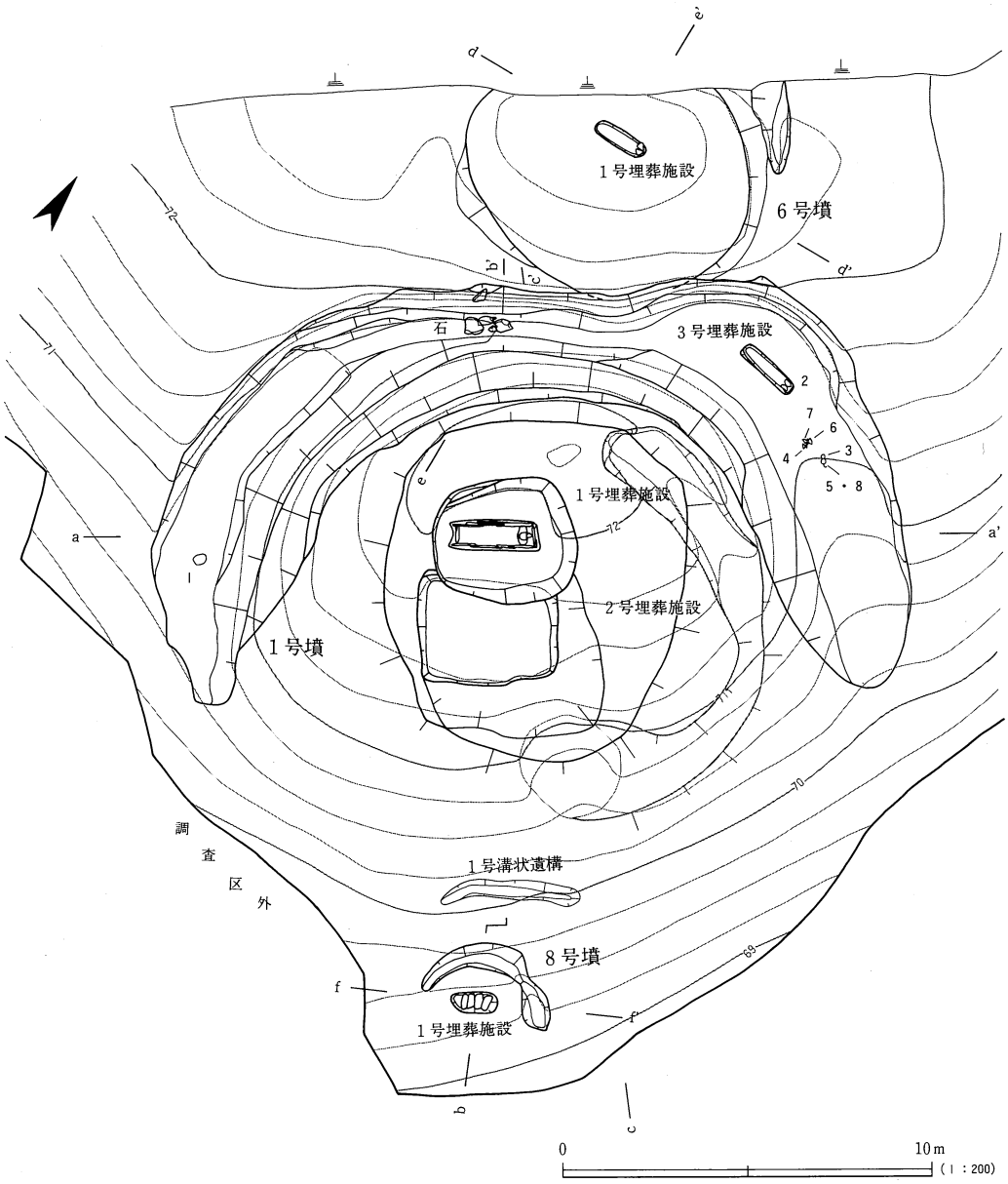
III　調査の概要

調査は、平成６年度に発掘調査を実施した二タ子塚遺跡の西側３ｍから原石採取予定地の5,000㎡を対象とした。調査は、予定地の地形を平板測量した後、古墳墳丘の高まりを有する１号墳が所在する、南北に延びる尾根に沿って造られた農業用側溝（以下側溝）から南東側を除く丘陵部分の表土を重機によって除去した。また１号墳周辺は、墳丘盛土が残っており、断面観察のベルトを設定して、人力による表土除去作業を行った。なお、調査区のほぼ中央の、標高の一番高い部分の７号墳付近で、平成９年度事業2,300㎡と平成10年度事業2,700㎡とに区分し調査を進めることとした。

調査地の基本層序は、二タ子塚遺跡と連続する丘陵上に位置するところから、基本的には二タ子塚遺跡の基本層序と同じ層序を示す。表土及び旧耕作土（暗茶褐色土）の下は、茶褐色土（漸移層）・暗褐色土（ソフトローム土）・黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層）・黄褐色砂質土（ＡＴ：姶良・丹沢火山砂層）・橙褐色粘質土（礫混じり粘質層）・黄褐色土（Ｄ.Ｋ.Ｐ.：大山倉吉軽石層）の順である。遺構検出作業は、茶褐色土（漸移層）面、及び暗褐色土（ソフトローム土）面上層で行ったが、丘陵尾根中央付近では古墳墳丘が削られており、表土下で直ぐに暗褐色土（ソフトローム土）や黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層）が削られた攪乱土を露出する。



第４図　１号・６号・８号墳調査前地形測量図



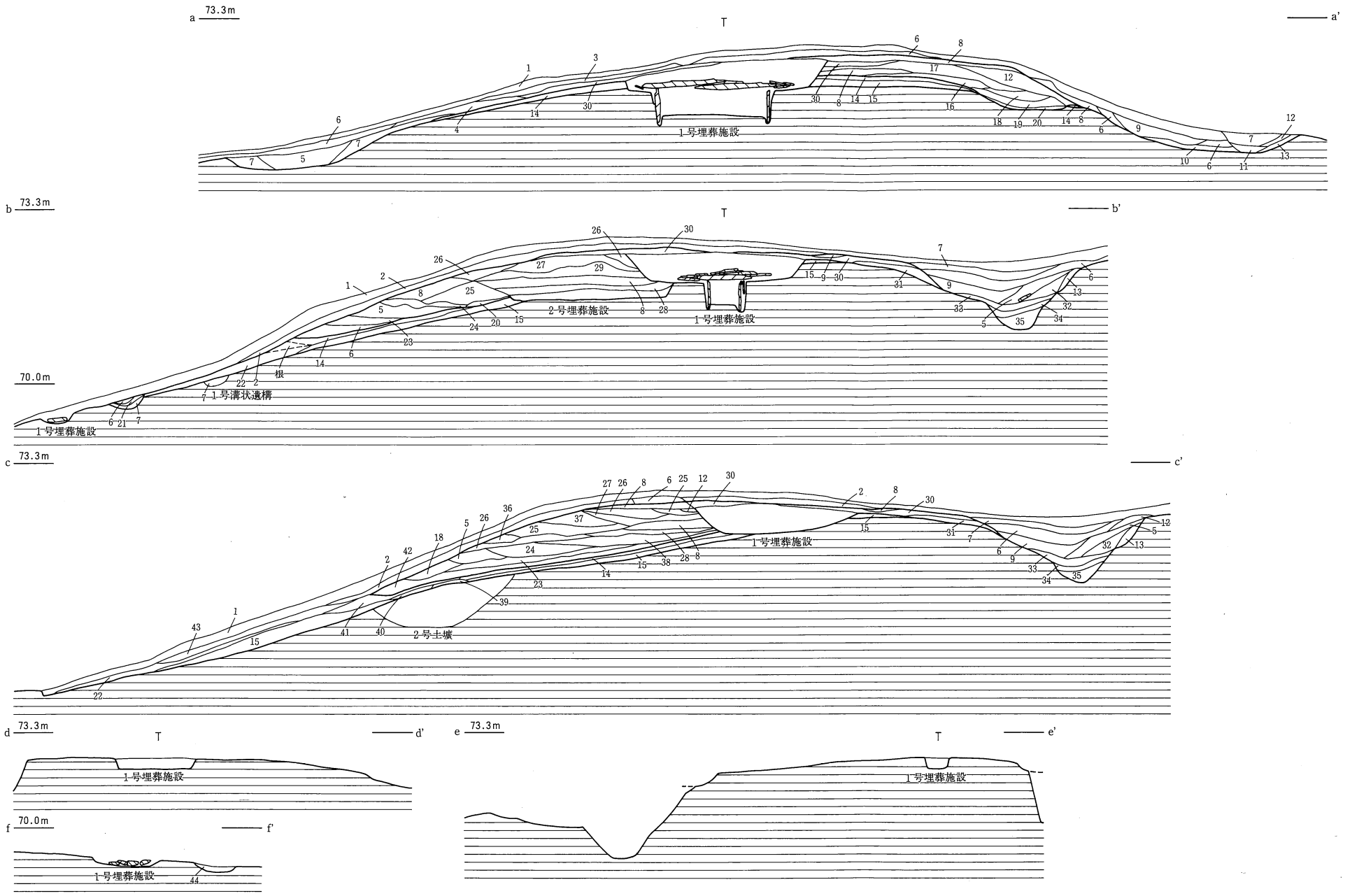
第5図　1号・6号・8号墳、1号溝状遺構平面図

調査の結果、平成9年度は6基の円墳（1号墳・3号墳～6号墳・8号墳）を検出した。平成10年度は1基の方墳（10号墳）と3基の円墳（2号墳・7号墳・9号墳）を検出した。

遺構の測量は国土座標による4mメッシュを組み、古墳の主体部、埋葬施設、遺物出土状況図についてはS＝1／10で、全体の遺構図はS＝1／20で実測した。なお、平成9年度と10年度の接合部分は、平成10年度の7号墳部分の測量で重ね合わせた。調査地の調査前後の地形測量は平板を使用し、S＝1／100、25cm毎の等高線で測量した。

1　遺構

調査の結果、調査区北側の丘陵尾根に方墳の10号墳が所在し、方墳の南側で調査区中央部の丘陵尾根最大幅部分に大型の円墳である7号墳を配して、南東及び南西の尾根筋に8基の円墳が存在する古墳群を検出した。10基の古墳のうち、中心主体の埋葬施設を検出した古墳は、側溝から南東に位置する1号墳と2号墳、そして僅かに



1 表土
2 褐色土(ホーキブロック混入の盛土)
3 褐色土(やや黒ずんだ盛土)
4 暗褐色土
5 淡黒褐色土
6 黒茶褐色土
7 茶褐色土
8 暗黄褐色土
9 黒褐色土
10 黄褐色土
11 淡黒茶褐色土
12 暗茶褐色土
13 明褐色土
14 黒茶褐色土(旧地表下層)
15 暗茶褐色土(粘質土ローム土)
16 明黄褐色ローム混合土(ホーキブロック多く混入する)
17 黒茶褐色土(褐色ロームブロック混入盛土)
18 暗茶褐色土(茶褐色土とホーキブロック黒褐色土混合土)
19 暗茶褐色土(黄褐色土を多く含む)
20 暗茶褐色土(ホーキブロック土と黒茶褐色土を多く含む)
21 暗黒灰色土
22 茶褐色粘質土
23 暗淡茶褐色土(細かなホーキブロック多く含む)
24 黒色土
25 黄褐色土(ホーキブロック含む)
26 暗褐色土(ホーキブロック少量含む)
27 明黄褐色土(ホーキブロックわずかに混入)
28 暗黄褐色土(赤褐色粘質土含む)
29 明褐色土(ホーキブロックと茶褐色土含む)
30 暗茶褐色土(地山ホーキブロック混入する漸移層)
31 赤褐色ホーキブロック混入土
32 淡茶褐色土
33 淡黄褐色土
34 茶黄褐色土
35 黄褐色土(水土粒子・大山倉吉軽石含む)
36 暗褐色土(ホーキブロック混入土　やや37より明るい)
37 暗褐色土(ホーキブロック多く含みがちがち)
38 暗赤色粘質土(黒茶褐色土を含む)
39 明褐色粘質土(やや赤褐色をおびる)
40 暗褐色粘質土
41 旧地山面が削られた暗黒茶褐色土
42 黒茶褐色土(旧地表上で黒色が濃い)
43 茶褐色土(旧地表下の漸移層か？)
44 暗黒灰色土

0　5 m
(1：100)

第6図　1号・6号・8号墳、1号溝状遺構断面図

墳丘が残っていた６号墳と８号墳・９号墳の５基だけでけであった。なかでも１号墳と２号墳は、斜面による流出が見られるものの、古墳墳丘もほぼ残存していた。また墳丘外の埋葬施設は、１号墳で１基・７号墳で６基をそれぞれ検出した。なお、丘陵の尾根筋に存在する３号墳～５号墳・７号墳・９号墳・10号墳は、いずれも古墳の墳丘は遺存せず周溝の検出によって古墳と確認したものである。

遺物は、全体的に少なく、古墳周溝内で検出した供献土器や墳丘からの転落遺物、そして１号墳１号埋葬施設・２号墳２号埋葬施設の副葬品だけであった。

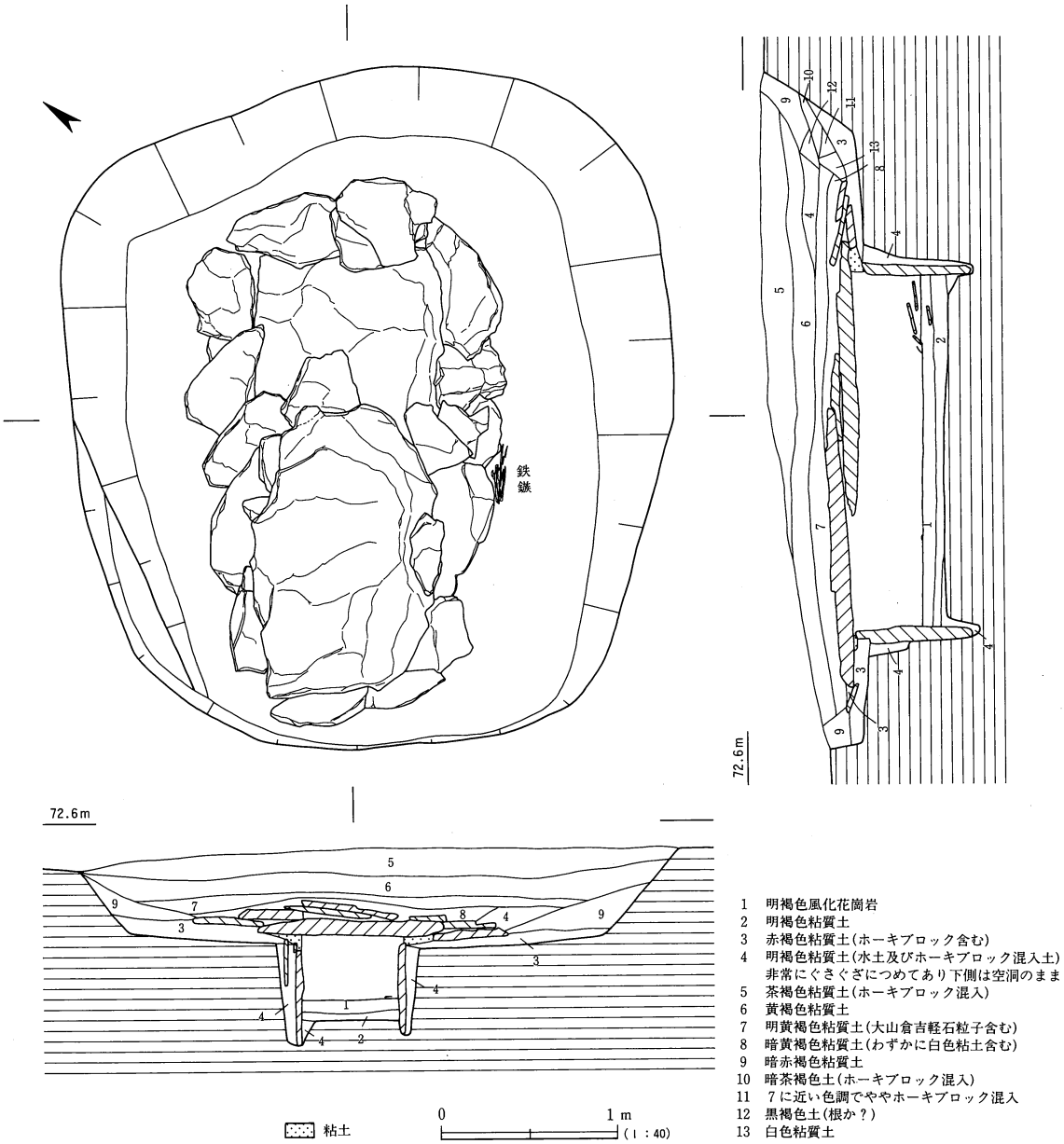
１号墳

墳丘　丘陵尾根の調査区の中央付近から、南東方向に小さく派生する小丘陵の肩部に所在し、７号墳周溝から南東15ｍに位置する。側溝から南東は畑地の開墾がおよんでおらず、この尾根は自然地形が残る斜面であった。このため１号墳は分布踏査の時点で確認されており、２号墳とともにこの遺跡で墳丘を残す古墳の一つであった。調査前の墳丘は、直径約15ｍの円墳であった。遺存する墳丘の高さは、地形の低い南東側から測ると約1.8ｍあり、丘陵の基部側の北西側では約0.8ｍであった。調査後の墳丘は、東西径約15.6ｍ・南北径約14.5ｍを測り、墳丘の北側を巡る周溝を含めると東西径約20.5ｍ・南北径約15.0ｍを測る。墳丘の高さは、北側周溝の底部から墳頂まで約1.6ｍを測り、西側周溝の底部から約2.2ｍを測る。墳丘の盛土は、丘陵尾根斜面に造られた古墳であることから、墳丘の北西では約0.2ｍ、墳丘の南東側では最大約1.2ｍの盛土が認められた。盛土は、墳丘の北側を巡る周溝を掘り下げて得られたソフトローム土以下の粘質土をその材料として、墳丘の中心部から縁辺部へと交互に盛り上げていることが判明した。

なお、墳丘盛土の除去後に墳丘の北側から東側にかけての約１／２周に幅約1.8ｍ、検出面からの深さ約0.5ｍの墳丘下周溝を検出した。墳丘の南東側部分では斜面の状況から周溝の輪郭は消失する。このわずかに検出した墳丘下周溝の輪郭から、全体を復元すると直径約15ｍの周溝が復元でき、この周溝の中央に墓壙だけの２号埋葬施設が位置する。この関係から古墳築造にあたっては当初、この墳丘下に検出した周溝と２号埋葬施設で築造されはじめたが、何らかの理由により１号墳の周溝と１号埋葬施設への切り替えがなされたものと考えられる。

周溝　周溝は、基本的には墳丘の丘陵からの切り離し溝で、丘陵斜面の高い墳丘北西側に半円状に存在し、尾根の低い南東斜面には存在しなかった。北西側の周溝は、墳丘肩部で幅約3.5ｍ・底面約0.4ｍ・深さ約1.0ｍを測り、断面形はゆるやかなＶ字状を呈する。西側は墳丘肩部で幅約3.0ｍ・底面約1.2ｍ・深さ約0.5ｍを測り、断面形は底面の幅の広いＵ字状を呈する。北側の周溝底面には、周溝内埋葬施設が存在しており、この埋葬施設の築造によって本来の周溝の規模が拡張している。こうした状況から、周溝は北西からハ字状に開く平面形である。周溝北西部には集石がある。周溝南西部で壺（１）が出土した。

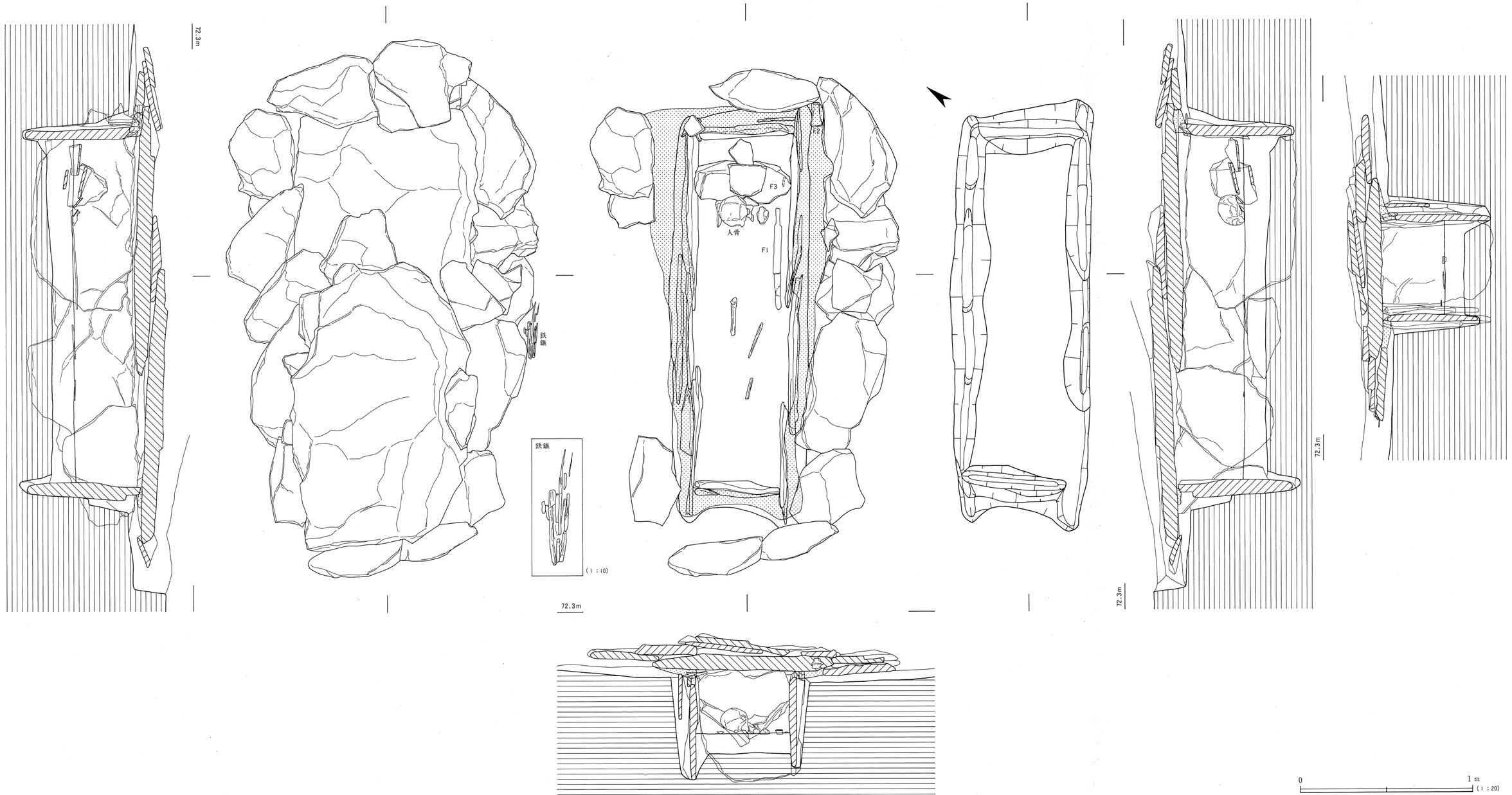
１号埋葬施設　墳丘頂部のやや北西側に位置する、主体部の箱式石棺墓である。わずかに流入土が棺内を覆うものの、ほぼ完全な形で検出した。埋葬施設は、墳丘盛土の暗黄褐色土層及び暗茶褐色土層から掘り下げられた２段掘りの墓壙で造られている。石棺の主軸はＮ－37°－Ｅで、丘陵斜面の等高線に平行する。蓋石は、大型の板石２枚からなり、両側石の外側には蓋石の高さを保つため板石を敷く。特に石棺南東側は側石に沿うように５枚の石が連続して並ぶ。さらに蓋石の隙間は小板石で覆い、全体を白色粘土で密閉する。石棺規模は、内法で長さ2.00ｍ、幅は北東小口0.65ｍ・南西小口0.56ｍを測り、深さは側石の上面より棺底まで0.35ｍ前後である。北東小口に平石５枚を重ねるようにＶ字に組んだ枕があり、頭位は北東である。石棺の構造は、北東・南西両小口に１枚石の板石を立て、両側石が小口石を挟み込むように組む。側石は両側とも大きさの異なる３枚の板石からなる。棺床は、墓壙掘り方底部から約12cmほど砂まじりの黄褐色粘土を敷く。石棺内より、頭骨と大腿骨などの人骨を検出した。頭骨は、Ｖ字状石枕から南西側にずれた状態で検出した。人骨の性別・年齢等の鑑定結果は項目を立



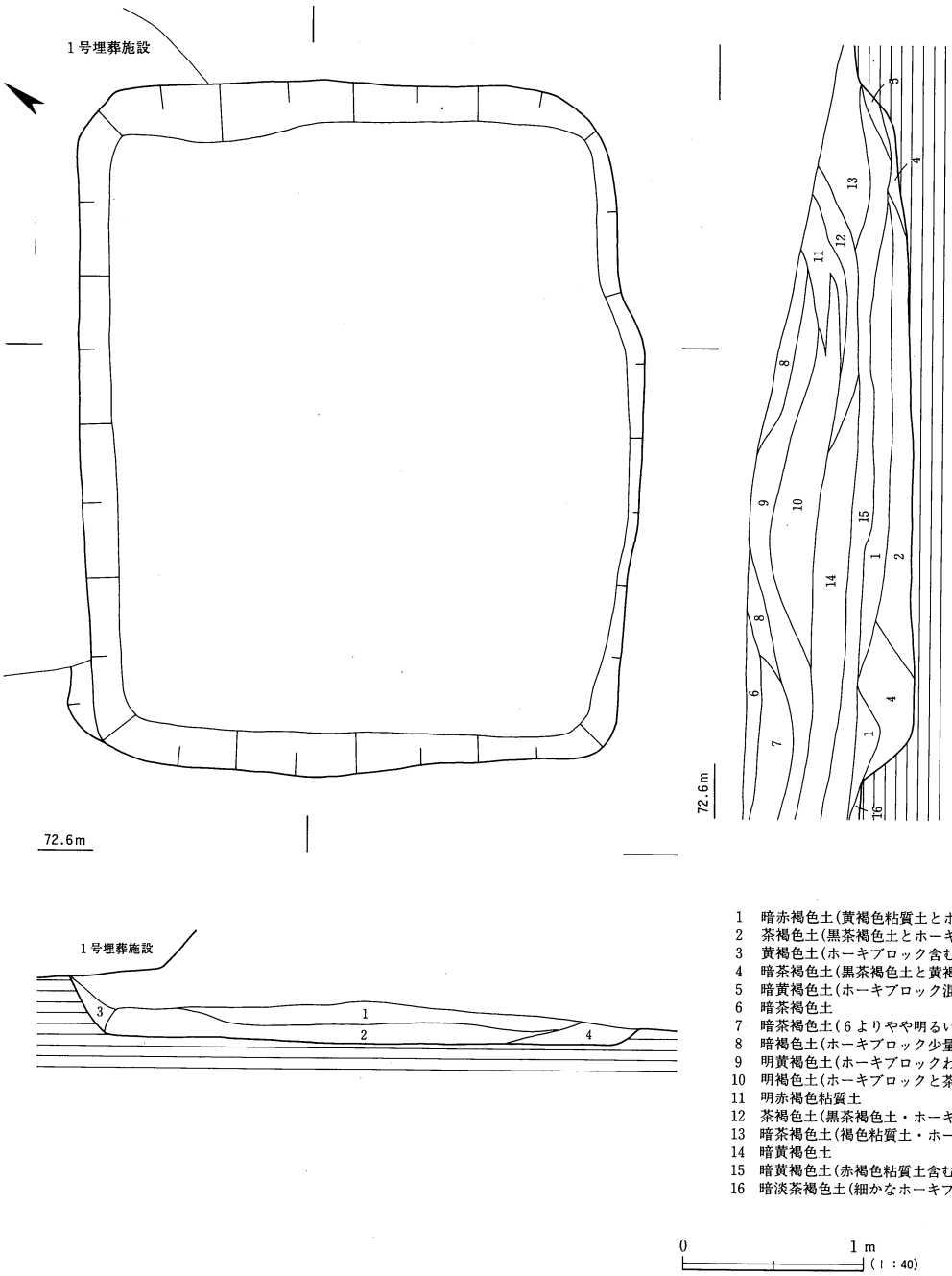
第７図　１号墳１号埋葬施設遺構図１

て後述する。石棺掘り方は、２段掘り墓壙で、上段が隅丸長方形を呈し、規模は長軸約3.5ｍ・短軸約3.3ｍ・深さは棺中央で約0.5ｍを測る。石棺は、この上段の掘り方の中央よりやや北西側に、棺を納める下段の掘り方を有する。規模は長軸約2.3ｍ・短軸約0.8ｍ・深さ約0.7ｍを測り、床面はほぼ平坦で、両小口と両側石部分には石棺材の板石を固定する溝を穿っている。石棺内には、鉄剣１振（Ｆ１）、石枕下で刀子（Ｆ３）が副葬され、棺外の蓋石下に鉄斧（Ｆ２）、蓋石に沿って鉄鏃が供献されていた。

２号埋葬施設　１号埋葬施設より先に掘り下げられた中心主体部の掘り方のみの墓壙である。墳丘の築造段階で斜面の低い南東側を暗黄褐色土・黄褐色土で円形に盛り土した後、この墓壙を掘り下げている。しかし埋葬施設としてこの掘り方を利用せず、さらに墳丘盛土を盛り上げる。埋葬施設の掘り方とする場合には、この墓壙掘り方底部に棺の掘り方を穿ち、２段掘り墓壙とするのが通例である。この掘り方と、１号埋葬施設掘り方との比高差は約30cmを測り、２号埋葬施設掘り方のほうが低い。墓壙掘り方の規模は、長軸約3.9ｍ・短軸約3.1ｍ、平面形は長方形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。

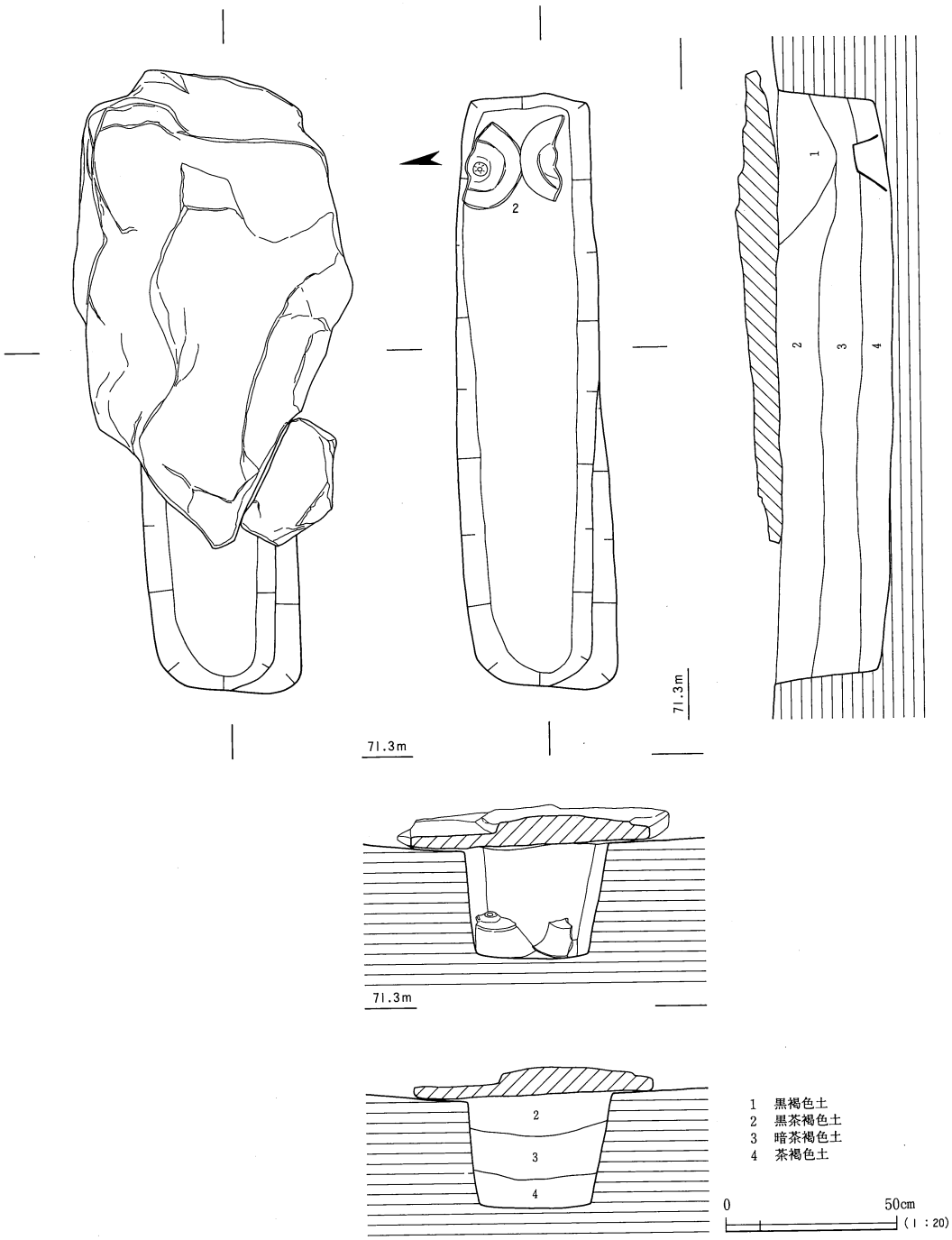


第8図　1号墳1号埋葬施設遺構図2



第9図　1号墳2号埋葬施設遺構図

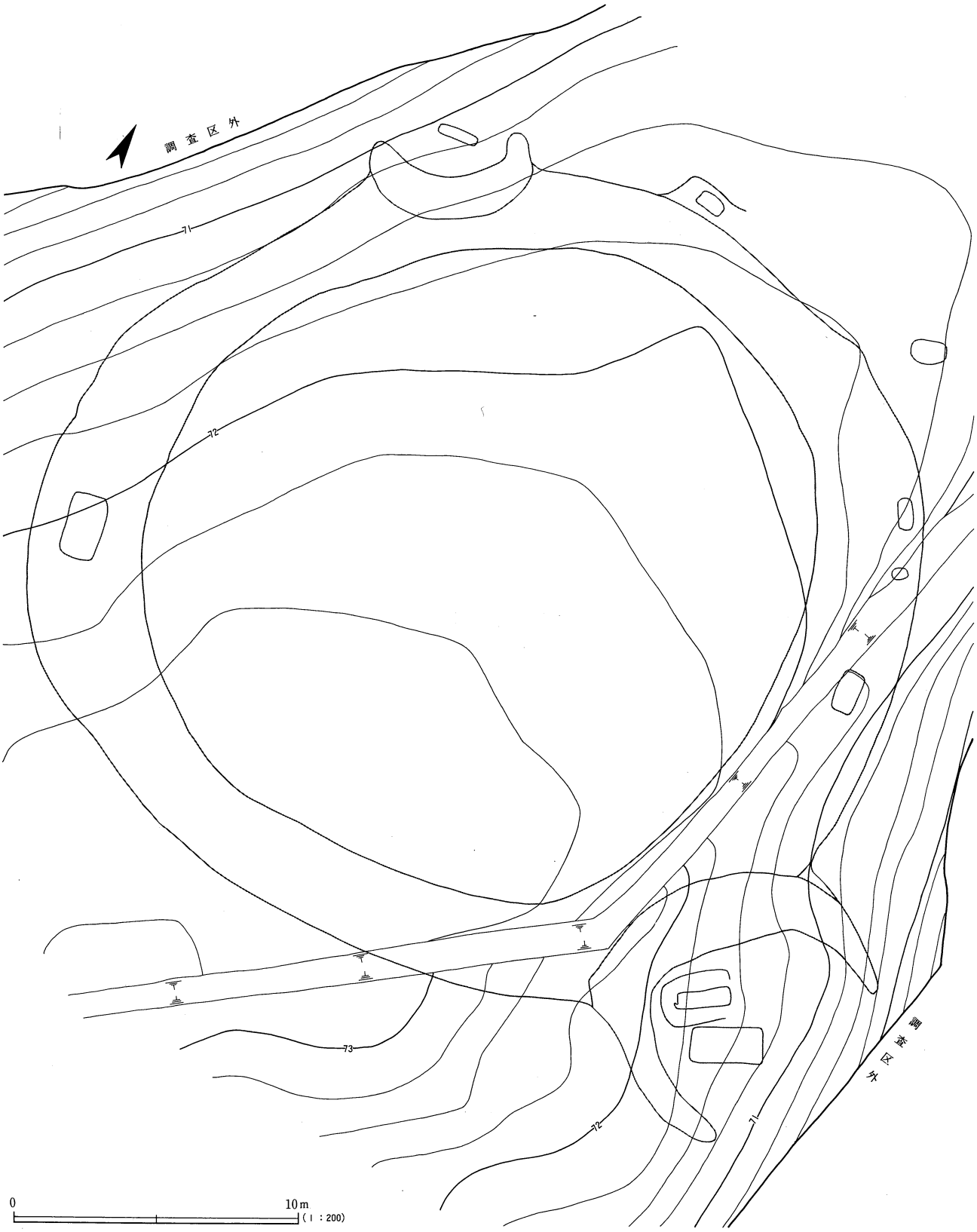
3号埋葬施設　北側の周溝外側を掘り広げた周溝底に位置する周溝内埋葬施設の石蓋土壙墓である。主軸はN－98°－Eで、周溝に平行につくられる。土壙規模は、内法で長さ1.75m・幅0.42m・深さ0.33mを測る。東側小口に大型の高坏の坏部（2）を2分割し、口縁端部をあわせた土器枕があり、頭位は東側であった。土壙は、西側の小口部分0.4mを外して、一枚石の板石で蓋をする。石蓋の規模は長軸約1.3m、短軸約0.8mを測る。副葬品は出土しなかった。しかし、土壙の東側より約1.7m離れた周溝底に高坏6点（3～8）が一括で出土しており、この石蓋土壙墓に供献されたものと考えられる。その内1点（3）は、土器枕に使用された高坏の脚部の可能性が高い。また周溝の断面では、わずかに周溝の北側で周溝が一度埋まってから掘り広げられた痕跡が認められ、この埋葬施設の築造に関連するものと思われる。



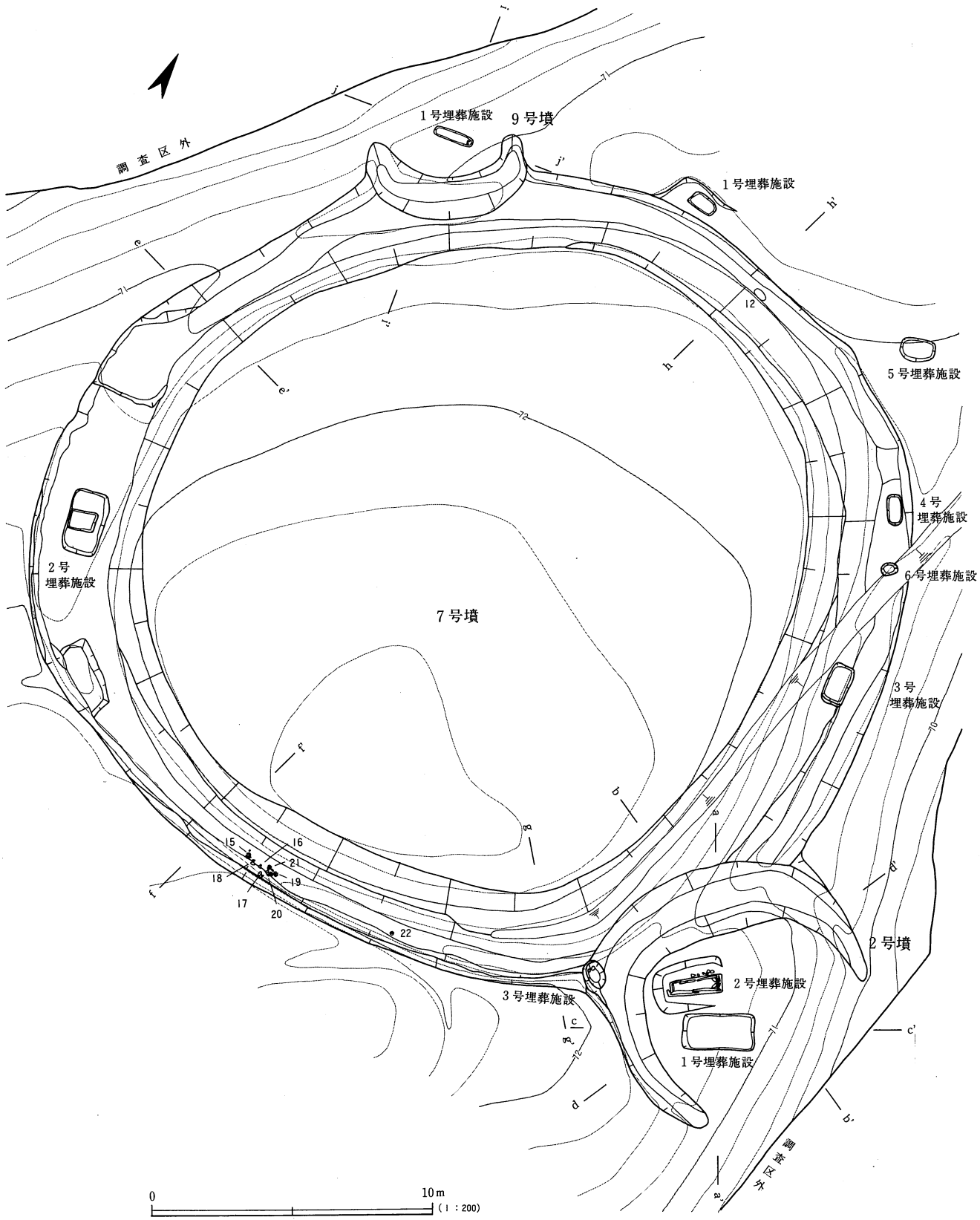
第10図　1号墳3号埋葬施設遺構図

2号墳

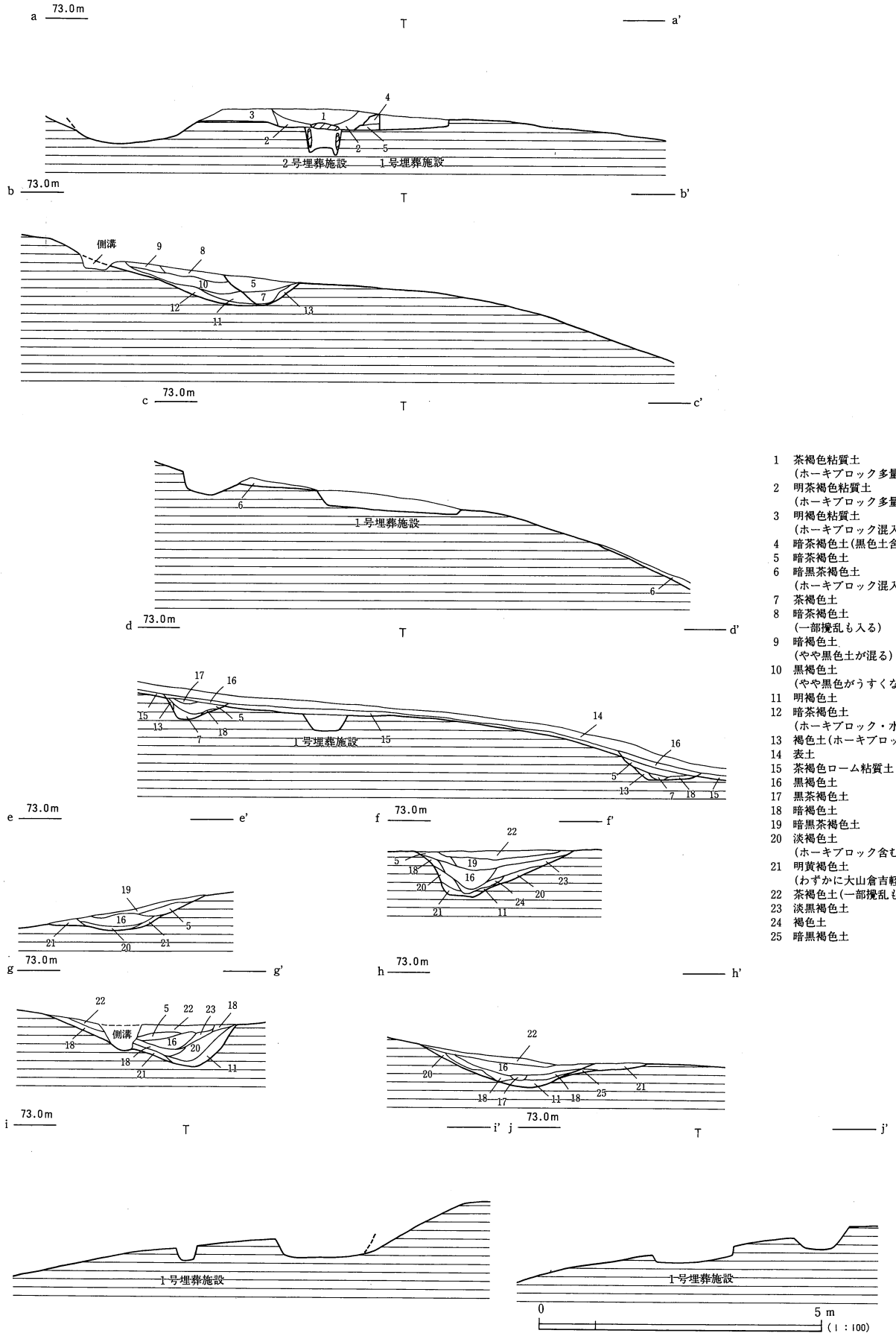
墳丘　丘陵尾根の調査区中央付近の東側斜面肩部に所在し、1号墳周溝の北側約9mに位置する。側溝の東側に所在し、旧地形が残る斜面に存在する。調査前には、墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなく、分布踏査では確認できなかった。浅い表土を除去すると、7号墳の周溝に重なるように、丘陵の高い南側と低い北側に黒褐色土が半円状に巡っており、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の東側斜面部分には盛り土は無く、築造当初から無かったものと思われる。墳丘の規模は遺存する周溝から復元して、南北径約7.2m、東西径約5mを測り、周溝を含めた規模は南北約9.4m、東西約7.6mを測る。墳丘は、表土除去後直ちに黒褐色土及び茶褐色ローム粘土になり、黒褐色土は旧地山面と考えられ墳丘盛土は遺存しなかったものと判断する。



第11図　2号・7号・9号墳調査前地形測量図

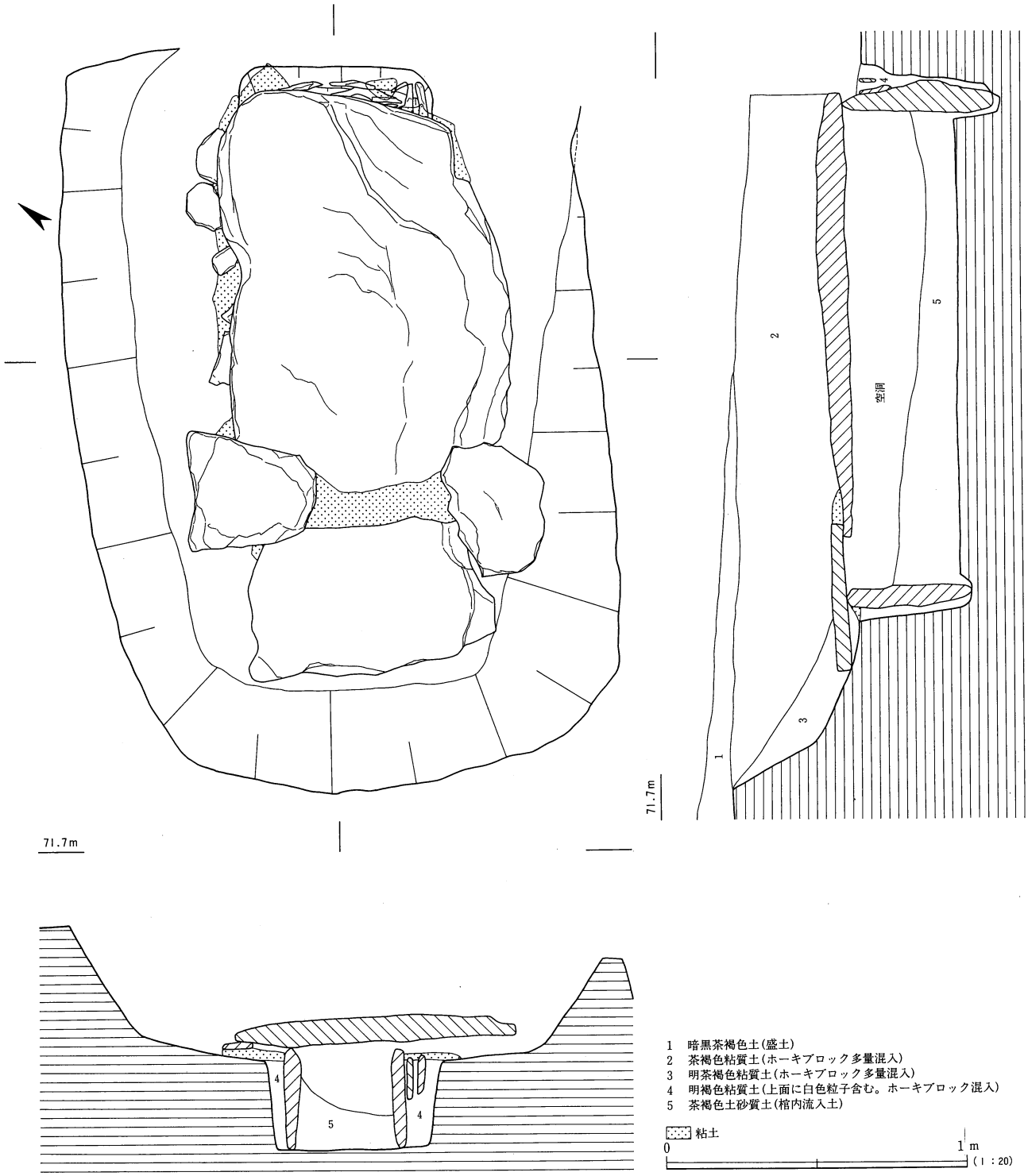


第12図　2号・7号・9号墳平面図



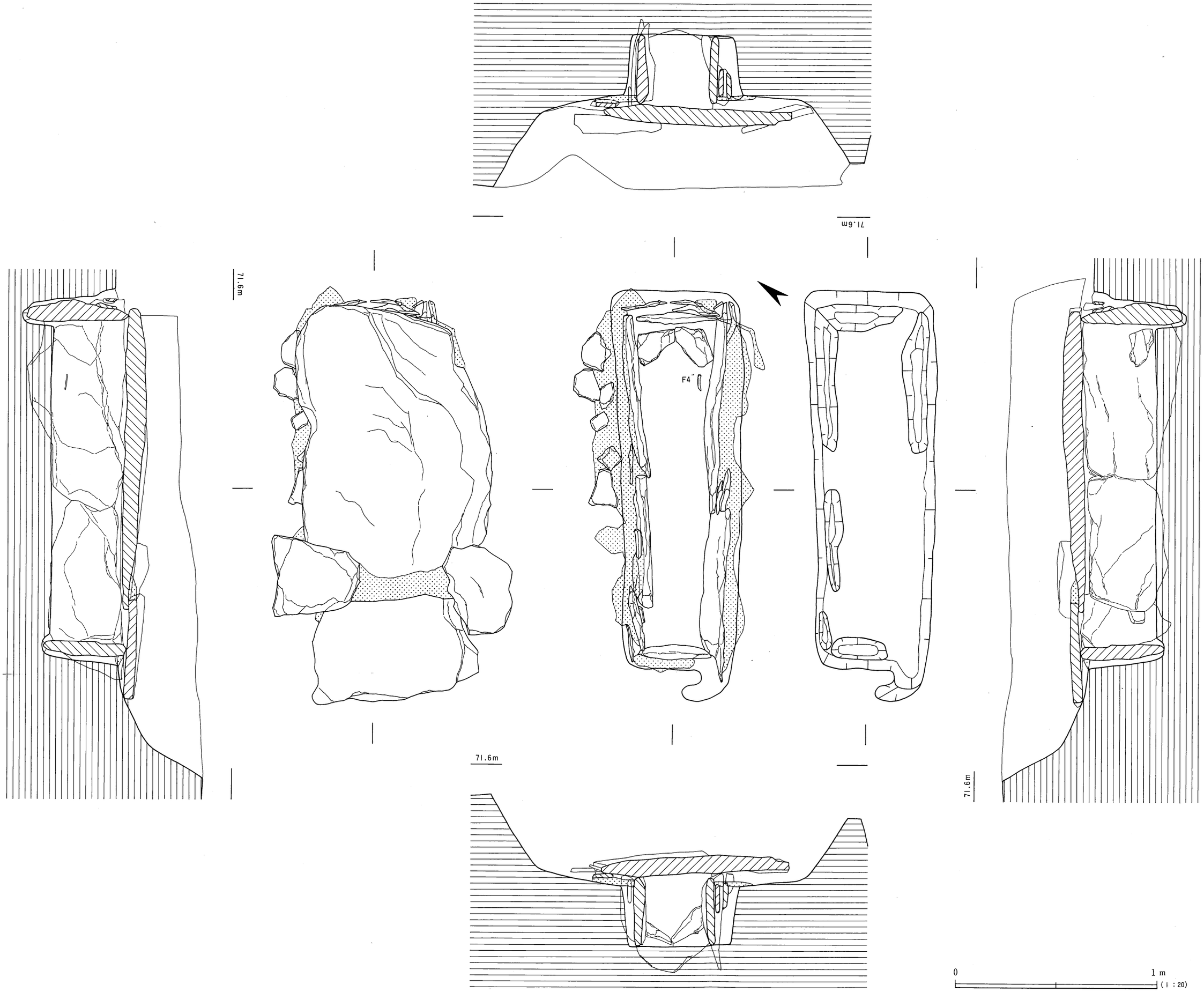
1 茶褐色粘質土
(ホーキブロック多量混入)
2 明茶褐色粘質土
(ホーキブロック多量混入)
3 明褐色粘質土
(ホーキブロック混入)
4 暗茶褐色土(黒色土含む)
5 暗茶褐色土
6 暗黒茶褐色土
(ホーキブロック混入)
7 茶褐色土
8 暗茶褐色土
(一部攪乱も入る)
9 暗褐色土
(やや黒色土が混る)
10 黒褐色土
(やや黒色がうすくなる)
11 明褐色土
12 暗茶褐色土
(ホーキブロック・水土含む)
13 褐色土(ホーキブロック混入)
14 表土
15 茶褐色ローム粘質土
16 黒褐色土
17 黒茶褐色土
18 暗褐色土
19 暗黒茶褐色土
20 淡褐色土
(ホーキブロック含む)
21 明黄褐色土
(わずかに大山倉吉軽石粒子含む)
22 茶褐色土(一部攪乱もあり)
23 淡黒褐色土
24 褐色土
25 暗黒褐色土

第13図　2号・7号・9号墳断面図



第14図　2号墳2号埋葬施設遺構図1

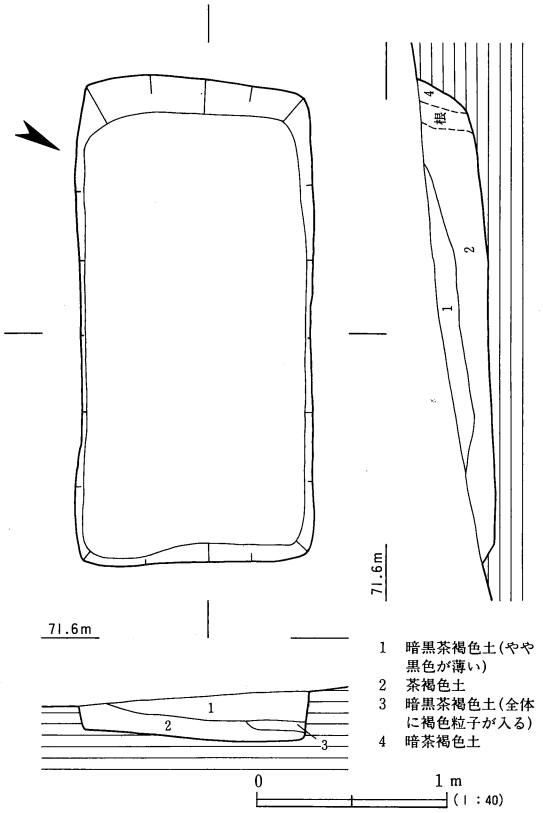
周溝　周溝は、墳丘斜面の高い側を中心に半円状に存在し、斜面の急な墳丘東側には存在しない。周溝の規模は、7号墳周溝と重なる西側が最も広く、幅約3.5m・深さ約0.5mを測り、南側で幅約1.1m・深さ約0.4m、北側で幅約1.4m・深さ約0.3mを測る。断面形は、幅広いU字状からなり、埋土は3層からなる。墳丘の南西側の周溝底に周溝内埋葬施設の土壙墓を造る。



第15図　2号墳2号埋葬施設遺構図2

１号埋葬施設　墳丘北側の中央部に位置する中心主体部の土壙墓である。墳丘削平時の攪乱を受けており、土壙墓の基底部付近のみの検出であった。主軸はＮ－60°－Ｅで、丘陵斜面にほぼ直交するように設置される。墓壙規模は、内法で長さ2.56ｍ・幅（中央部）1.22ｍ・深さ（南側）0.30ｍを測る。墓壙埋土は３層からなり、木棺等の痕跡は検出できなかった。副葬品の出土はなかった。

２号埋葬施設　１号埋葬施設の西側に位置し、墳丘の西側に所在する中心主体部の箱式石棺墓である。１号埋葬施設の西側の一部を削平するように造られており、２段掘りの墓壙を有する。墓壙上面が一部削平をうけるものの、埋葬施設は完全な形で遺存していた。主軸はＮ－54°－Ｅで、丘陵斜面の等高線にほぼ直交する。蓋石は大きな平石２枚を重ね合わせ、隙間を小石と粘土で埋める。石棺規模は、内法で長さ1.61ｍを測り、幅は東小口で0.41ｍ、西小口で0.35ｍを測る。深さは側石の上面より棺底まで0.35ｍを測る。東小口部に平石２枚をＶ字状に側石に立てかけて組んだ枕があり、頭位は東側である。石棺の構造は、東西両小口に１枚石の板石を立て、南北両側石が小口を挟み込むように組まれる。側石は北側が３枚、南側４枚の板石からなり、隙間を小さい平石で塞ぐ。棺床は、石棺掘り方とほぼ同じ高さで造られ、砂などは敷いていない。石棺掘り方は、２段掘り墓壙であるが、東側部分が削平を受ける。墓壙は、上段が隅丸長方形を呈し、規模は長軸約2.8（推）ｍ、短軸約1.8ｍ、深さ約0.4ｍを測る。さらに上段中央に長軸約1.9ｍ、短軸約0.6ｍ、深さ約0.3ｍの石棺掘り方をもつ。床面は平坦で、両小口と両側石に石材を固定する溝を穿っている。副葬品は、石枕付近で刀子が１点（Ｆ４）出土した。



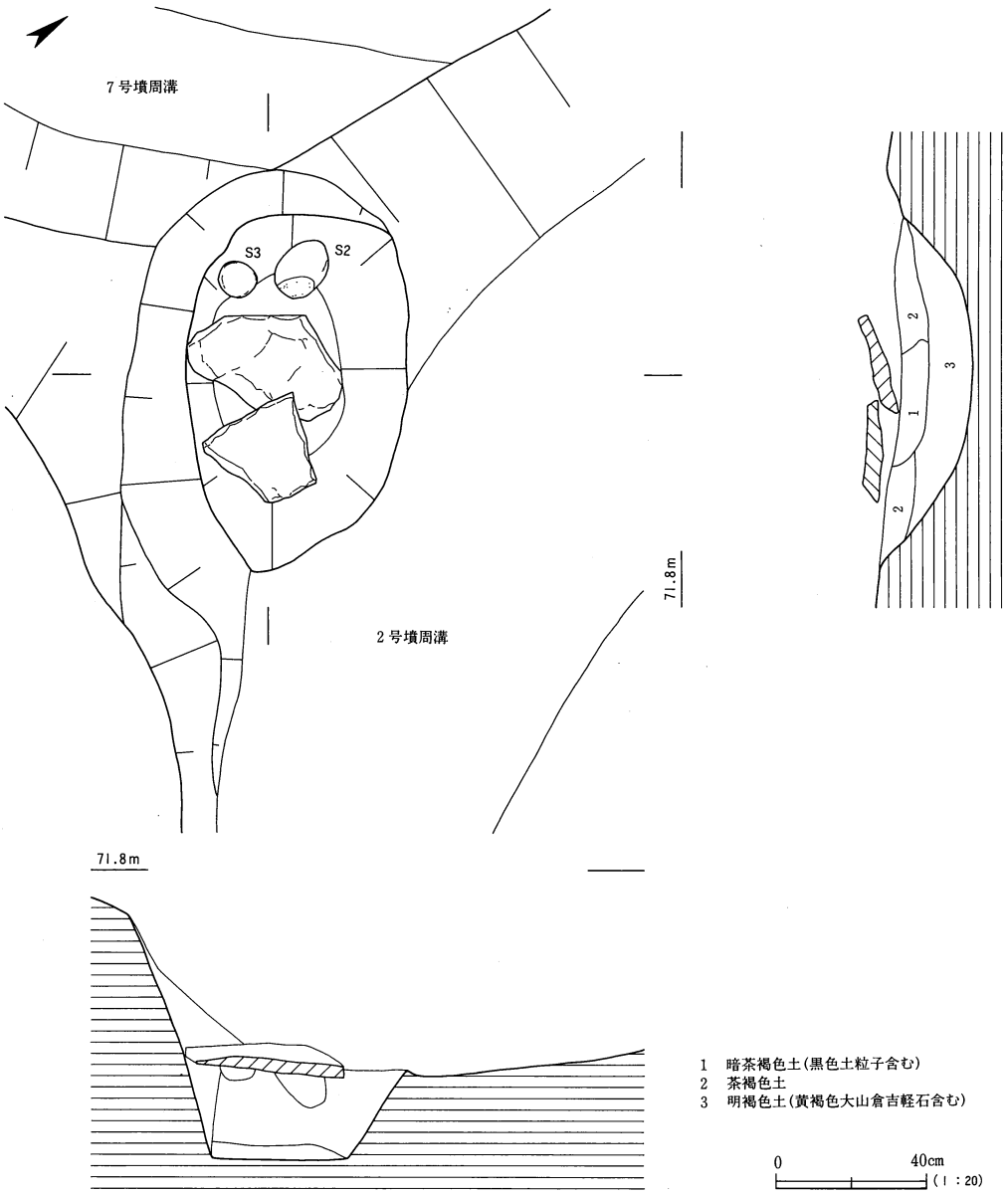
第16図　２号墳１号埋葬施設遺構図

３号埋葬施設　南西側の周溝外側壁を掘り広げた周溝底に位置する周溝内埋葬施設の土壙墓である。主軸はＮ－56°－Ｗで、周溝に平行につくられる。土壙規模は、内法で長さ約1.0ｍ・幅約0.7ｍ・深さ約0.3ｍを測る。北西小口の肩部に大小の敲石を２個（Ｓ２・３）枕のようにならべ、頭位は北西側と考えられる。土壙中央部に2枚の板石をならべ蓋石とするが土壙全体は覆わない。副葬品は出土しなかった。

３号墳

墳丘　調査区南側の丘陵尾根肩部に所在し、１号墳の西側、５号墳と６号墳に挟まれるように位置する。側溝が墳丘の中央部を横断する。調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなく、分布踏査では確認できなった。浅い表土を除去すると、西側で５号墳と、北側で６号墳とそれぞれ重なるように、黒褐色土が巡る周溝を検出し、封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して、南北径約7.6ｍ・東西径約7.1ｍ、周溝を含めた規模は南北約9.8ｍ・東西約8.6ｍを測る。中心主体部などの埋葬施設は検出しなかった。

周溝　周溝は、基本的には墳丘に沿って全周するが、丘陵斜面にかかる東側は、遺存状況が悪く非常に浅い。規模は、幅1.1～1.4ｍ・深さ0.1～0.3ｍで墳丘を巡る。断面は、ゆるやかなＵ字状を呈し、埋土は２層からなる。周溝内からは、埋葬施設や供献土器などの検出はなかった。また周溝が重なる古墳との関係は、３号墳を切って５号墳と６号墳が造られる。

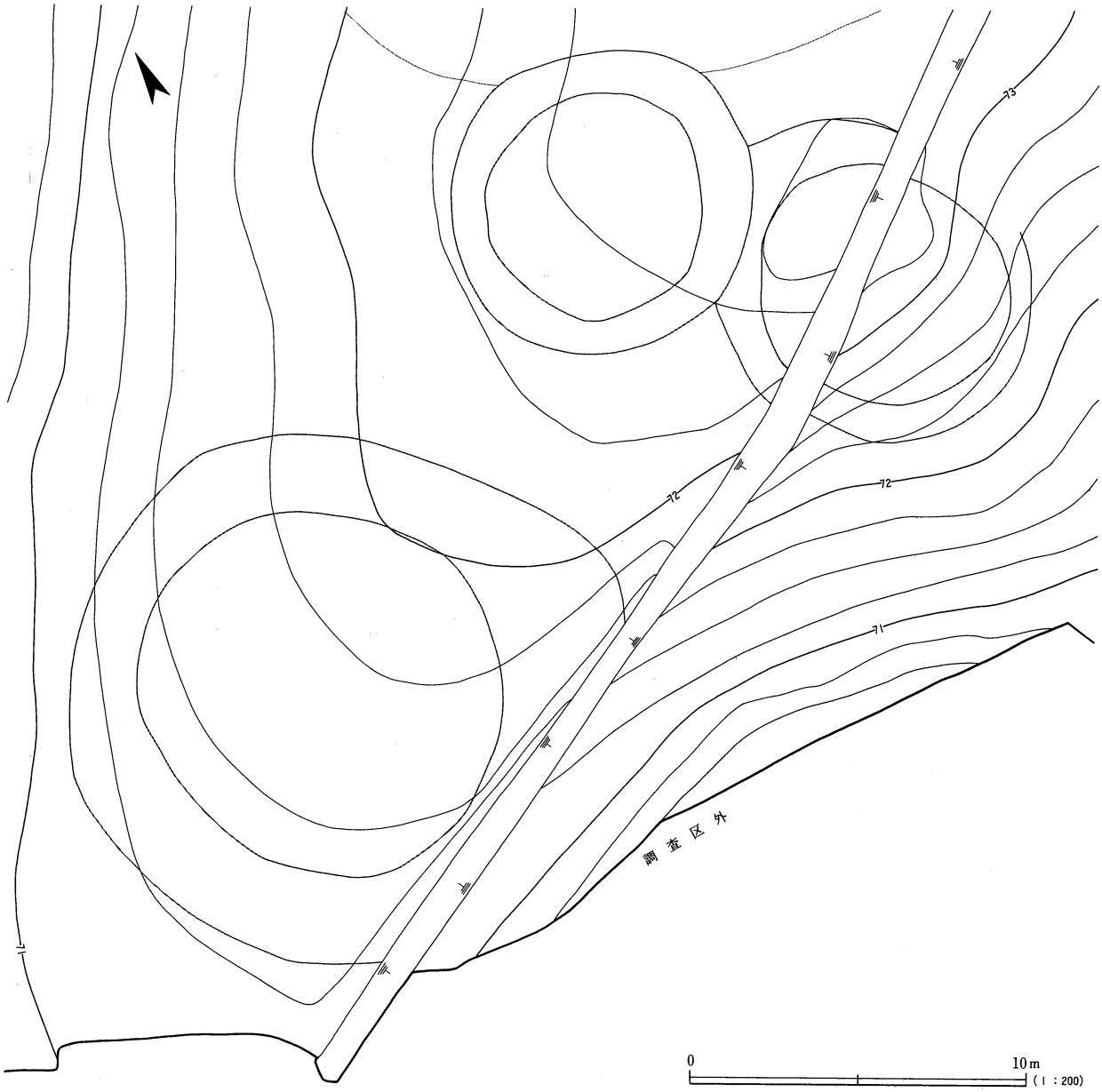


第17図　2号墳3号埋葬施設遺構図

4号墳

墳丘　調査区南側の端に位置し、丘陵尾根の鞍部付近に所在する。北東に隣接する5号墳とは約5mの距離を有する。古墳の大部分が側溝から西側に位置しており、墳丘のほとんどが耕作による削平を受ける。このため調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなく、予備調査でもその存在を確認することはできなかった。浅い表土を除去すると黒褐色土が尾根をほぼ全周する周溝を検出し、墳丘封土を失った円墳であることを確認した。墳丘東側は、側溝と重複し周溝部分が削平されるため、はっきりとは検出できなかった。墳丘の規模は、東西径約17.2m・南北径約15.8mであった。中心主体部などの埋葬施設は検出できなかった。

周溝　周溝は、基本的には墳丘裾部で全周するものと考えられる。周溝の規模は遺存する部分で、幅約1.6～4.2m、深さ約0.2～0.8mで墳丘を巡る。東側部分は急激に周溝の幅が広がるが、周溝内埋葬施設などの存在は確認できなかった。周溝南側で甕（9）、北側で鉄片が出土した。

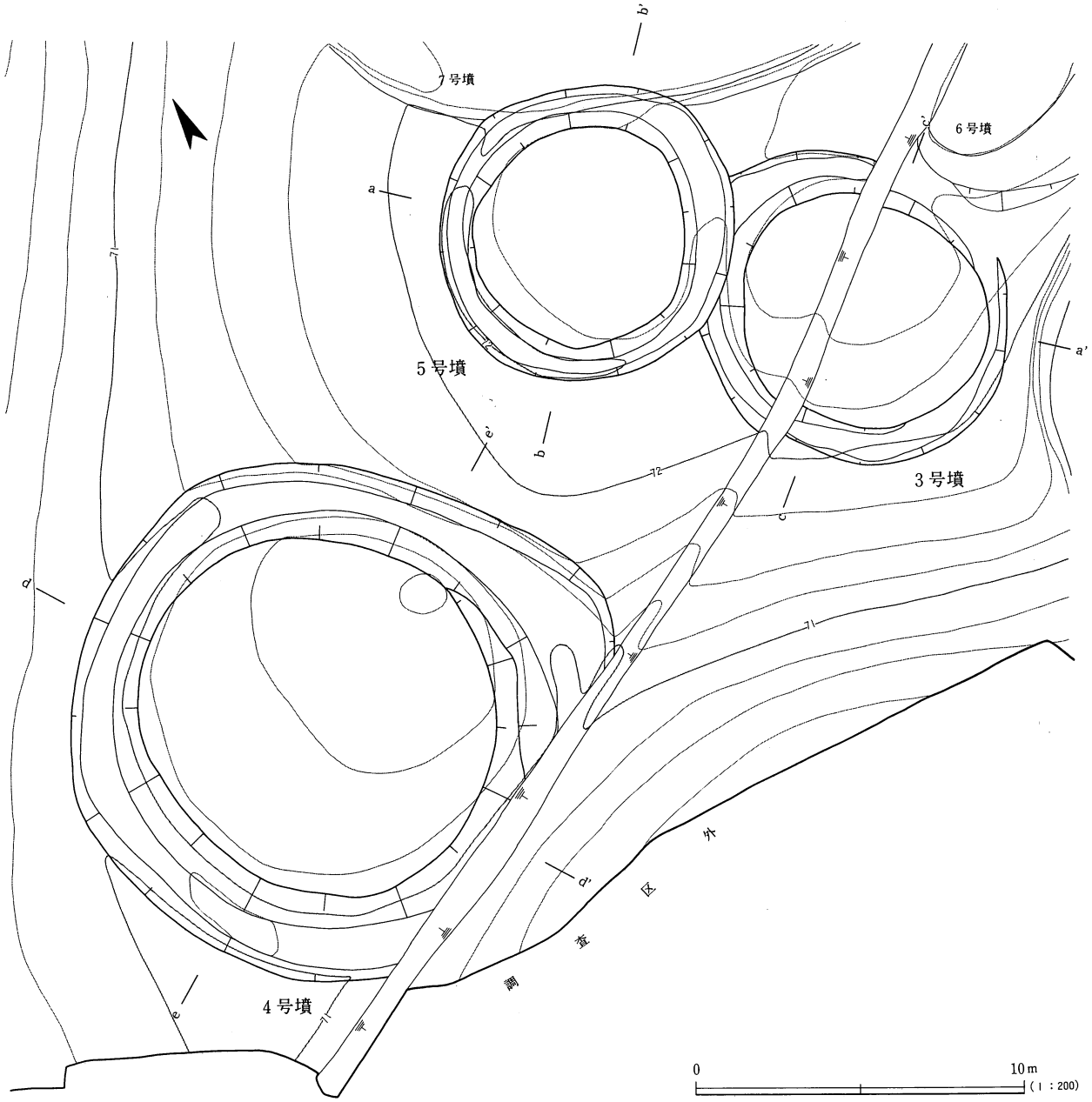


第18図　3号～5号墳調査前地形測量図

5号墳

墳丘　丘陵尾根の中央部に位置し、北側で7号墳周溝と、東側で3号墳周溝と重なるように所在する。墳丘は大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなく、予備調査でも確認できなかった。浅い表土を除去し遺構検出を行うと、黒褐色土が尾根をほぼ全周することを確認し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は東西径約6.7m・南北径約6.5mで、周溝を含めた規模は東西約9.4m・南北約9.1mを測る。中心主体部などの埋葬施設は検出しなかった。

周溝　周溝規模幅約1.1～1.4m・深さ約0.2～0.4mで墳丘を全周する。断面は、幅が広くゆるやかなU字状を呈し、埋土は3層からなる。周溝内には埋葬施設や供献土器は検出しなかった。また重複する古墳との関係は、7号墳及び3号墳の周溝を5号墳が切っている。

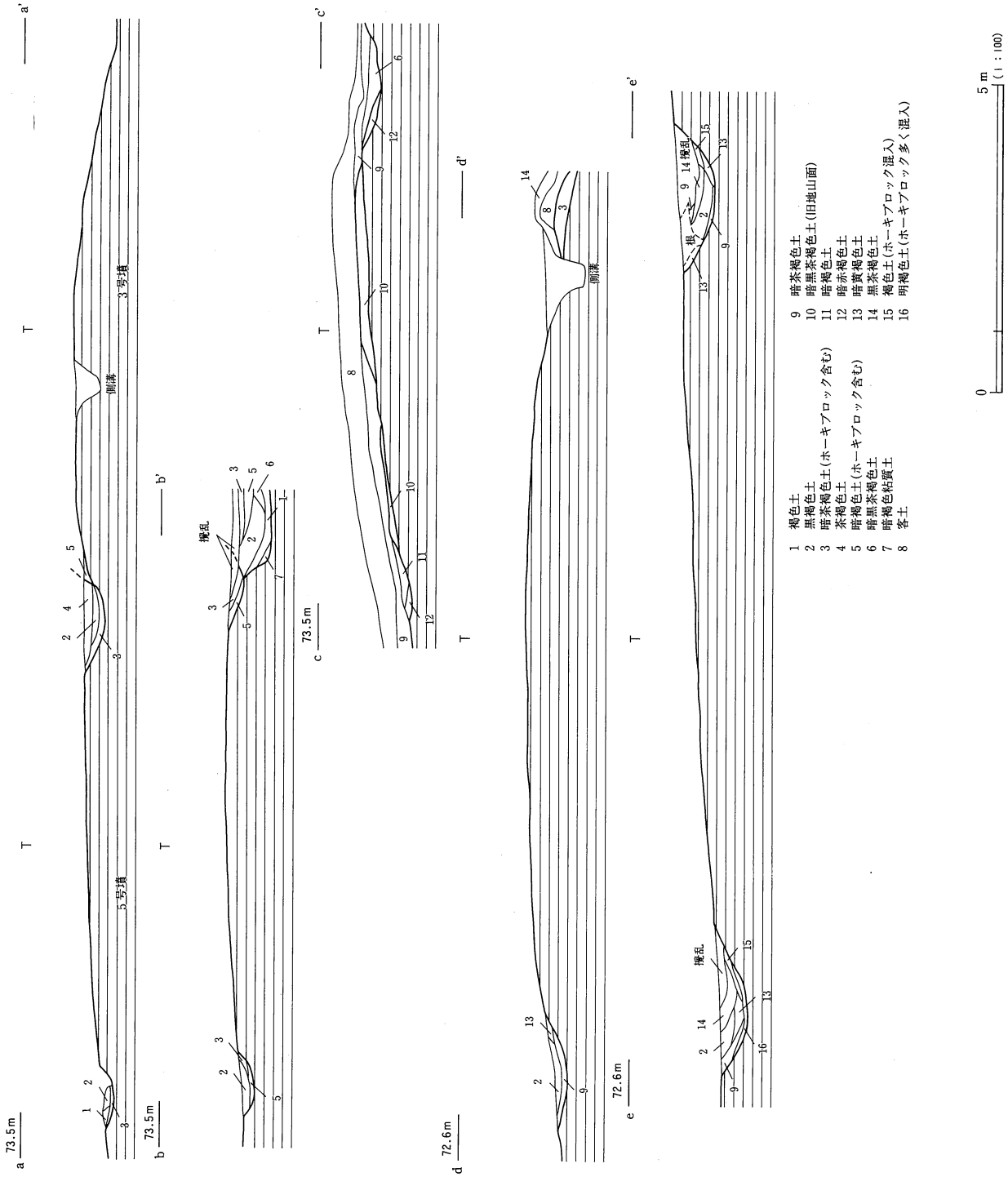


第19図　3号～5号墳平面図

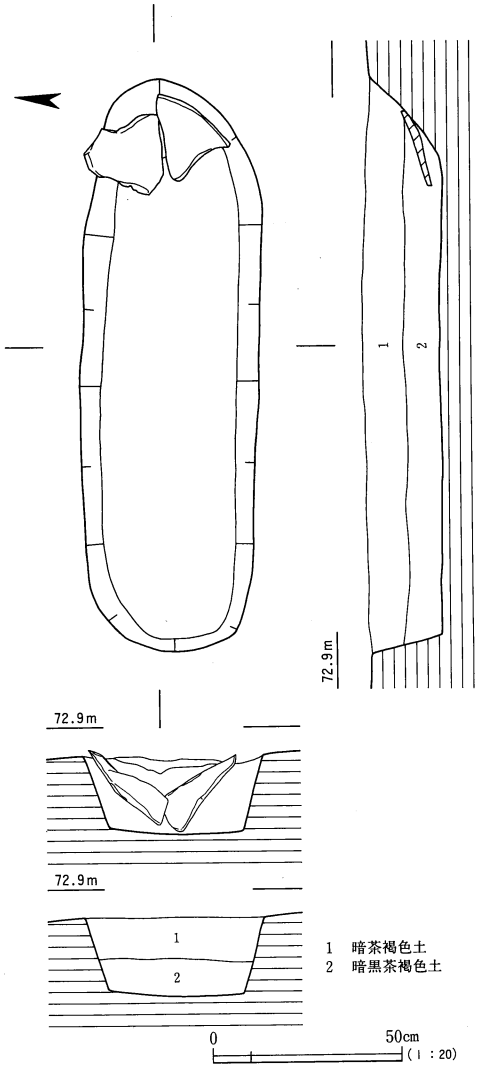
6号墳

墳丘　調査区の丘陵尾根最高所から南西に派生する丘陵尾根の肩部に所在し、北側で7号墳、南側で1号墳に挟まれるように位置する。墳丘の北西側に側溝が走り、この側溝から北西側は耕作による削平を受ける。調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。1号墳の調査に伴って浅い表土を除去すると、やや地形の高まりを確認し、高まりの中央に土壙墓らしき黒色土を確認したことで、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、わずかに残る墳丘の裾から復元して東西径約8.6m、南北径約8.7mを測り、周溝を含めた直径は推定で約10mと考えられる。墳丘は7号墳と1号墳、そして南西に位置する3号墳の間におさまるように造られる。

周溝　周溝は、基本的に墳丘に沿って全周するものと思われるが、1号墳・3号墳・7号墳の3基の古墳それぞれの周溝の間に存在することから、周溝が古墳を全周することは不可能と考えられる。丘陵の尾根筋にあたる西



第20図　3号～5号墳断面図



第21図　6号墳1号埋葬施設遺構図

側は、3号墳周溝と重なり、3号墳の周溝を6号墳が切っている。北側の7号墳との関係は、側溝から北西にあたり、削平が著しく確認は不可能である。周溝の規模は、検出できた部分で幅約1mを測る。

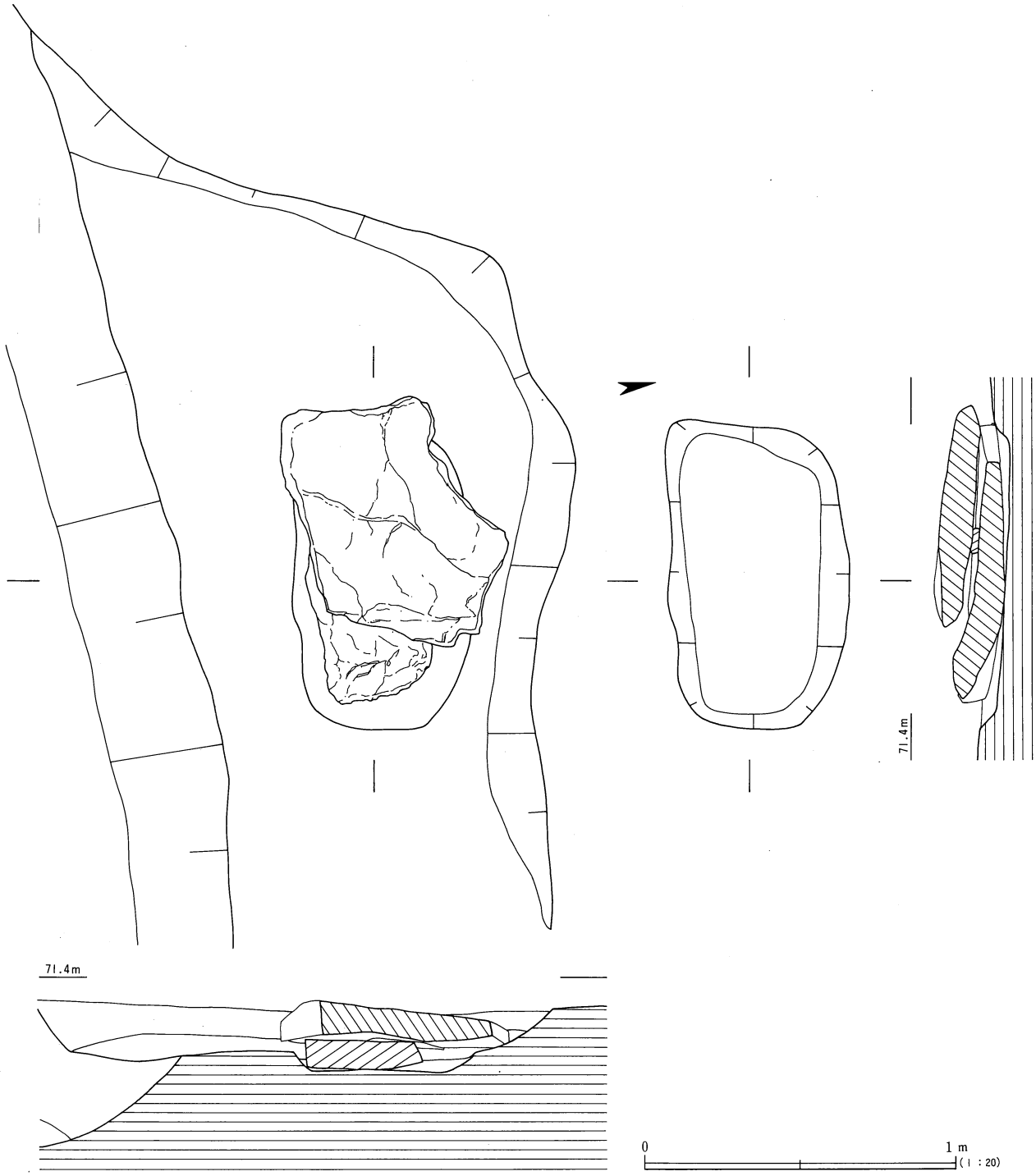
1号埋葬施設　墳丘のほぼ中央に位置する中心主体部の埋葬施設である。遺存する墓壙から考えて石蓋土壙墓と考えられる。非常に遺存状態が悪く、蓋石は墳丘封土の削平とともに失われており、検出時点には存在しなかった。主軸はN－85°－Eで、斜面に平行する。土壙規模は、内法で長さ1.52m、幅0.47m、深さ0.2mを測る。東小口部分に、小板石を土壙側面にたてかけてV字状に組んだ石枕が存在しており、頭位は東側である。土壙の平面形は、小口肩部が丸い隅丸長方形を呈する。土壙内での副葬品の出土はなかった。

7号墳

墳丘　調査区中央部に位置し、丘陵尾根最高部の標高73m付近に立地する。北側で10号墳と、東側から南側にかけて2号墳・6号墳・5号墳と接する。丘陵の東側に所在する側溝によって、墳丘の東側は削平を受ける。調査前は杉や松の植林地であり、墳丘と思われる顕著な地形の高まりは確認できなかった。予備調査において墳丘北側で周溝の一部が検出され古墳の存在は確認されていたが、小規模な円墳と考えられていた。約0.3mの浅い表土を除去すると、丘陵を横断して幅3～4mの黒褐色土の帯が全周しており、墳丘の封土を失った大型の円墳であることを確認した。墳丘の規模は、東西径約24.5m・南北径約24.2mで、周溝を含めた直径は東西30.2m・南北28.6mを測る。墳丘部分は、検出時点の表土直下ですでに黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層）や暗褐色土（ソフトローム土）であり、墳丘盛土や中心主体部等の埋葬施設を含めて大きく削平されていた。

周溝　丘陵尾根を大きく占有して周溝を巡らす。丘陵の東側では、側溝により部分的に削平を受ける。周溝の規模は、遺存部で幅2.5～4.1m・深さ0.35～0.84mで墳丘を全周する。断面形は、墳丘側がゆるやかに立ち上がるV字状を呈し、丘陵斜面の東側から南側にかけてが最も深い。周溝の内外に6基の埋葬施設と3箇所の土器集中区を検出した。この内南側の直口壺（15）と高坏一括（16～21）については供献土器である。周溝西側の2号埋葬施設周辺で刀子2（F6）、鉄片が出土した。また重なり合う古墳との関係は、7号墳が10号墳を切り、2号墳・9号墳に切られている。中でも7号墳東側に位置する2号墳の周溝下に、深く掘られた7号墳の周溝下部が遺存しており、この結果7号墳の周溝がある程度埋没した後に2号墳が築造されたことが判明した。

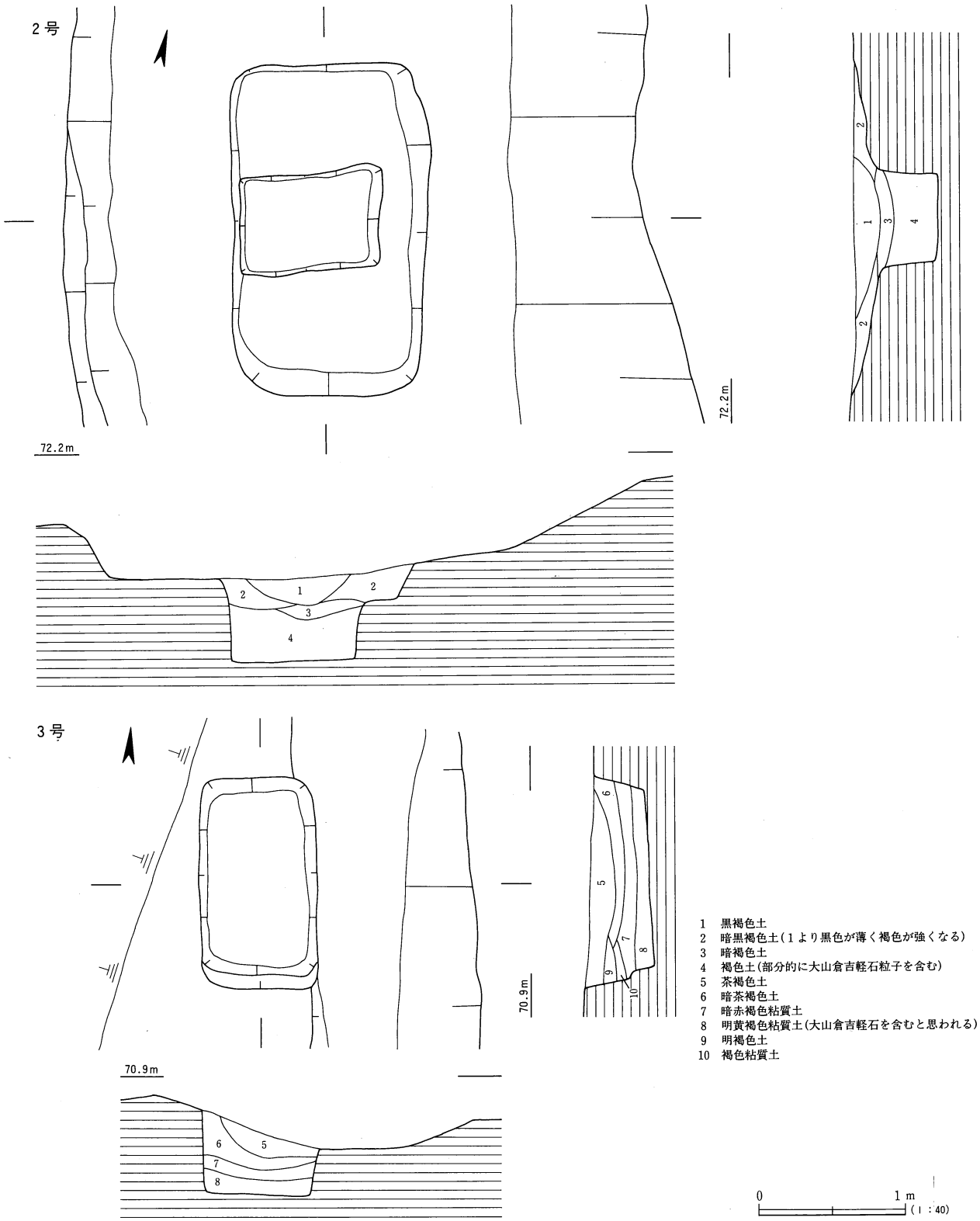
1号埋葬施設　墳丘の北側に位置し、周溝の外肩を一部掘り下げて造られた石蓋土壙墓である。主軸はN－10°－Eで、周溝にほぼ平行する。墓壙規模は、内法で長さ0.98m・幅0.58m・深さ0.05mを測り、平面形はやや不整形な隅丸長方形を呈する。墓壙は、周溝外壁肩部を東西約2.5m・南北約1.0m・深さ約0.2m掘り下げて墓壙とする。墓壙の深さが非常に浅く、また蓋石も土壙全体を覆っておらず、石蓋土壙墓としては疑問が残る。副葬品は出土しなかった。



第22図　7号墳1号埋葬施設遺構図

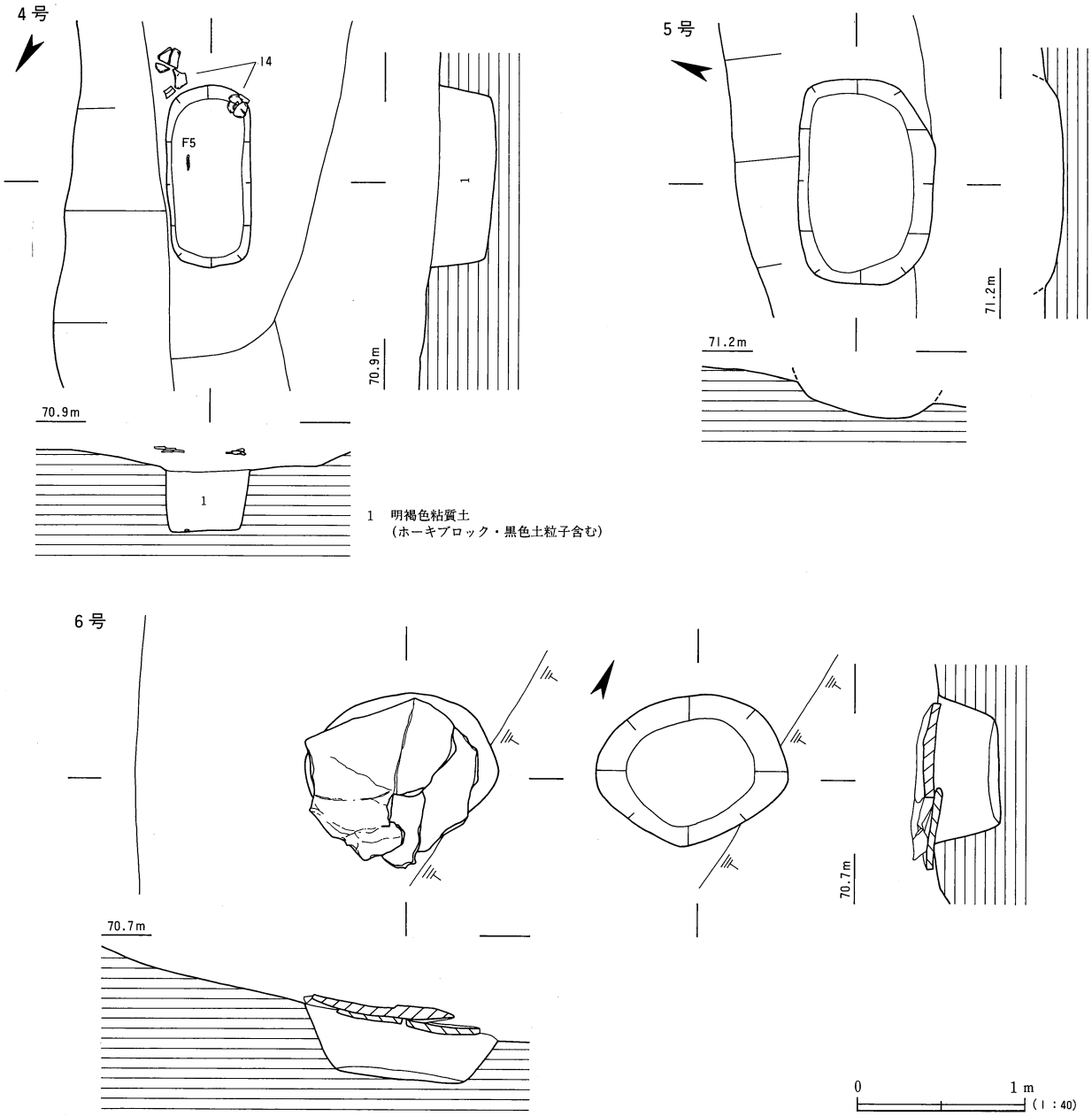
2号埋葬施設　墳丘の南西側周溝底に位置する周溝内埋葬施設の土壙墓で、周溝に平行するように造られる。主軸はN－85°－Eにとり、規模は内法で長さ2.26m・幅1.31m・深さ0.2mを測る。土壙底の中央にはさらに長さ約0.7m・幅約1m、深さ約0.4mの下段の土壙が掘り下げられ、2段掘りの土壙を形成する。埋土から刀子が出土した。

3号埋葬施設　墳丘の東側周溝底に位置する周溝内埋葬施設の土壙墓で、周溝に平行するように造られる。主軸はN－5°－Wにとり、規模は内法で長さ1.46m・幅0.82m・深さ0.5mを測る。副葬品などの出土はなかった。



第23図　7号墳2号・3号埋葬施設遺構図

4号埋葬施設　墳丘の北東側周溝底に位置する周溝内埋葬施設の土壙墓で、周溝に平行に造られる。規模は、内法で長さ1.18m・幅0.5m・深さ0.36mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN－147°－Eにとる。土壙の南東側の小口周辺で小型壺（14）が出土しており、出土位置が土壙墓埋め土部分にあたることから、4号埋葬施設に供献されたものと考えられる。副葬品としては、土壙底部から刀子（F5）が出土した。



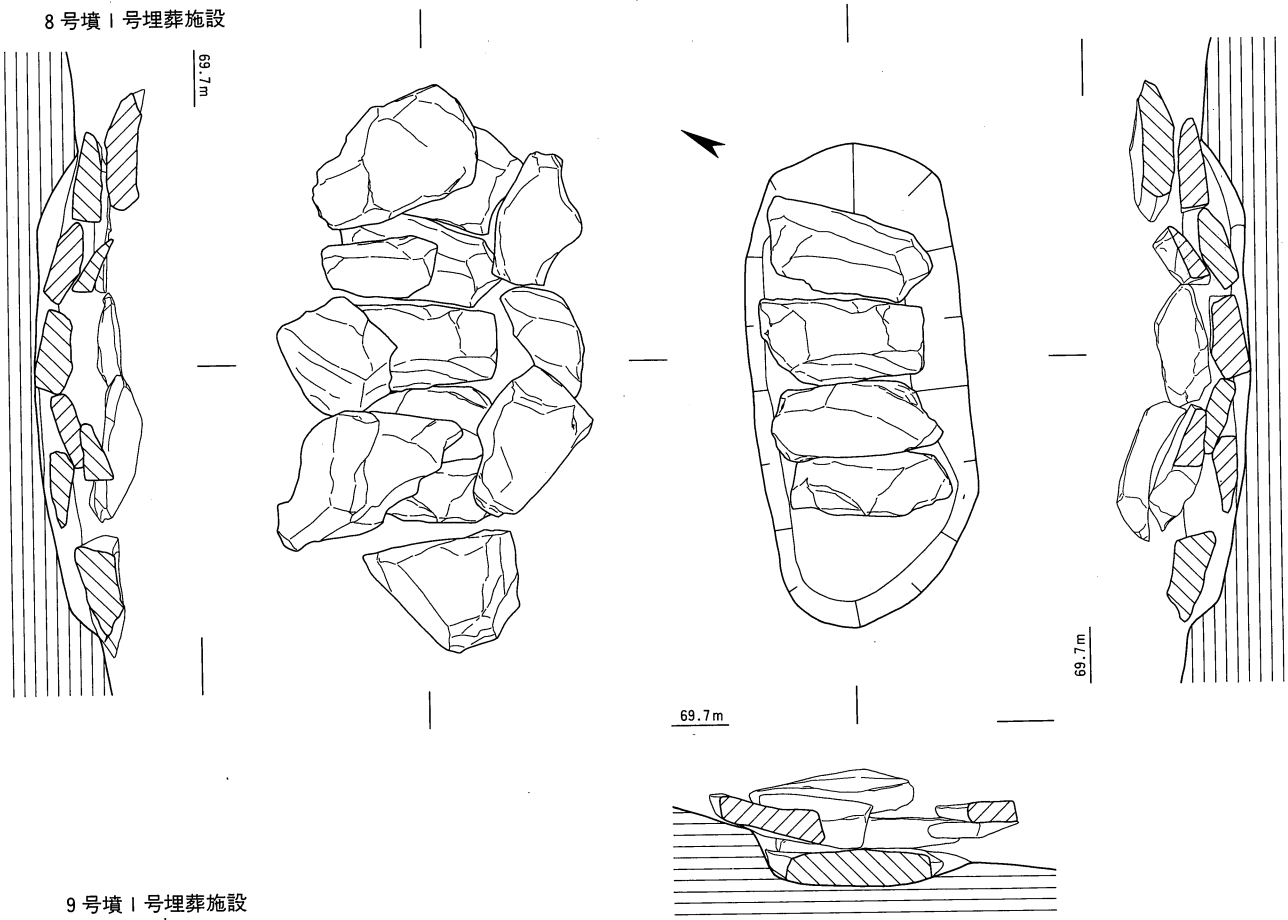
第24図　7号墳4号～6号埋葬施設遺構図

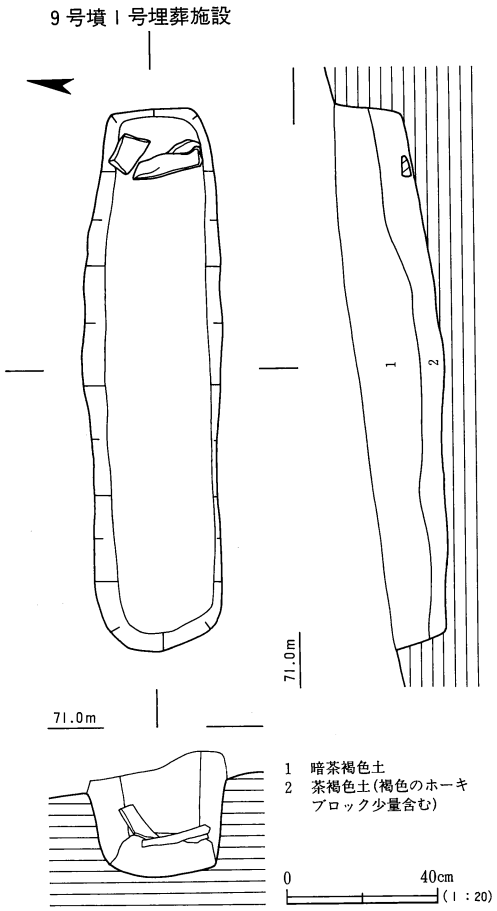
5号埋葬施設　墳丘の北東側の周溝外に造られた土壙墓である。10号墳の墳丘肩部に重なるように位置する。主軸はN－65°－Eにとり、規模は内法で長さ1.43m・幅0.81mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。深さは、土壙中央で0.14mと浅く、土壙上面が削平を受けたものと思われる。土壙からの副葬品は出土しなかった。

6号埋葬施設　墳丘の北東側の周溝底に位置する周溝内埋葬施設の石蓋土壙墓である。土壙はやや不整形な楕円形を呈し、その規模は東西径0.58m・南北径0.44m・深さ0.19mを測る。土壙の蓋石は、平石2枚からなり、全体に南側にずれる。副葬品などの遺物はなかった。

8号墳

墳丘　1号墳の南東12mに位置し、1号墳丘下の丘陵斜面に立地する。調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなく、古墳の存在は確認されず1号墳の墳丘斜面と考えていた。調査の結果、石棺材が崩れた箱式石棺墓の検出により古墳であることを確認した。検出当初は、その検出状況から1号墳の埋葬施設の一部と判断して



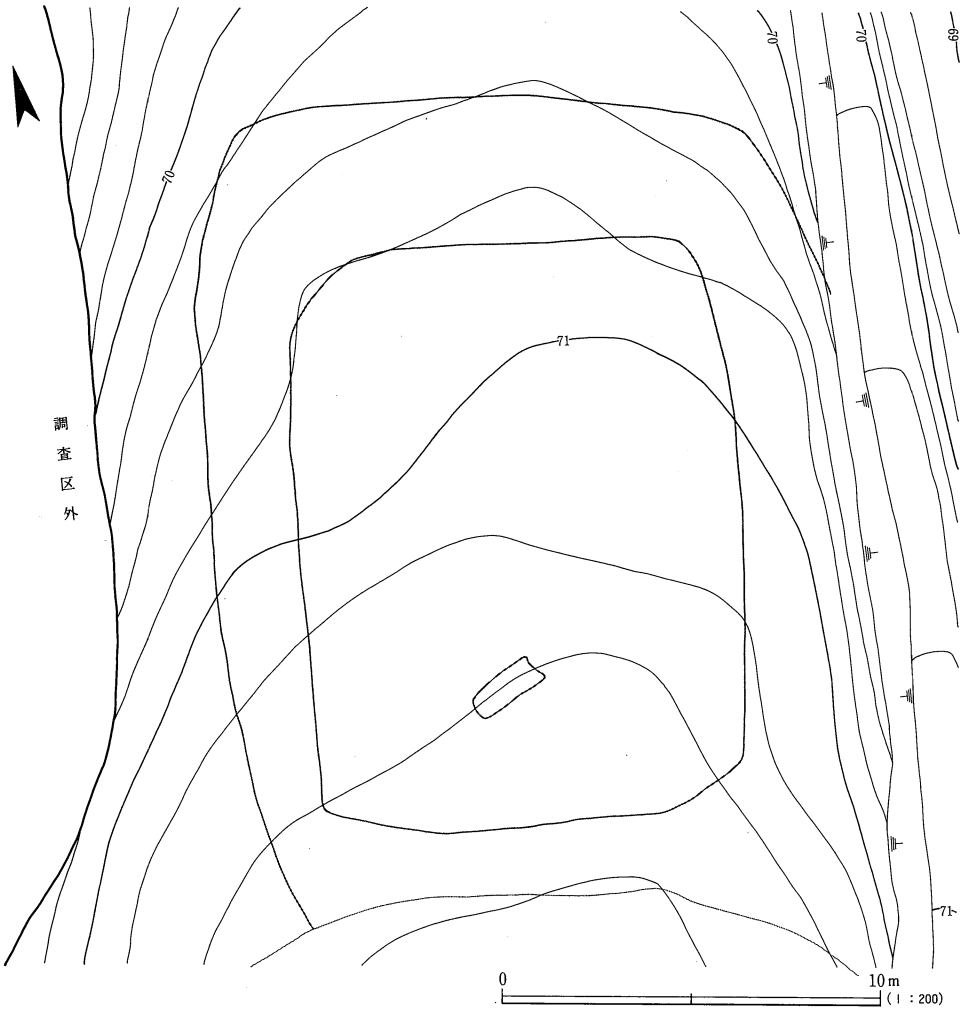


第25図　8号墳1号埋葬施設・9号墳1号埋葬施設遺構図

いたが、丘陵斜面の高い側に丘陵から切り離す半円状の周溝の検出によって古墳と断定した。古墳は遺存する周溝の平面形から、墳丘封土を失った円墳であった。古墳の規模は、周溝から復元して直径約3.0mを測り、周溝を含めた規模は直径3.6mを測る。

周溝　周溝は丘陵斜面の西側に存在する丘陵からの切り離しの溝である。周溝の規模は、幅0.3～0.8m・深さ0.1～0.3mで墳丘の北側1／3だけ巡る。墳丘の北側部分で一部屈曲する。周溝の断面は、やや幅の広いU字状を呈する。周溝埋土は2層からなる。

1号埋葬施設　墳丘のやや北側に位置する、中心主体部の箱式石棺墓である。箱式石棺墓の大部分は、墳丘の流失や削平とともに失われており、遺存する部分は側石の基底部と棺底に敷かれた敷石だけであった。遺存する石材の全てが、何らかの状況で折り重なるように出土したため明確な石棺規模は不明である。主軸はN－62°－Eをとり、棺の長さは約1.5m、幅約0.8mを測る。箱式石棺の石材は、何れも偏平な河原石を使う。棺床の敷石は、横幅約40cmにそろえた4枚からなり、墓壙の中央部分に長さ80cmに敷かれる。石棺掘り方は、角の丸い隅丸長方形を呈し、長軸約1.3m・



第26図　10号墳調査前地形測量図

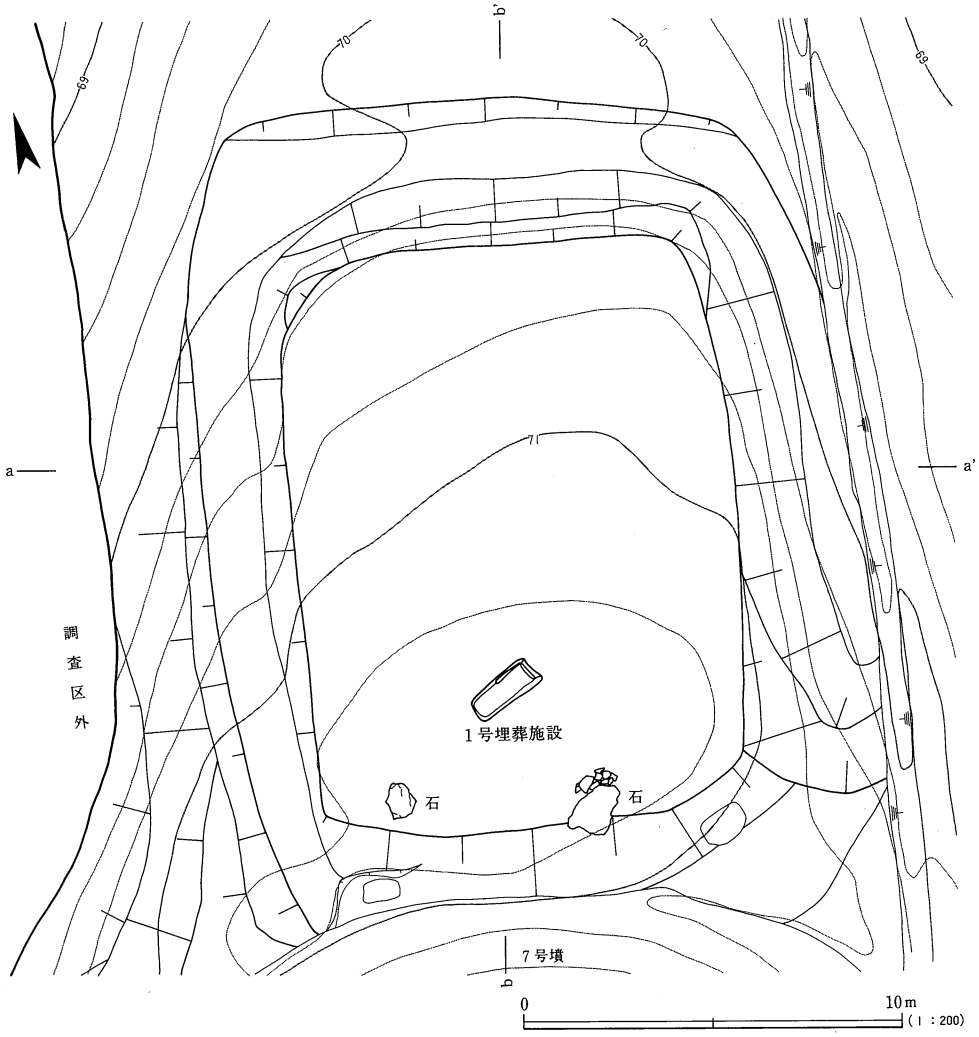
短軸約0.6mを測り、深さは掘り方肩部から15cmと浅い。棺内の副葬品の出土はなかった。

9号墳

墳丘　9号墳は、7号墳北西側の周溝に重なるように位置し、丘陵の西側斜面肩部に所在する。調査前や遺構検出時点では古墳の存在は確認できず、7号墳の周溝の掘り下げ後に古墳を確認できた。7号墳周溝と重なるように造られており、周溝の大部分は遺存せず、7号墳の周溝肩で北西に残る周溝の両端部分を検出した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して周溝を含めた直径約5.5mを測る。墳丘盛土は流失する。

周溝　周溝の大部分は、7号墳の周溝内に造られており7号墳の周溝掘り下げ後に確認したため遺存しなかった。わずかに7号墳の周溝から北西に突き出した半円状の両端部分の検出から、丘陵斜面の高い側に約1／3程度残る切り離しの周溝であった。周溝の規模はその大部分が7号墳の周溝のなかであり、不明確である。わずかに残る両端部分は幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。

1号埋葬施設　墳丘の中央部に位置しており、中心主体部の石蓋土壙墓である。蓋石は墳丘盛土とともに検出時点には存在せず、土壙墓と思われた掘り方の両側壁に小板石の立てかけがあり、土壙内に枕が存在するところから石蓋土壙墓と判断した。主軸はN－82°－Eで、丘陵斜面に直交するように造られる。土壙の規模は、内法で長さ1.44m・幅0.37m、検出面からの深さは中央部分で0.23mを測る。床面は、斜面の高い東側が高い。土壙の東側小口に、小さい平石2枚をV字状に組んだ石枕が崩れた状況で出土しており、頭位は東側である。土壙内からの副葬品は出土しなかった。



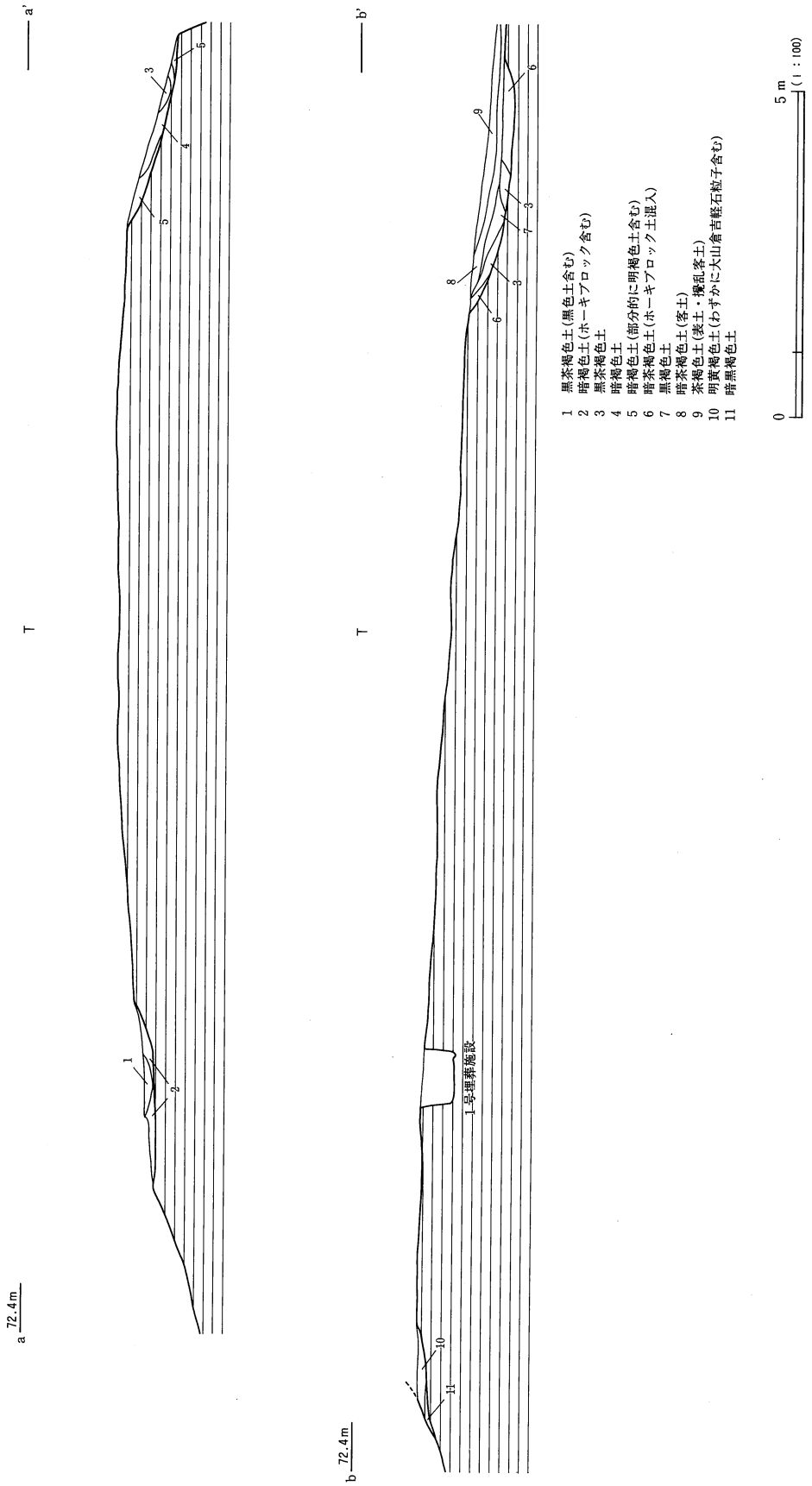
第27図　10号墳平面図

10号墳

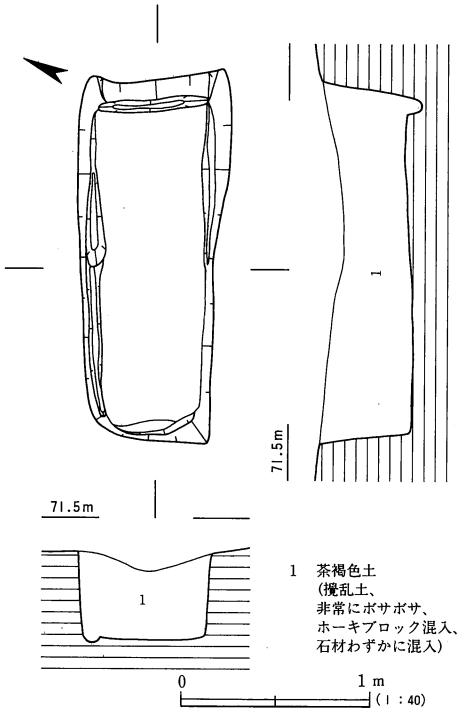
墳丘　7号墳の北側に接するように位置し、調査区北側の丘陵尾根部分に所在する。墳丘の南側で7号墳と接しており、10号墳と確認する以前は前方後円墳と考えた7号墳の前方部と理解していた。調査前は松や杉の植林地であり、古墳の墳丘と思われる顕著な地形の高まりは存在しなかった。周溝掘り下げ後、墳丘の南側を7号墳の周溝に削られた方墳であることを確認した。墳丘の規模は東西約11.1m・南北約15.5mを測り、周溝を含めると東西約18.0m・南北約22.0mを測る。墳丘は検出面で、すでに黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層）や暗褐色土（ソフトローム土）の地山面であり、盛土を全て削平された古墳であった。しかし、北側周溝底からの高さは、一番高いところで1.25mを測る。

周溝　丘陵尾根を占有する古墳の周溝は、墳丘の北側部分で規模がわかるものの非常に遺存度が悪い。特に墳丘南側は7号墳周溝によって墳丘の一部も削られており周溝の残りは悪い。東西の周溝は、丘陵斜面であり周溝の大部分が流失しており西側でわずかに周溝基底部を残すだけであった。周溝の規模は、遺存する北側で幅3.1～3.9m、深さ約0.35mを測る。また周溝基底部のみの検出である西側は、周溝幅2.8～3.1m、深さは墳丘側で0.1mであった。周溝内埋葬施設などの検出はなかった。

1号埋葬施設　隅丸長方形に近い墳丘の南側よりに位置する箱式石棺墓である。検出時点で箱式石棺の石材が遺存せず、土壙墓のような隅丸長方形の掘り方を確認した。当初土壙墓と考えた掘り方を掘り下げて、底部両小口



第28図　10号墳断面図



第29図　10号墳１号埋葬施設遺構図

に小口板の抜き取り溝と、両側石部分に側石を固定する溝の検出により埋葬施設の種類が箱式石棺墓と確認した。掘り方の規模は、内法で長軸1.92m・短軸0.7mを測り、深さは検出面から0.5mを測る。土壙内からの出土遺物はなかった。

１号箱式石棺墓　10号墳の南東５m付近に位置し、丘陵東側斜面肩部に所在する。流失が激しく棺に使用された石材は殆ど遺存していない。長軸約3.0m・短軸約1.6mの二段の墓壙掘り方をもち、墓壙のやや南側に箱式石棺の掘り方を持つ。規模は長軸約2.6m・短軸約0.5mを測り、深さは検出面から約0.5mを測る。石材は西側小口石と南側側壁の一部が残存するだけである。棺の床は斜面に造られていることから、やや傾斜を有する。東側の小口石は既に存在しないが、断面観察により、西小口から1.8m付近に大きな層の変化がありこの部分に東小口が存在した可能性が高い。両側石とも遺存せず、南側側石の小片が一部残存する。副葬品は、棺内が攪乱を受けており、短刀１振（Ｆ７）、刀子３本（Ｆ８）、鉄鏃２本が棺底付近西側を主に散乱するように出土した。

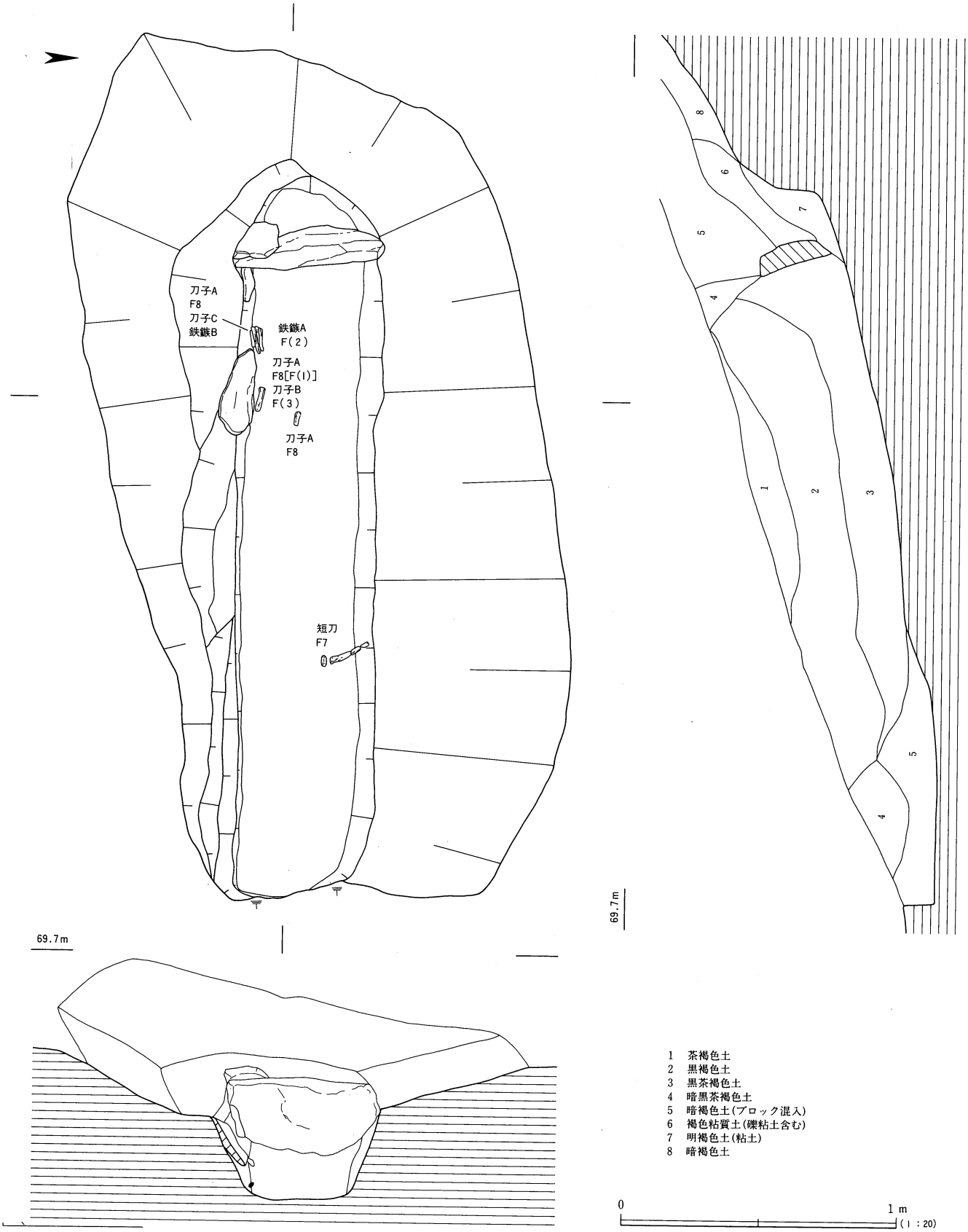
なお、１号箱式石棺墓は丘陵の斜面に位置し、さらに側溝によって削平を受けており、検出時点では墓壙掘り方とわずかに残る棺材を検出しただけである。このため１号箱式石棺墓として報告したが、墳丘盛土が流失した古墳の可能性も考えられる。

１号貯蔵穴　６号墳の北東２m付近に位置し、丘陵の東側斜面肩部に所在する。この貯蔵穴の南西側には１号土壙が所在し、一部土壙によって削られる。平面形は、検出面が不整形な円形で底面は円形を呈する。断面形は、やや台形状に近いものの、一般的な底部がフラスコ状に広がる袋状を呈する。規模は、検出面が直径約1.3mで、底面の直径約1.5mを測り、深さは中央部で検出面から約0.5mを測る。底面積は1.77m²を測り、底面にはピットなどの施設は確認できなかった。貯蔵穴の南西隅の底面付近で小型の甕（26）とスタンプ文を施した小型特殊壺片（25）が出土した。

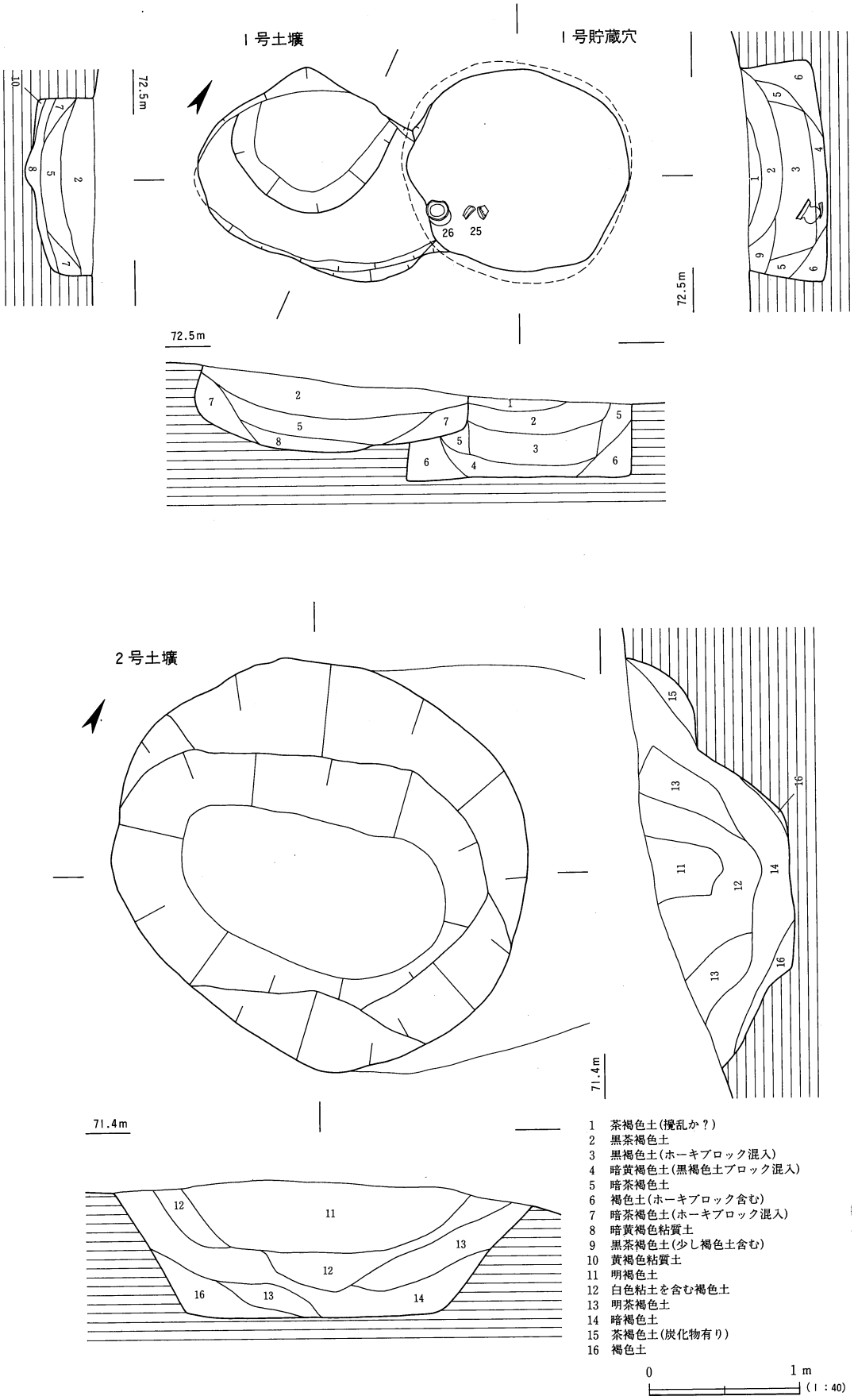
１号土壙　６号墳の北東1.5mに位置し、丘陵の東側斜面肩部に所在する。平面形はやや不整形な楕円形で、土壙の規模は東西約1.8m・南北約1.2mを測り、検出面からの深さは中央部で約0.9mを測る。底面の規模は東西約1.8m・南北約1.0mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。土壙埋土中からの出土遺物はなかった。

２号土壙　１号墳の墳丘下に位置する土壙である。墳丘の北東側斜面に所在する。平面形は東西に長い楕円形を呈し、土壙規模は検出面で、長さ約2.9m・幅約2.7mを測り、深さは約0.9mである。底面の規模は長さ約1.8m・幅約0.9mである。遺物は出土しなかった。

１号溝状遺構　１号墳の南側墳丘下に所在し、２号土壙から南に位置する。北東から南西に延びる溝で南西端でわずかに南側にまがる。溝の規模は長さ約3.8m、幅は中央で約0.5m、深さ約0.3mを測る。出土遺物はなく、時期や性格は不明であるが、１号墳墳丘下に所在するところから２号土壙との関連がうかがえる。



第30図　1号箱式石棺墓遺構図



第31図　1号貯蔵穴、1号・2号土壙遺構図

2　遺物

出土した遺物は土師器・弥生土器・鉄製品・石製品である。出土場所は、１号墳・４号墳・７号墳と１号貯蔵穴であり、土師器の大部分が古墳周溝内からであった。副葬品は１号墳の１号埋葬施設・２号墳の２号埋葬施設・７号墳の４号埋葬施設と、１号箱式石棺墓から鉄剣などの鉄製品が出土した。

１）土器

１号墳

壺（１）　南西側周溝底部から出土した供献土器。口縁部は内傾し、端部はやや角張り面を有する。体部は、底部を欠くもののほぼ球形に近い。口縁部から頚部にかけては内外面ともヨコナデ調整を施し、口縁屈曲部に凹線を１条巡らせる。体部外面は肩部が横方向のハケメ調整、肩部から胴部最大径付近にかけて斜方向のハケメ調整を施す。体部外面下半ナデ。体部内面は、頚部直下と底部に指頭圧痕が明瞭に残り、胴部上位より底部にかけて右方向のヘラケズリを行う。色調は淡褐色で、焼成は普通。外面胴部煤付着。口径12.6cm。

高坏（２）　３号埋葬施設の石蓋土壙墓の枕に使用されていた大型の高坏である。口縁部は直線的に外方に長くのびる。口縁端部はわずかに外反する。口縁部と坏底部との境には稜をもつ。坏部外面はハケメ調整の後、ヨコナデする。坏底部外面には縦方向のハケメが残る。坏部内面はヨコナデ調整の後８等分にして横方向のヘラミガキ後坏底部は放射状ヘラミガキを施す。色調はやや淡い赤褐色で、焼成はやや悪い。口径22.8cm。

高坏（３～８）　３号埋葬施設に供献された一括の高坏。２と３、５と８は同一個体の可能性がある。坏部は内湾する椀形。口縁端部は、５の面を有するもの以外は概ね丸くおさめる。脚部は上位が先すぼまりで、下位が開く柱状部と、大きく外方に開く裾部からなる。裾部が柱状部から緩やかに屈曲するもの（３）と、強く屈曲するもの（４・６～８）がある。裾端部は、いずれも面を有しており、なかでも６は強く角張る。坏部外面は、いずれも縦方向のハケメ調整の後、口縁部および坏部の上位３分の１をヨコナデ調整しハケメ調整を消す。坏部内面はヨコナデ調整し、５は口縁部付近を横方向のヘラミガキ、底の部分を放射状のヘラミガキを施す。柱状部外面は、上位に坏部からのハケメ調整の一部が残り、さらにヘラ状のもので縦方向にナデてわずかに面をなすものがある（６・７）。脚柱部内面には絞り目が残る。裾部は、内面を横方向にハケメ調整の後、外面をヨコナデ調整するもの（３・４・７・８）と、内外面ともヨコナデ調整するもの（６）とがある。色調は概ね明褐色で、３がやや赤く明赤褐色を呈する。焼成は４を除き良好である。口径は４から順に14.7cm、14.7cm、14.6cm、15.1cm、３と８は脚径が13.5cm、9.7cmである。

４号墳

甕（９）　南側周溝底部出土。口縁部は外傾し、端部は角張り外面に凹面をなす。口縁屈曲部は、強いナデにより凹状に屈曲部をつくる。体部は肩が張るような球形を呈する。体部外面は、上から横～斜め・縦方向のハケメ調整で、体部下半はナデて仕上げる。体部内面は、下半を右上方向にヘラケズリし、上半を右方向へヘラケズリする。肩部内面と底部内面には指頭圧痕がのこる。色調は外面底部に煤が付着し黒ずむが全体に淡黄褐色をなし、焼成は良好。口径16.8cm・最大胴径26.0cm・器高26.6cm。

７号墳

甕（10・11）　北側周溝埋土から出土。口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は緩やかに外方に開き口縁部内外面ヨコナデ調整する。口縁端部は角張り、外側に面をもつ。口縁屈曲部の稜は、強いナデにより断面三角形状を呈する。体部は球状を呈するものと思われ、体部外面は肩部以下を横方向、胴部最大径以下を縦から斜め方向のハケメ調整を施す。11のハケメはやや間隔が広い。肩部をヨコナデしハケメ調整を消す。10の肩部には棒状工具による刺突痕が２孔ある。体部内面は右方向のヘラケズリ。11の頚部内面にはケズリがわずかに及ばず

指頭圧痕がのこる。色調は淡い黄褐色で、焼成は比較的良好である。口径は14.6cmと15cm。

甕（12）　北側周溝埋土出土。口縁部は外傾し、端部は角張り外側に稜をもつ。端面は凹面をなす。口縁屈曲部は、断面三角形状の稜をつくる。体部はほぼ球形を呈する。体部外面は、上から横・斜め・縦方向にハケメ調整を施す。底部外面ナデで仕上げる。体部内面は、下半を左上方向にヘラケズリし、上半を左方向にヘラケズリする。肩部内面と底部内面には指頭圧痕がのこる。色調は淡橙褐色。外面体部下半、内面底部に煤が厚く付着。焼成は良好。口径15.1cm・最大胴径23.5cm・器高25.5cm。

壺（13）　北側周溝埋土出土。口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は逆く字状に内傾し、端部は丸くおさめる。口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部外面はヨコナデし、内面は右方向にヘラケズリする。色調は暗茶褐色で、焼成は良好。口径11.1cm。

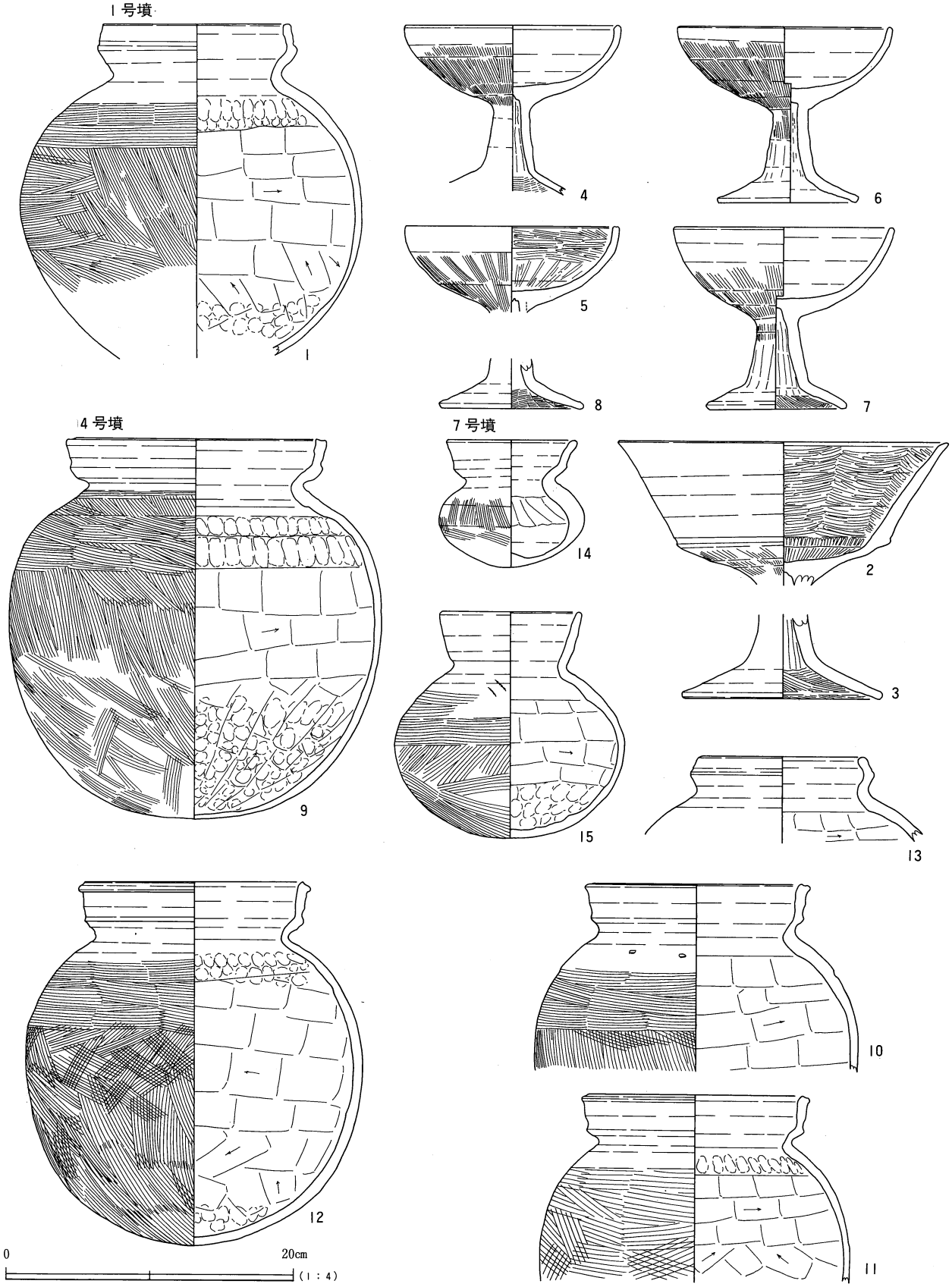
壺（14）　4号埋葬施設出土。口縁部は上外方に開く複合口縁で、口縁端部は丸くおさめる。口縁屈曲部はヨコナデによる稜だけになる。体部は扁球形である。口頸部は内外面ともヨコナデ調整。体部外面は、胴部最大径まで縦方向のハケメ調整を施し、以下を斜めから横方向のハケメ調整するが全体にナデ仕上げ。体部内面下半は、右方向のヘラケズリ後、底部中央部が厚く盛り上がり周辺は丁寧にナデ調整する。色調は淡茶褐色で、焼成は普通。口径8.7cm・最大胴径10.1cm・器高8.9cm。

直口壺（15）　南側周溝底部で出土した一括の土器群。口縁部は外方に直線的にのび端部は丸くおさめ、内外面ともヨコナデ調整する。体部はわずかに扁球形である。肩部外面ハケメ原体による刻み目を2個付す。体部外面は肩から胴部最大径付近まで横方向のハケメ調整し、以下縦から斜め方向のハケメ調整する。頚部付近はヨコナデ調整し、ハケメを消す。体部内面は胴部中位を右方向にヘラケズリする。胴部下位から底部にかけて指頭圧痕が残る。色調は橙褐色で、焼成は良好。口径9.5cm・器高14.8cm、最大胴径16cm。

高坏（16～19）　南側周溝底部で出土した一括の土器群。坏部は上外方に開く皿状。口縁端部は、丸くおさめるもの（16・17）と角張るもの（18・19）とがある。脚部は、上位が先すぼまりで下位が開く柱状部と、大きく外方に開く裾部からなる。柱状部から裾部にかけてはいずれも強く屈曲し、裾部の端部は角張る。16は口縁部内外面をヨコナデ調整し、内面直下に横方向のハケメ調整し放射状のヘラミガキを施す。17は口縁部内外面ともヨコナデ調整するだけである。18は口縁部をヨコナデ調整し、内面は口縁直下にハケメ調整した後に放射状のヘラミガキを施す。19は口縁部内外面をヨコナデ調整し、内面は横方向のハケメ調整とヘラミガキを施す。坏部外面はいずれも縦方向のハケメ調整を施し、大部分がヨコナデ調整により一部ナデ消される。柱状部外面は、面取り的に縦方向にナデ調整するもの（16～18）と全体をナデ調整するもの（19）とがある。柱状部内面には絞り目が残る。裾部は、内面を横方向にハケメ調整の後、内外面ともヨコナデ調整する。色調は概ね明褐色で、19がやや赤く褐色を呈する。焼成は16を除き良好である。口径・器高は16～19の順に17.6cm・13.7cm、16.2cm・13.1cm、17.4cm・13.8cm、17.1cmである。

高坏（20・21）　南側周溝底部出土。大型高坏の坏部（20）と脚部（21）である。同一個体の可能性がある。口縁部は直線的に外方に長くのびる。口縁端部はわずかに外反し、やや角張り外側に面を持つ。坏部の体部と底部との境には1条の凹線が巡る。口縁部内外面ヨコナデ調整後、内面は斜方向の粗いハケメ調整しさらにナデ調整する。坏体部外面は縦から斜め方向のハケメ調整が残る。脚部は上位が先すぼまりで、下位が開く柱状部と外方に大きく開く裾部からなる。裾端部は角張る。内面には絞り目が残る。裾部外面はヨコナデ調整し、内面は横方向のハケメ調整後ナデ。色調は明褐色で、焼成は良好である。口径25.1cm。脚径13.2cm。

器台（22）　南東側周溝底部出土。受部は大きく上外方へ開き、端部で折り曲げて丸くおさめる。脚部は低く横方向にのびるように開き、底部は平坦になり端部は丸くおさめる。筒部外面には段がつかない。受部は内外面と



第32図　土器1

もヨコナデ調整し、受部はさらに丁寧なナデを施す。筒部はほぼ垂直にナデる。色調は明褐色で、焼成はややあまい。口径13.2cm・器高5.4cm・脚台径10.7cm。

坏A（23・24）　南側周溝埋土出土。口縁部は上外方へ大きく開き、底部はほぼ水平を呈する。口縁部内外面ヨコナデ調整する。23の底部内面ナデ調整、24の底部はヘラ切り後未調整。全面に彩色を施すが色調がやや薄く茶色味を帯びる。口径は23が9.7cm、24が11.3cm。

1号貯蔵穴

小型特殊壺（25）　弥生土器。上外方に開く複合口縁と算盤玉状の体部からなる壺。口縁部は内外面ヨコナデし、外面は櫛描沈線文の後一部ナデ消す。端部は丸くおさめる。体部は肩部から貝殻腹縁による刻み目、３条の凹線、渦巻き状のスタンプ文、貝殻腹縁による刻み目を施して体部中央部にいたる。中央部には突起状の稜を上下にもち、その中間に逆Ｃ状の竹管文を周回させる。さらに体部中央部より下に渦巻きスタンプ文を施し３条の凹線を施す。頸部に相対する双孔あり。体部内面は頸部以下横方向のヘラケズリを施し、全体を丁寧にナデ消す。底部欠損のため、形状は不明であるが台付きの可能性が高い。外面全面・内面口縁部丹塗痕跡。口径12.2cm、最大胴径18.6cm。

甕（26）　小型。上外方に大きく開く複合口縁で、端部は丸くおさめる。口縁部内外面ヨコナデ調整し、外面は11条の原体の櫛描沈線文を巡らせる。体部は偏平な球形をなし、底部には百円大の平底をつくる。肩部には櫛描波状文を巡らし、体部はナデ調整する。体部内面は左方向に丁寧にヘラケズリ。外面全体、内面口縁部丹塗、外面全体厚く煤付着。内面底部炭化物付着。口径15.6cm、器高12.0cm。

器台（27）　１号貯蔵穴周辺から出土した弥生土器。複合口縁状を呈する装飾された器台の脚部。やや長めの筒部と直線的に「ハ」の字状に開く脚部からなる。脚端部は丸くおさめる。脚部外面には櫛描沈線文と上下の二段に逆Ｓ字状のスタンプ文を横方向に押捺し周回させる。稜は丸くおさめ、端部に貝殻腹縁による刻目を施す。筒部一方向に２孔あり。下の孔は貫通しない。筒部はナデ調整後縦方向のヘラミガキをする。脚部内面は、左方向のヘラケズリし、筒部は絞り目が残る。脚部径18.4cm。

２）鉄製品・石製品

鉄剣（Ｆ１）　１号墳１号埋葬施設石棺内から出土。全長62.7cm・刃部長49.3cm・茎長13.4cm。幅は刃部で3.4cm、切先寄りは2.6cmと狭くなり、茎部分で1.8cmを測る。刃部断面は菱形で鎬をもち、茎部断面は長方形である。目釘孔は錆のため貫通しないものの、茎部に２ヵ所確認した。刃部には部分的に木質が残る。

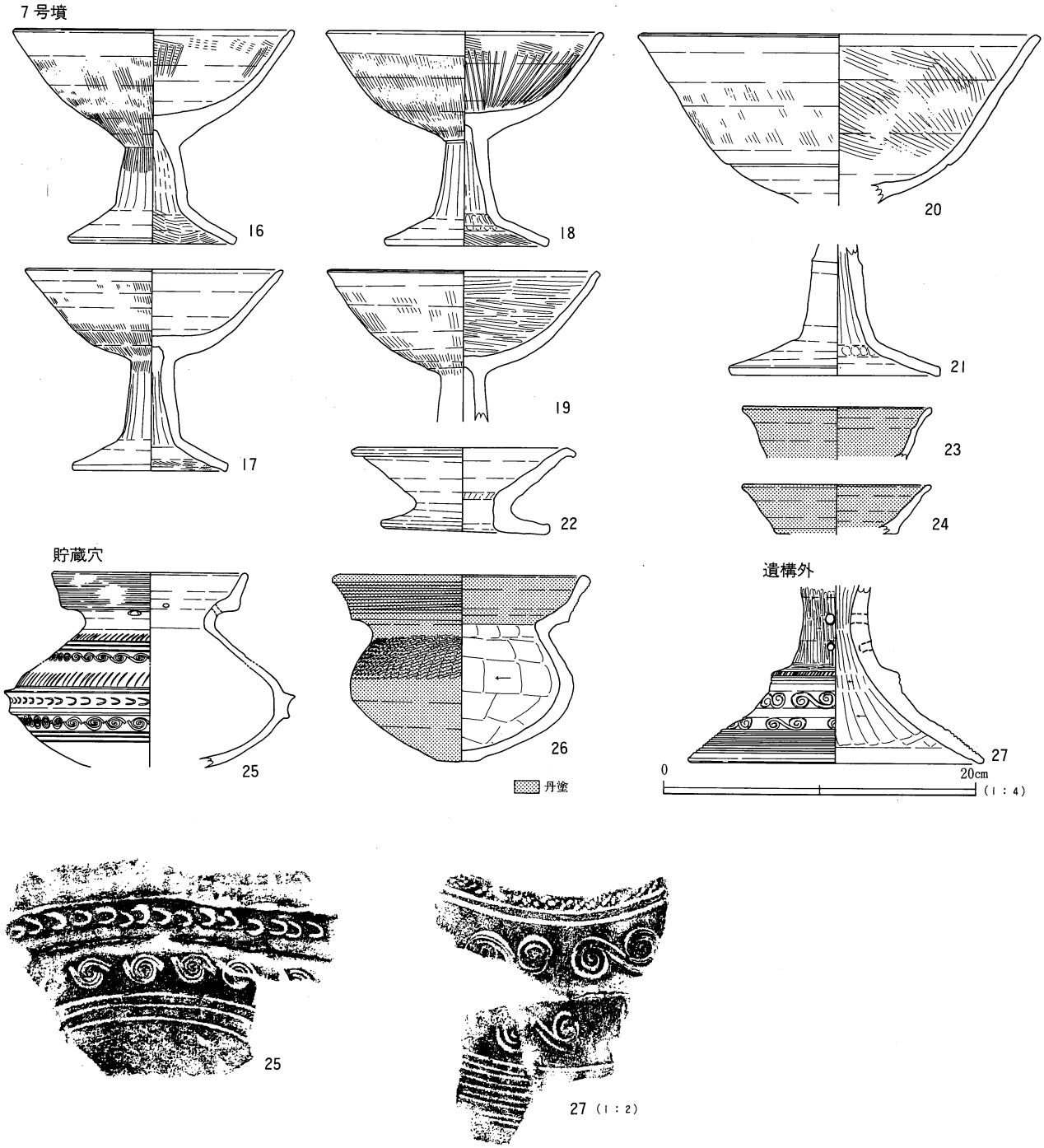
鉄斧（Ｆ２）　１号墳１号埋葬施設の北側小口棺外蓋石下から出土。全長10.0cm・刃幅4.7cmを測り、袋部はやや角張る楕円形状を呈し、内径で2.6×1.8cmである。刃部は台形気味に開き、先端で幅0.8cmを測り面を有する。刃はつかず、未使用品と考えられる。

鉄鏃　１号墳１号埋葬施設の石棺東側の蓋石に沿って出土。一括で出土しており数は６本以上である。錆により小片に細分化され、図化は不可能であった。

刀子（Ｆ３）　１号墳１号埋葬施設の石棺内石枕下から出土。全長9.2cm。切先と茎部を欠損する。残存部で刃部が6.5cm、茎部が2.2cmを測る。平造で片関、茎部に木質部が残る。幅は刃部で1.1cm、茎部で1.0cmである。

刀子（Ｆ４）　２号墳２号埋葬施設の石棺内から出土。全長7.6cm。茎先端を欠損する。刃部長5.2cm、茎部が残存部で2.4cmを測る。平造で片関、刃部の幅は1.5cmで切先ほど細い。

刀子（Ｆ５）　７号墳４号埋葬施設の土壙墓から出土。全長9.3cm。切先と茎部を欠損する。残存部で刃部が6.7cm、茎部が2.6cmを測る。平造で片関。刃部幅が1.9cmで切先ほど細い。茎部幅は1.2cmである。

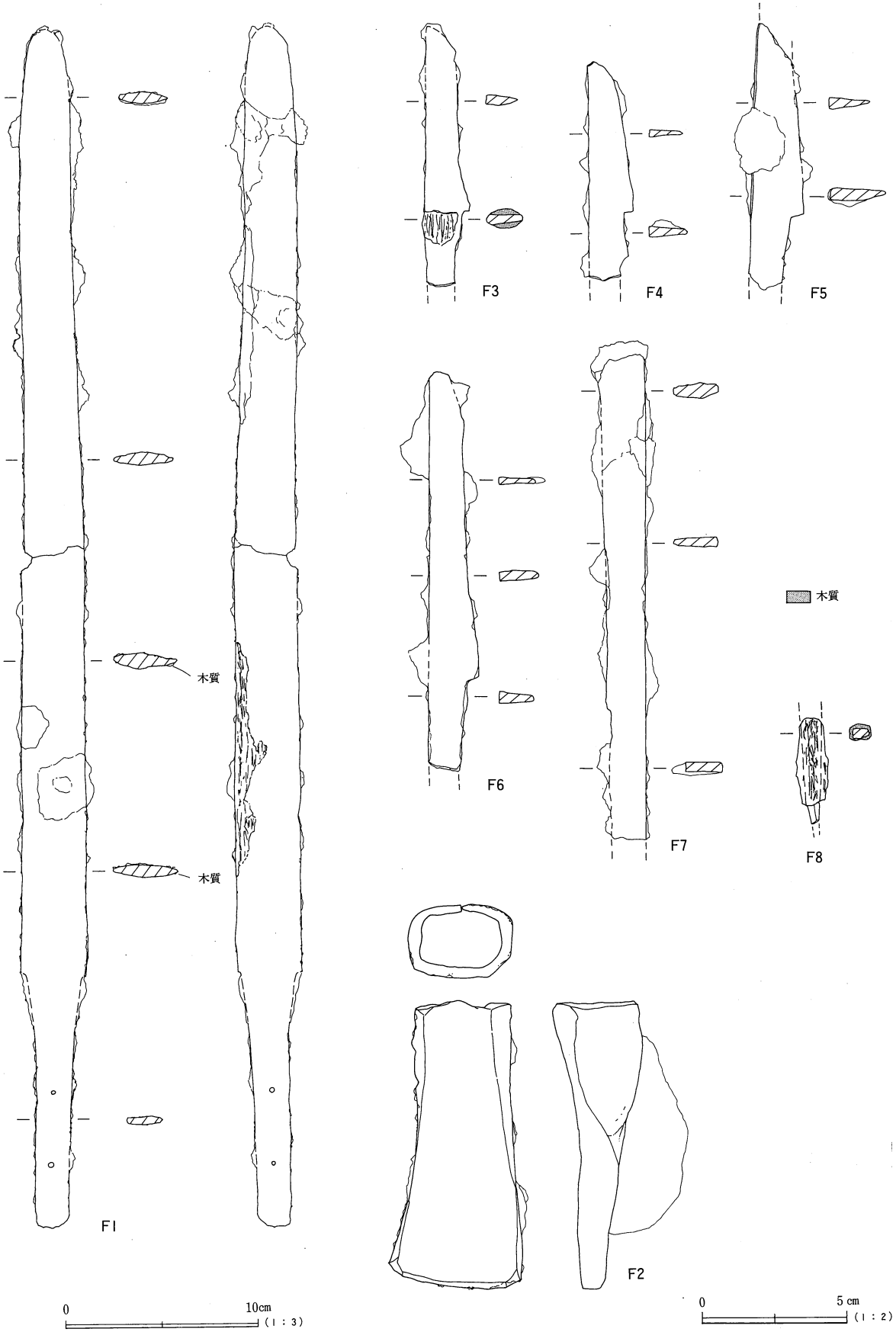


第33図　土器２

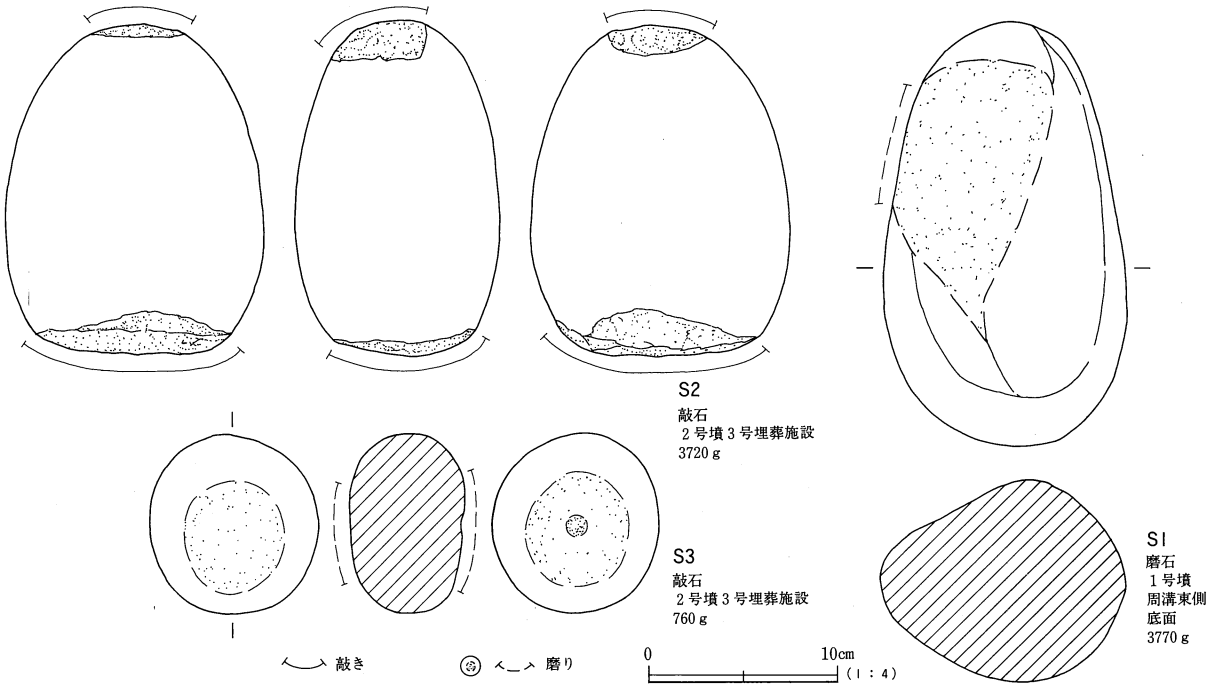
刀子（Ｆ６）　７号墳の西側周溝底部から出土。全長13.7cm。茎部端を欠損する。刃部長は10.7cm、茎部が残存部分で3.1cmを測る。刃部幅1.4cmで切先ほど細くなる。茎部幅は1.1cmで断面長方形を呈する。

短刀（Ｆ７）　１号箱式石棺墓東側棺底付近から出土。全長17.3cm。両端欠損。刃を研ぎ出していない。刃部長は残存部で12.2cm、茎部は残存部で4.7cmを測る。平造で無関。刃部の幅1.5cm、茎部幅1.1cmで断面長方形を呈する。

刀子Ａ（Ｆ８）　１号箱式石棺墓西側棺底付近から出土。切先欠損。茎部長5.3cm。



第34図　鉄製品



第35図　石製品

磨石（Ｓ１）　１号墳の東側の周溝底から出土。長さ22.5cm・幅11.9cm・厚さ10.7cmを測る。重さ3770ｇ。

敲石（Ｓ２）　２号墳３号埋葬施設内から出土。楕円形の両端を敲打に使用し台形状に変形する。長さ17.6cm・最大幅13.6cm・厚さ10.7cm。重さ3270ｇ。

敲石（Ｓ３）　２号墳３号埋葬施設内からＳ２の敲石と合わせて出土。平面形は円形で、偏平な球形を呈する。上下両面を磨り、片面の中央に１cm大の凹みを有する。長さ9.5cm・幅8.9cm・厚さ5.9cmを測り、重さは760ｇ。

駄道東遺跡出土鉄製品一覧表

出土位置		遺物No.	種類	遺構図No.	遺物図No.	図版No.
１号墳	１号埋葬施設　石棺内	Ｆ１	鉄剣	8	34	25
	１号埋葬施設　北側小口石棺外蓋石下	Ｆ２	鉄斧	8	34	25
	１号埋葬施設　石棺内石枕下	Ｆ３	刀子	8	34	25
	１号埋葬施設　蓋石東側		鉄鏃６本以上	７・８		25
２号墳	２号埋葬施設　石棺内石枕付近	Ｆ４	刀子	15	34	25
４号墳	周溝北側底部		鉄片			
７号墳	２号埋葬施設　土壙墓埋土		刀子			
	４号埋葬施設　土壙墓底部	Ｆ５	刀子	24	34	25
	周溝西側底部	Ｆ６	刀子		34	
	周溝西側埋土		刀子			
	周溝西側埋土		鉄片			
１号箱式石棺墓	石棺内東側　棺底付近	Ｆ７	短刀	30	34	25
	石棺内西側　棺底付近	Ｆ８	刀子Ａ	30	34	25
	石棺内西側　棺底付近・埋土		刀子Ｂ	30		25
	石棺内西側　棺底付近・埋土		刀子Ｃ	30		25
	石棺内西側　棺底付近		鉄鏃Ａ	30		25
	石棺内西側　棺底付近		鉄鏃Ｂ	30		

Ⅳ　鑑定

駄道東１号墳出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室
井　上　晃　孝

倉吉市津原字駄道東地内の駄道東１号墳の１号埋葬施設の箱式石棺には北東側に石枕があり、そこを頭位として頭骨と上、下肢骨が若干遺残していた。

副葬品は鉄刀１振が、人骨の左側に並列して遺残していた。

1）遺残性

遺残骨は頭骨と上、下肢骨が若干遺残するが、完形骨はなく、遺残性はやや不良であった。

2）遺残骨名とその部位

頭蓋骨　頭　骨：前頭骨、頭頂骨、後頭骨、右頬骨（右眼窩下縁部）、左右側頭骨、左上顎の一部、頭蓋底骨

下顎骨：左下顎体の一部、右下顎体の中央部

歯　牙：

△　　△△△　　△	○○○○　△
7　　5 4 3　　1	∬2 3 4 5∬6
∬××××∬2 1	1　2 3　5∬××∬
△△	△　△△　△

○：釘植歯牙　　×：欠（歯槽開放）

△：遊離歯牙　　∬：折損部位

胸郭骨　肋　骨：左；No.不明、後端部（肋骨頭関節面、肋骨結節関節面とその周辺骨）

上肢骨　鎖　骨：右；胸骨端～骨体中央部　9.5cm

上腕骨：右；近位部～骨体中央部　15.5cm

下肢骨　大腿骨：左；骨体中央部　24.0cm

右；近位部～骨体　27.0cm

脛　骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

3）推定性別

遺残頭蓋骨の形態学的特徴と上、下肢骨が細く、きゃしゃで筋肉付着部の粗面の発達が弱いことから、本屍骨は女性骨と推定する。

4）推定年齢

①頭蓋冠縫合　矢状縫合で頭頂部と孔間部ではごく軽度の融合がみられるが、冠状縫合と人字縫合は未融合である。

②歯牙の咬耗度　切歯と犬歯はブロカーの２°、小臼歯と犬臼歯はブロカーの１～２°である。

以上から、本屍の年齢は壮年中期位が推定される。

5）推定身長

遺残する四肢骨が完形でないので、本屍の身長は不詳である。

6）まとめ

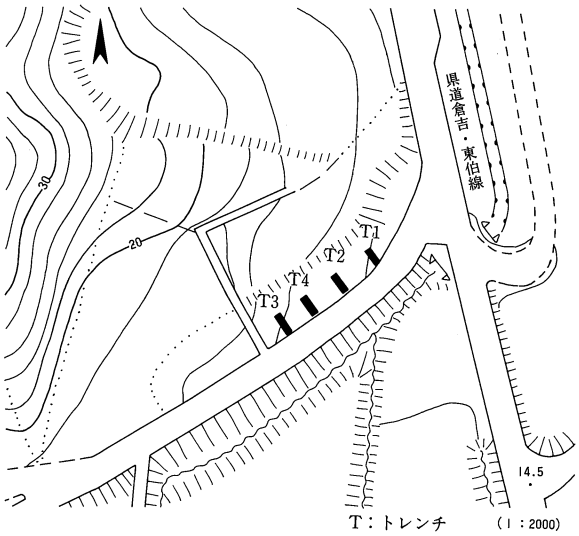
駄道東１号墳の１号埋葬施設には箱式石棺墓があり、北東側に石枕があり、そこに頭部をおいて仰臥伸展位で埋葬されていた。遺残骨は頭骨と上、下肢骨若干で、完形骨はなく、骨の遺残性はやや不良であった。被葬者は女性、推定年齢は壮年中期位、推定身長は不詳である。

副葬品として、鉄刀１振が人骨の左側に並列して遺残していた。

V　郊家平古墳群調査区

調査に至る経過

平成10年６月、中国四国農政局東伯農業水利事業所から、谷原石山採石場の本格的な採石に伴い、現在の採石場への進入道路では県道接続部分で交通渋滞を引き起こすことが予想されたため、進入道路の一部を拡張したいとの申し入れが倉吉市教育委員会文化課にあった。この計画地は、谷原石山の開発時点にも発掘調査が行われた郊家平古墳群が所在していることが明らかであったので、直ちに現地を確認したところ、計画路線内に２基の円墳が含まれることが確認できた。このため東伯農業水利事業所と協議し、この古墳については路線の一部を変更して保存することとし、現在個人住宅の庭として利用されている部分について発掘調査を実施することとなった。調査は、駄道東遺跡発掘調査終了後の平成10年８月20日から９月４日まで行った。



第36図　郊家平古墳群調査区位置図

調査の概要

調査対象の庭の周辺には墳丘の一部を失った横穴式石室の古墳が２基存在しており、古墳周溝の存在が予想された。このため発掘調査に先立ちトレンチによる確認調査を行いその範囲を調べることからはじめた。

調査は約10ｍ間隔に幅２ｍ・長さ５ｍのトレンチを４本設定し実施した。調査の結果、どのトレンチからも地山を削平された痕跡が明らかとなり、遺構・遺物の検出はなかった。このため調査はトレンチによる確認調査だけで終了した。

Ⅵ　まとめ

駄道東遺跡は、灘手地区北西に位置する灘手丘陵に所在し、南北に延びる丘陵尾根に立地する。平成９年度・10年度の２ヵ年にわたる発掘調査の結果、方墳１基を含む古墳10基からなる古墳群であることが明らかとなった。検出した遺構は、方墳１基・円墳９基・箱式石棺墓１基・土壙２基、そして弥生時代の貯蔵穴１基、溝状遺構1基であった。この結果、昭和62年度に調査した郊家平古墳群[註1)]や平成６年度に調査した二タ子塚遺跡[註2)]を含めると、同一丘陵に弥生時代後期の土壙墓群・古墳時代前期の方墳群の二タ子塚遺跡、そして５世紀代を中心とした古墳群の駄道東遺跡が存在し、６世紀代になると丘陵裾に所在地を移し横穴式石室を中心主体部とする郊家平古墳群を形成する事が明らかとなった。ここでは駄道東遺跡で検出した古墳群を中心に、調査によって明らかになったことを整理しまとめとする。

古墳群について

墳丘と周溝　調査した10基の古墳のうち10号墳が方墳で、これ以外は全て円墳であった。この内墳丘の一部を残す古墳は、農業用側溝から東側に存在した１号墳・２号墳・６号墳の３基だけであり、それ以外は墳丘の大部分が削平され、古墳のまわりに巡らされた周溝の基底部を残す。古墳は比較的近接して築造され、７号墳と４号墳、そして１号墳の間隙に小型の円墳が造られている。墳丘の規模は、丘陵尾根の最高部を占有する７号墳が最も大きく、直径30ｍの円墳であった。円墳では次に１号墳が直径20ｍ、４号墳が直径17ｍと続き、１号墳と７号墳に挟まれた小型の円墳２号墳・３号墳・５号墳・６号墳となる。方墳の10号墳は、７号墳の北側に位置し、丘陵尾根を占有する長方形気味の方墳で、長辺22ｍを測る。

周溝は調査した全ての古墳で検出した。この内丘陵斜面に位置する１号墳・２号墳・８号墳・９号墳は、周溝規模の違いはあるが、いずれも丘陵の高い側に丘陵からの切り離しの周溝として半円状の溝が巡っている。丘陵尾根に所在する３号墳～７号墳・10号墳はいずれも完周するが、大部分が削平されている。最も大きな７号墳の周溝は、幅約３～４ｍで完周するが、周溝の西側は底部が広く断面幅広のＵ字状を呈し、南から東側にかけては底部が狭く断面Ｖ字状を呈する。10号墳の周溝は非常に残りが悪い。

埋葬施設　10基の古墳のうち埋葬施設を確認した古墳は１号墳・２号墳・６号墳～10号墳の７基の古墳で、中心主体部と考えられる埋葬施設を検出した古墳は１号墳・２号墳・６号墳・８号墳・９号墳の５基、周溝内埋葬施設を検出した古墳は１号墳・２号墳・７号墳の３基である。

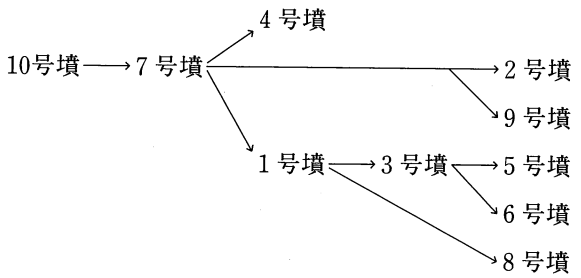
中心主体部の内訳は、１号墳１号埋葬施設と２号墳２号埋葬施設、そして８号墳の１号埋葬施設が箱式石棺墓で、２号墳１号埋葬施設が土壙墓、６号墳１号埋葬施設と９号墳１号埋葬施設が石蓋土壙墓であった。ただし、２号墳１号埋葬施設は木棺痕跡を確認しなかったため土壙墓としたが、木棺墓の可能性も考えられる。箱式石棺墓には、板石を箱状に組むものと偏平な河原石を箱状に積み上げたものがある。１号墳・２号墳の箱式石棺は、２段掘りの土壙の中央に両小口石を両側石が挟み込む形に組み合わせたものであり、石棺の規模は長さ1.5～1.8ｍ、幅0.4～0.8ｍであった。８号墳の箱式石棺は、40×40㎝大の偏平な河原石を墓壙に合わせて敷き、側石と小口に積み上げて石棺としたものであった。６号墳・９号墳の土壙墓は、ともに蓋石を失っており、土壙墓の形状から石蓋土壙墓とした。隅丸長方形の土壙に、東側小口に小片の板石をＶ字状に組んだ石枕を伴う。土壙の規模は長さ約1.5ｍ、幅約0.4ｍとほぼ同じ規模のものであった。

副葬品は、１号墳１号埋葬施設から鉄剣１振、刀子１本、鉄鏃６本以上、鉄斧１本と多数出土し、２号墳２号埋葬施設から刀子１本が出土している。１号箱式石棺墓からも短刀１振、刀子３本、鉄鏃２本が出土しており比較的豊富である。

周溝内埋葬施設は、１号墳・２号墳・７号墳の３基の古墳周溝から計６基を検出した。その内訳は、石蓋土壙墓が２基、土壙墓が４基である。これらの埋葬施設は、全て古墳周溝に平行に造られている。７号墳１号埋葬施設（石蓋土壙墓）と５号埋葬施設（土壙墓）は周溝外に造られる。埋葬施設が造られる位置は、１号墳が周溝北に、２号墳が周溝南西に、そして７号墳は南側の周溝断面がＶ字状を呈する部分を除いた部分に存在する。言い換えれば、７号墳の南側には２号墳・３号墳・５号墳・６号墳の小規模な円墳が並び、周溝内埋葬施設は造られないのである。１号墳３号埋葬施設は、周溝北東に位置し、周溝の外側を掘り広げ周溝の底部を平坦にして埋葬施設を造る。埋葬施設には高坏の供献土器があり、この内の大型高坏の坏部を２つに欠きＶ字状の土器枕を造る。７号墳２号・４号埋葬施設は周溝内埋葬施設でありながら鉄製品をもっている。

時期　10基の古墳とも主体部からの土器の出土がなく、明確な古墳の時期を提示する事は不可能である。しかし、僅かではあるが古墳周溝内より供献土器や転落遺物と考えられる土器の出土があり、さらに古墳周溝の切り合い関係が認められるものがあり、ある程度時間的な把握が可能である。まず１号墳周溝内出土の甕（１）は、口縁が内傾するが明瞭な口縁屈曲部ではなく体部は球形を呈するところから、イザ原６号墳段階[註3)]の５世紀後半に比定でき、３号埋葬施設に供献された高坏（４～８）は内湾しながら立ち上がる坏部からイザ原16号墳段階の５世紀終わりに比定できる。７号墳の周溝内出土の甕（10）は、若干の時期差は認められるが、ほぼイザ原６号墳段階に比定できるものであり、時期は５世紀後半が妥当であろう。出土土器の中では最も古い要素を備えている。また高坏の中にはもう少し古くさかのぼる要素をもつものが有り、全体的には５世紀代と考えられる。

次に古墳の立地と切り合い関係では、駄道東遺跡の丘陵尾根中央部の最高地を占有するのが７号墳である。古墳の規模も、この古墳群の中では最も大きく、駄道東遺跡のなかでは盟主の古墳であることが考えられる。つぎに単独で位置する古墳は尾根筋の４号墳、丘陵肩部の１号墳である。規模的にはわずかな違いがあるがほぼ同規模の古墳と考えられるが、主体部の遺存状況から考えると１号墳の方がやや古い要素がうかがえる。また古墳の切り合いでは、10号墳が７号墳に切られ、２号墳・５号墳・６号墳が７号墳を切る。さらに３号墳と５号墳は、５号墳が３号墳を切っており、３号墳と６号墳の関係は３号墳が古くて６号墳が新しいと考えられる。大まかにいえば北から南へと形成されていった古墳群であることがわかる。この関係から古墳の築造順は次のように考えられる。



以上、古墳群の時期・築造過程などについて若干の検討をした。ここでさらに検討する要素として、二夕子塚遺跡との関係をみなければならない。二夕子塚遺跡は、調査の結果丘陵頂部に弥生時代後期の土壙墓群を検出し、そして丘陵の傾斜変換点に方墳群を有する遺跡であり、弥生後期の土壙墓群から方墳へと連続して続く遺跡と考えられている。そして今回、二夕子塚遺跡に続く同じ丘陵に古墳時代中期、５世紀代を中心とした円墳群の存在が明らかとなった。二夕子塚遺跡の方墳の時期と駄道東10号墳の方墳との時期的な流れは不明である。しかし同じ方墳であることから考えると二夕子塚遺跡の流れを駄道東遺跡に続けることができると考えられる。すなわち、弥生後期の土壙墓群→古墳時代前期の方墳群→古墳時代中期の円墳群と連続的にその流れがうかがえる。おなじ丘陵で弥生時代から古墳時代に続く社会変化が追えることは非常に興味深い。

註

1　根鈴輝雄・土井珠美　『郊家平古墳群発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1988

2　高取英雄・加藤誠司　『二タ子塚遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1994

3　根鈴輝雄　『イザ原古墳群・小林古墳群発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1983

参考文献

根鈴智津子　『立縫遺跡群Ⅳ　頭根後谷遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1991

竹宮亜也子　『立道東古墳群発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1993

竹宮亜也子・岡本智則　『不入岡遺跡群発掘調査報告書－不入岡遺跡・沢べり遺跡２次調査－』　倉吉市教育委員会　1996

森下哲哉　『下張坪遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1997

図版 1

調査区空中写真（南西から）

調査区遠景

（南東から）

調査前全景

（南東から）

図版 2

△調査区全景（南西から）

▽調査区全景（北から）

△調査区北側（南から）

▽調査区南側（南西から）

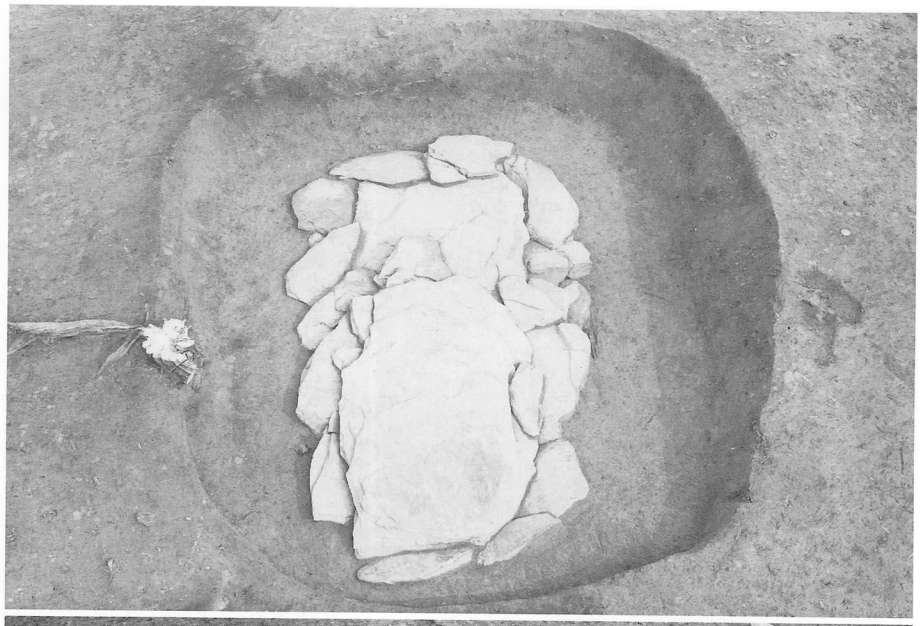
図版 4

△１号墳全景（北西から）

▽１号墳完掘（北西から）

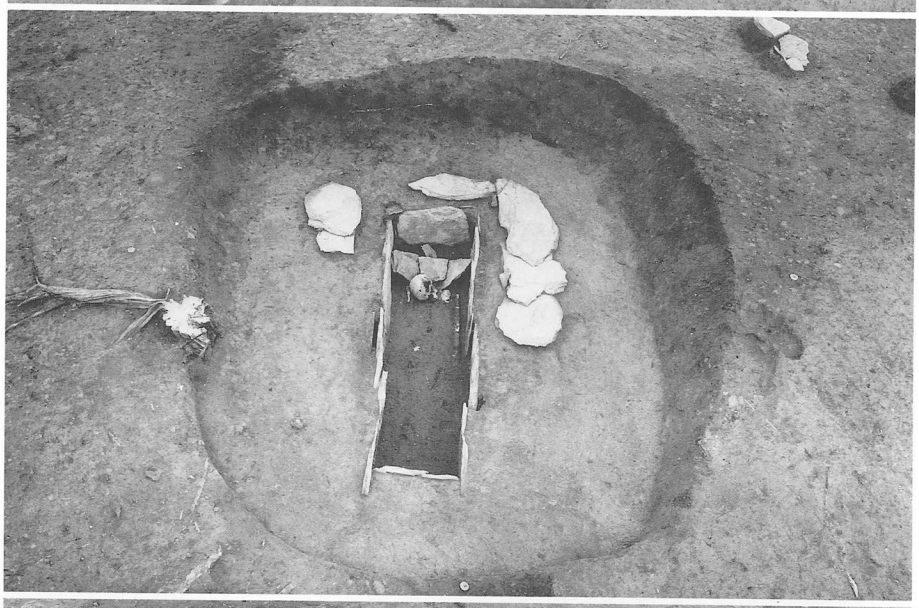
1号墳1号埋葬施設蓋石

（南西から）



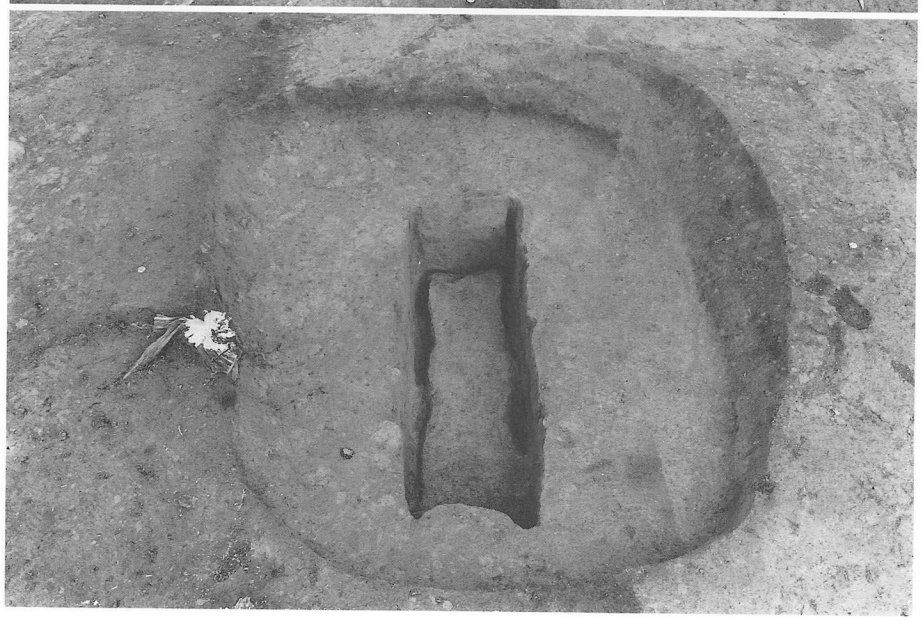
棺内

（南西から）

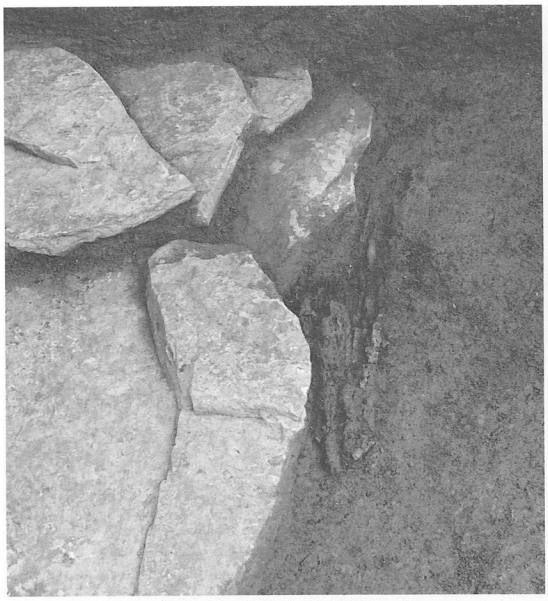


掘り方

（南西から）

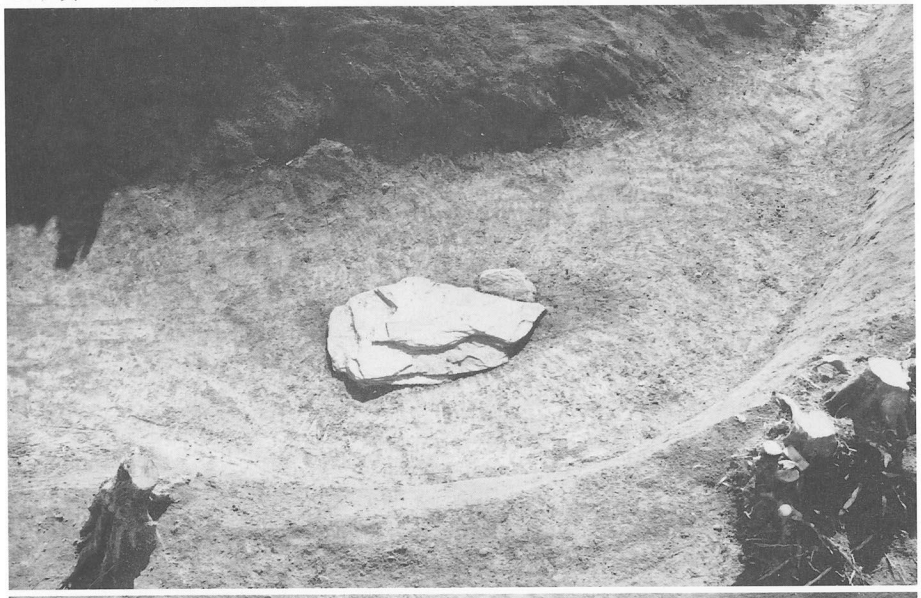


図版 6



1号墳1号埋葬施設鉄鏃出土状況（南西から）

1号墳2号埋葬施設掘り方（北東から）



1号墳3号埋葬施設蓋石

（北から）

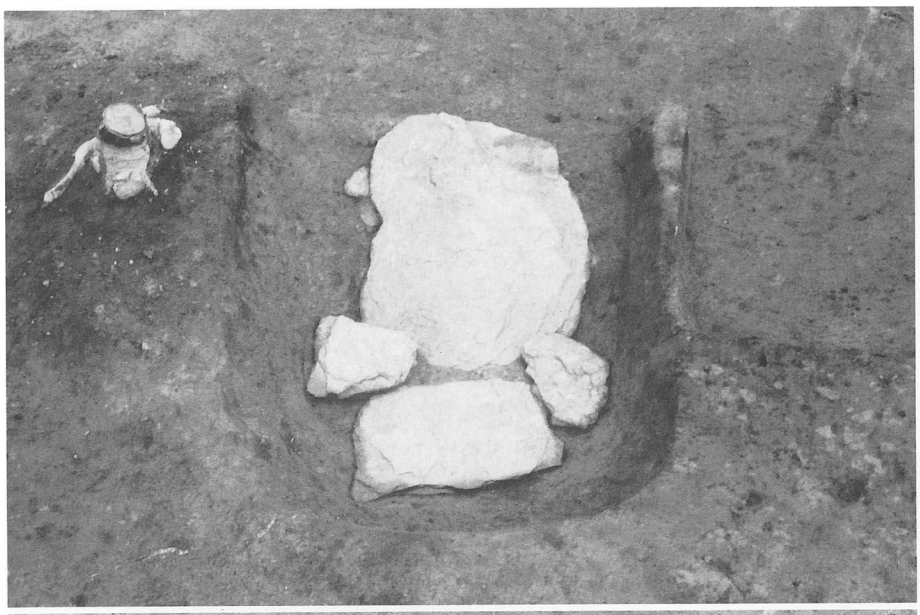
棺内

（西から）

△ 2 号墳完掘（西から）

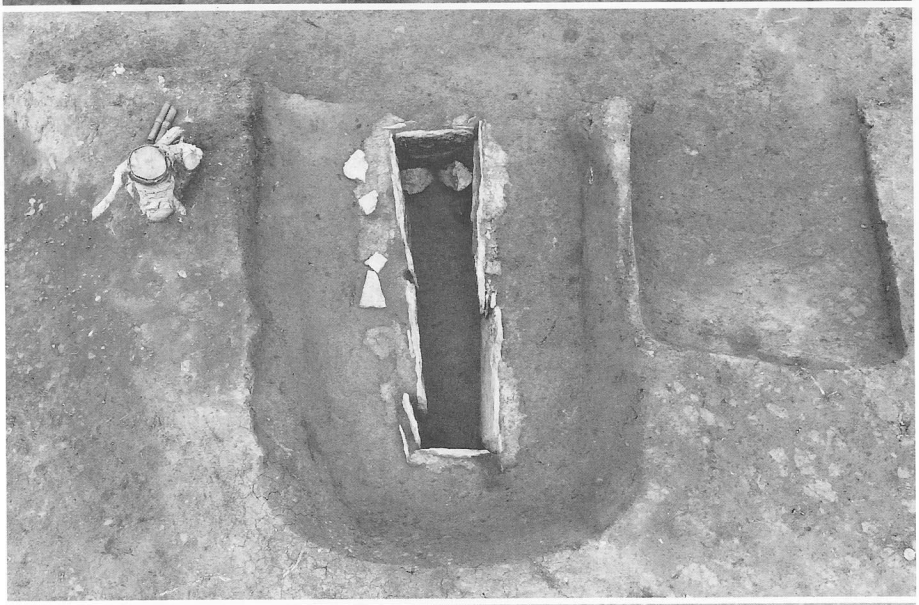
▽ 2 号墳 1 号埋葬施設（南西から）

図版 8



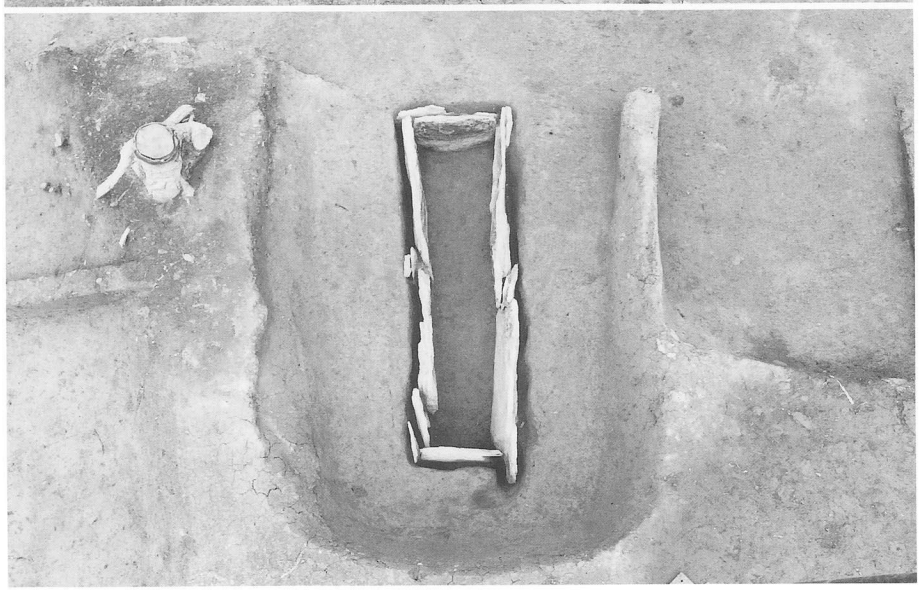
2 号墳 2 号埋葬施設蓋石

（南西から）



棺内

（南西から）



石棺掘り方

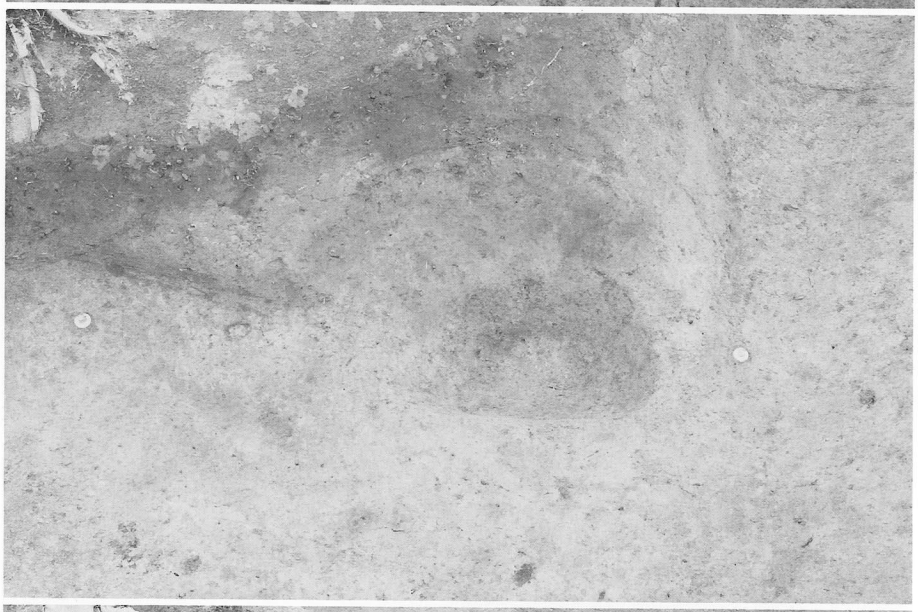
（南西から）

2号墳3号埋葬施設

（北東から）

掘り方

（北東から）



2号墳2号埋葬施設掘り方

（南西から）

図版10

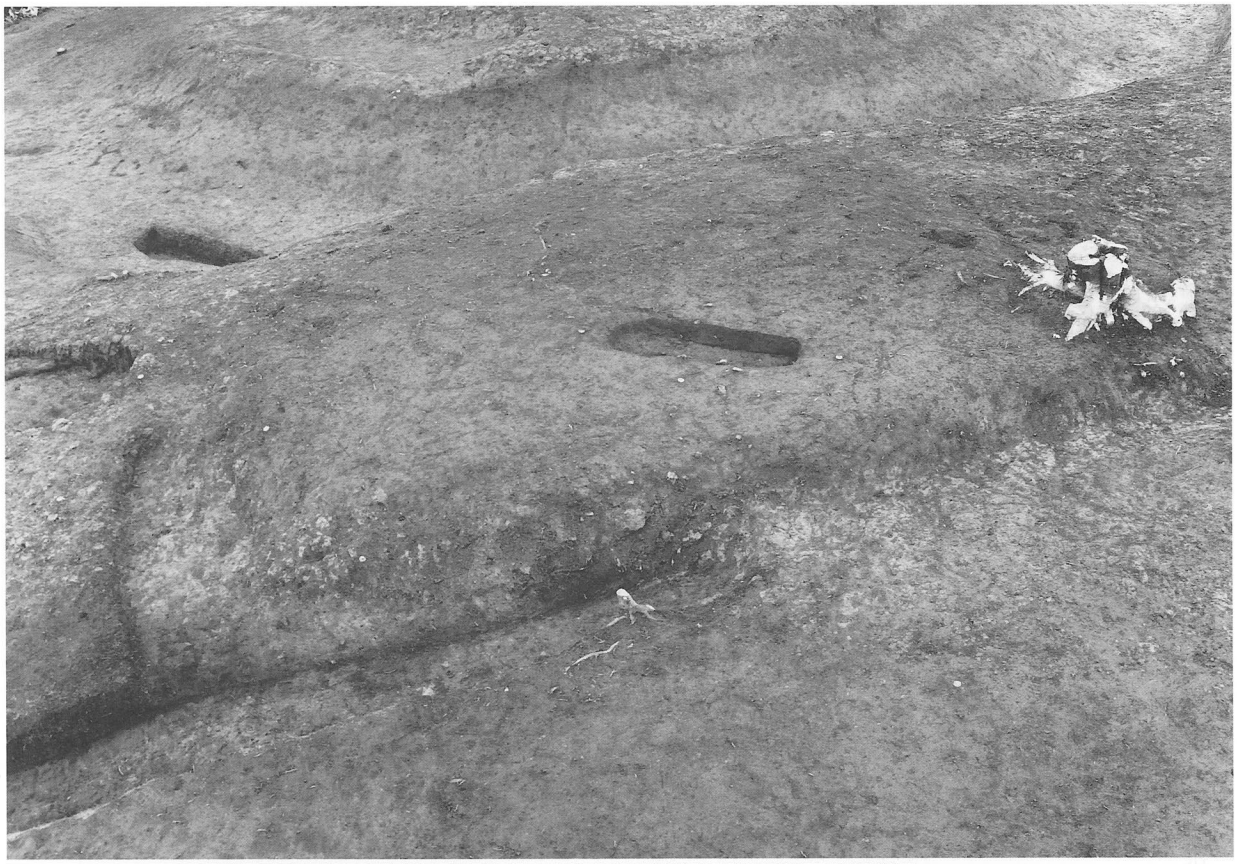
△３号～５号墳（北東から）

▽３号墳全景（東から）

△ 4 号墳全景（北東から）

▽ 5 号墳全景（東から）

図版12



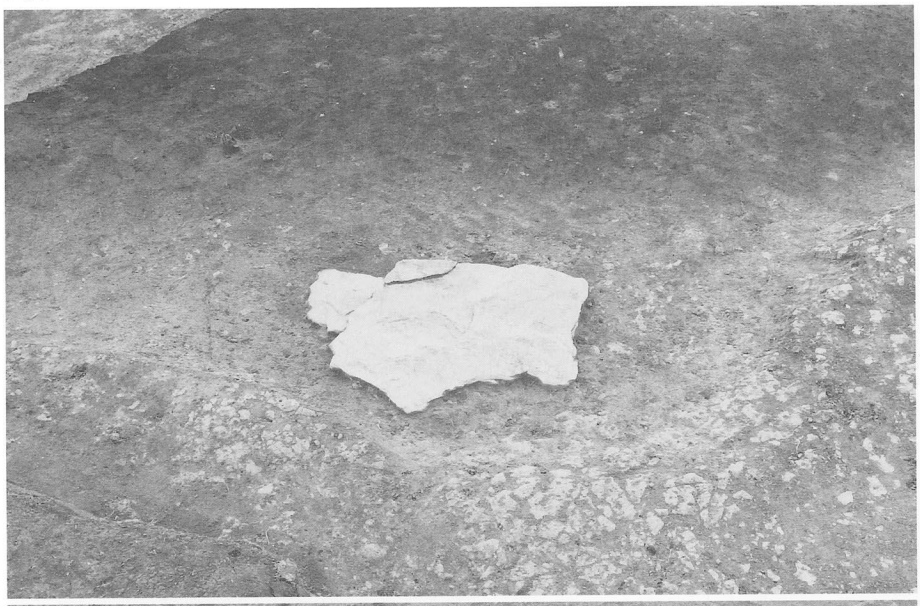
△６号墳全景（北から）

▽６号墳１号埋葬施設（西から）

△７号墳全景（南から）

▽７号墳周溝高坏一括出土状況（南から）

図版14



7号墳1号埋葬施設蓋石

(北から)

掘り方

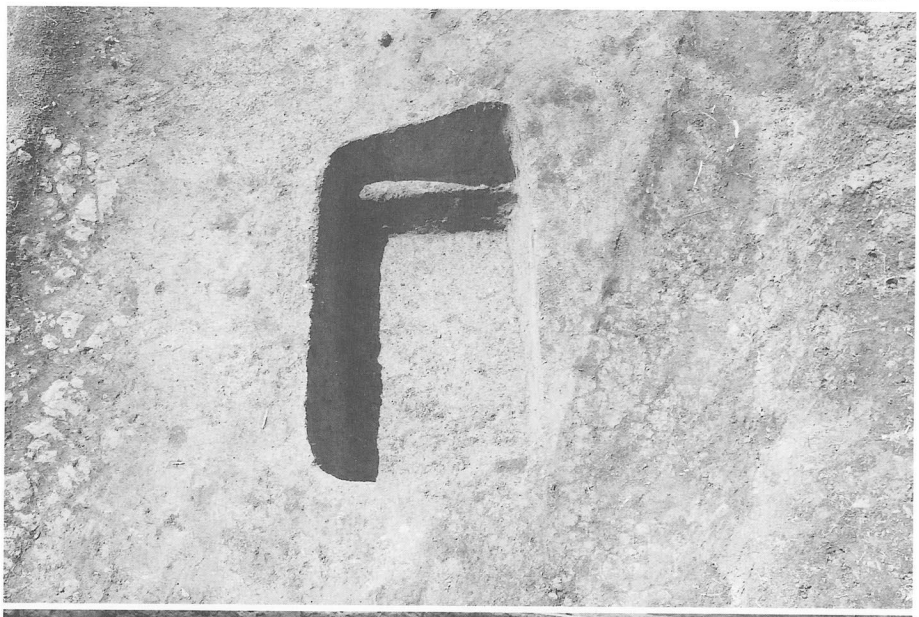
(北から)

7号墳2号埋葬施設

(西から)

7号墳3号埋葬施設

（北から）



7号墳4号埋葬施設

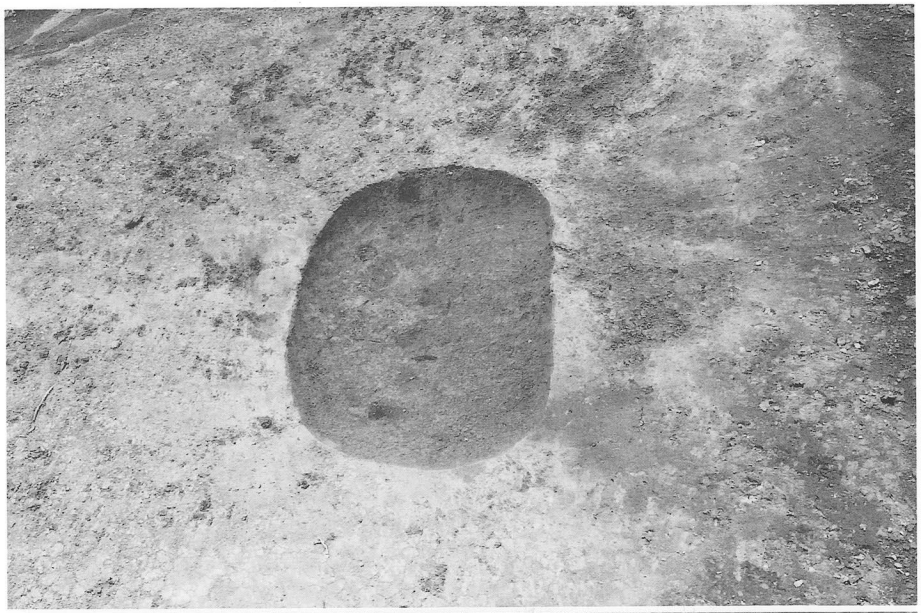
供献土器出土状況

（南東から）

掘り方

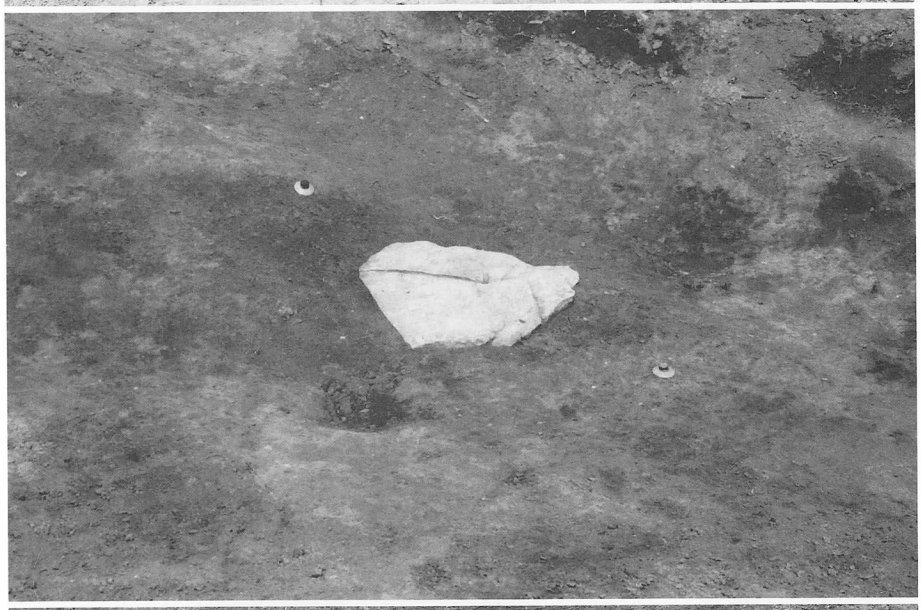
（南東から）

図版16



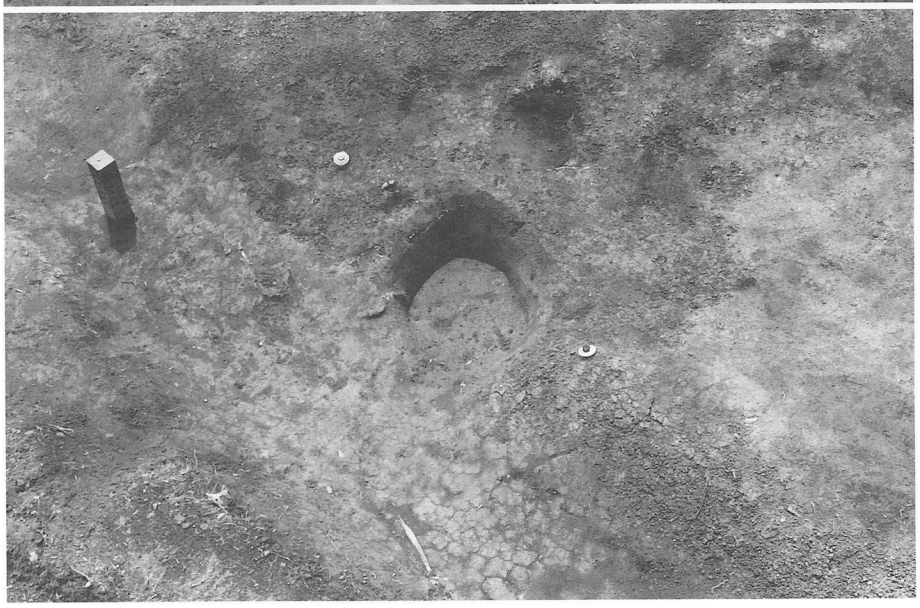
7号墳5号埋葬施設

（東から）



7号墳6号埋葬施設蓋石

（南西から）



掘り方

（北東から）

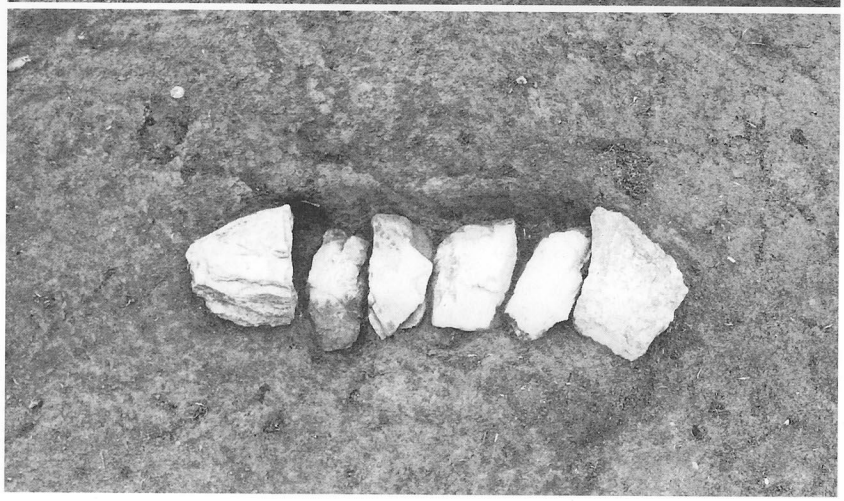
8号墳全景（北東から）

8号墳1号埋葬施設

（北東から）

敷石

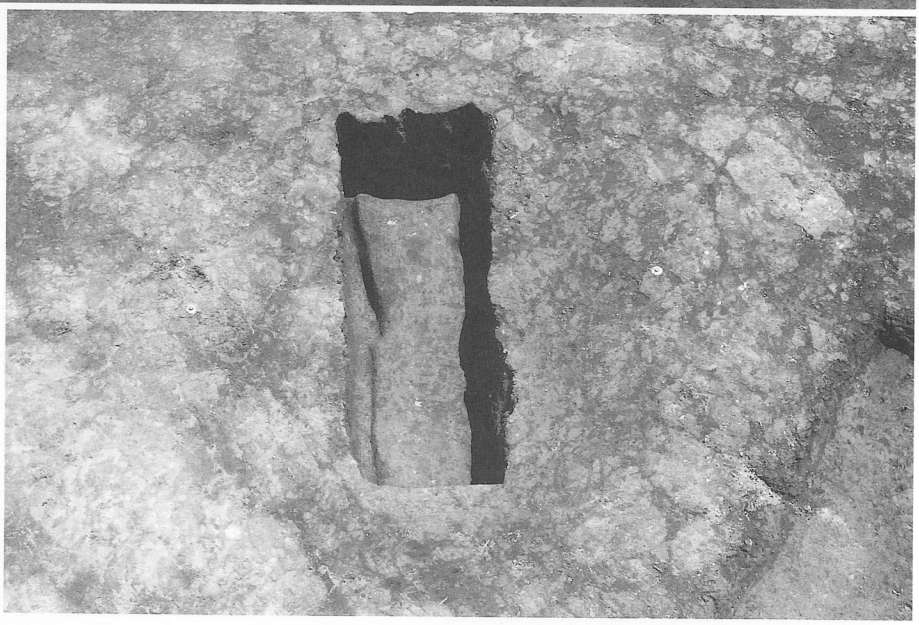
（南東から）



図版18

△９号墳全景（南から）

▽９号墳１号埋葬施設（西から）



△10号墳全景（北から）

▽10号墳１号埋葬施設（南西から）

図版20

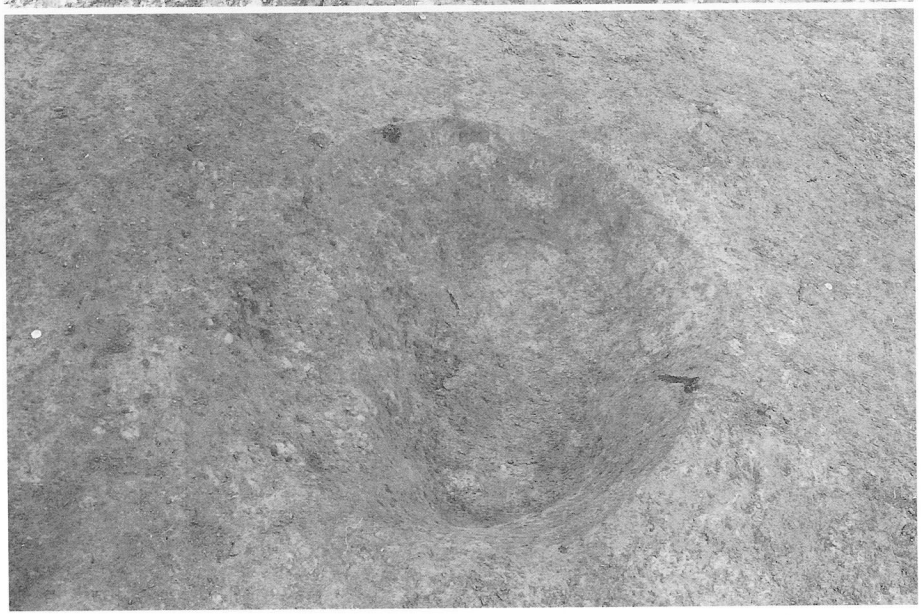
1号箱式石棺墓

（西から）

1号貯蔵穴（左）

1号土壙（右）

（北から）

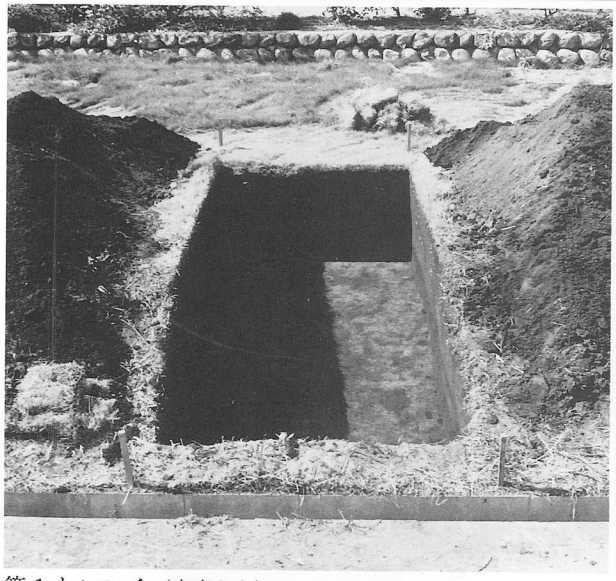


2号土壙

（東から）

郊家平古墳群調査区

（南から）



第１トレンチ（南東から）

第２トレンチ（南東から）

第３トレンチ（南東から）

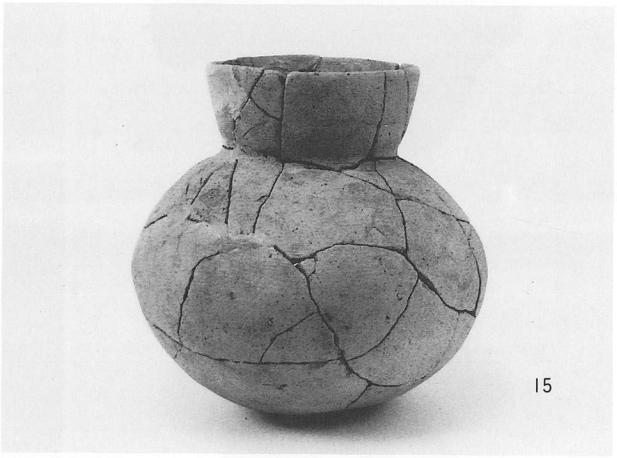
第４トレンチ（南東から）

1号・4号墳出土土器

10

12

11


15

14

22

20

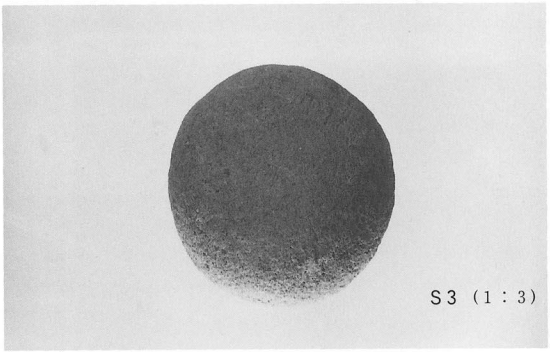
18

17

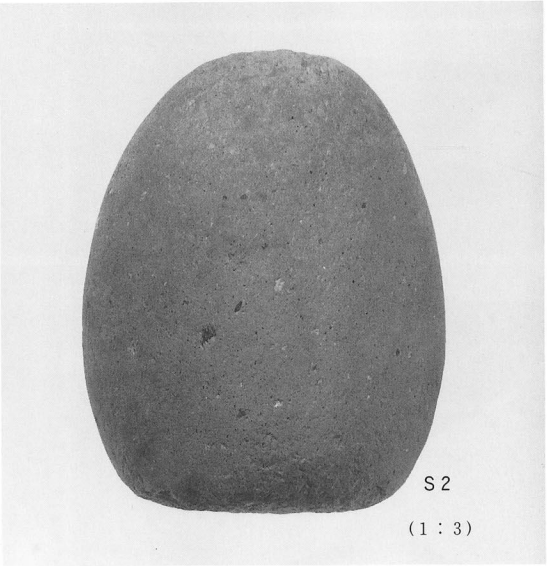
26

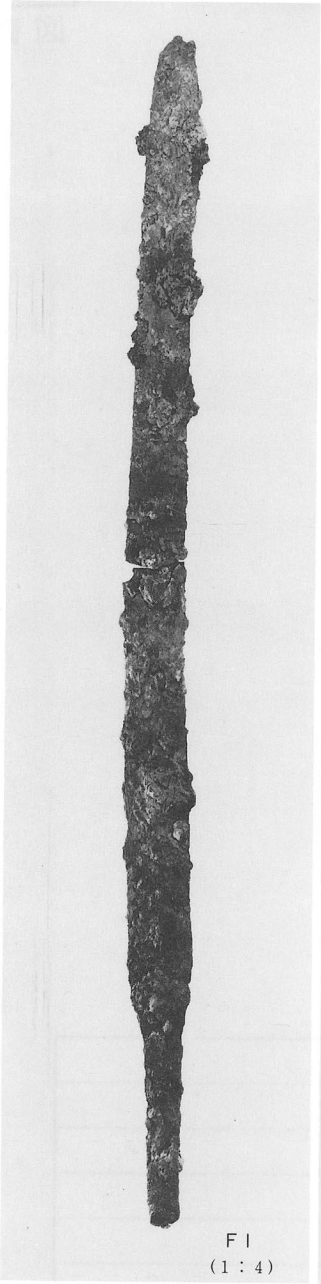
27

25


S3 (1：3)

S1
(1：3)

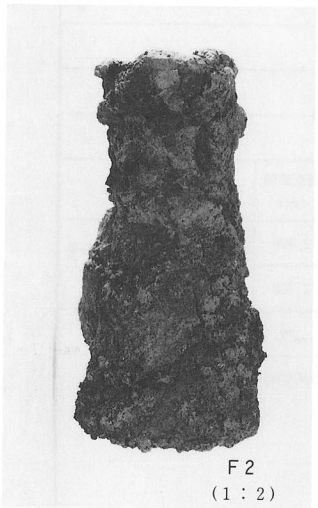

S2
(1：3)



F1
(1：4)

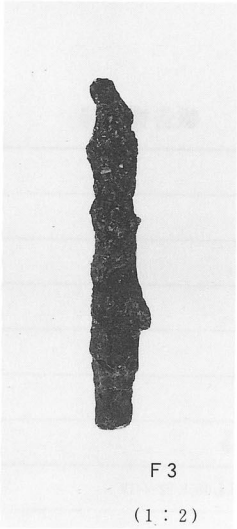
1号墳1号埋葬施設出土鉄鏃

(1：2)

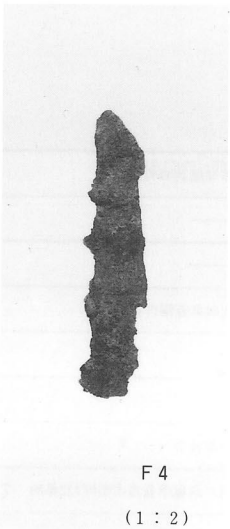


F2
(1：2)

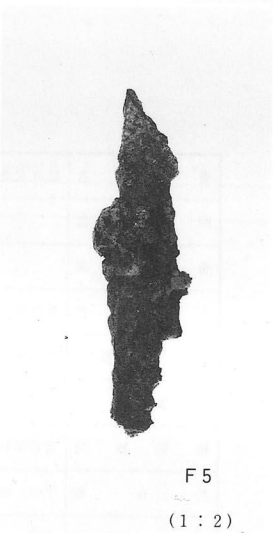
F7
(1：2)



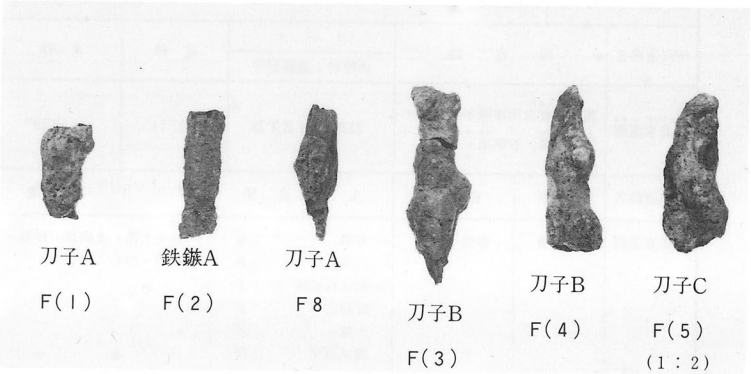
F3
(1：2)



F4
(1：2)



F5
(1：2)



刀子A F(1)
鉄鏃A F(2)
刀子A F8
刀子B F(3)
刀子B F(4)
刀子C F(5)
(1：2)

210.2
Kur
(99)
図書館

報告書抄録

書名	駄道東遺跡発掘調査報告書
副書名	――
巻次	――
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書
シリーズ番号	第99集
編著者名	森下哲哉
編集機関	倉吉市教育委員会
所在地	〒682-8611　鳥取県倉吉市葵町722番地　ＴＥＬ0858-22-4419
発行年月日	西暦1999年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡記号	北緯	東経	調査期間	調査面積（m²）	調査原因
駄道東遺跡	鳥取県倉吉市津原字駄道東・二ツ子塚、谷字玉ヶ平	31203：４ＥＴＤ	35°27′14″	133°45′23″	19971029～19980305	2,300	国営ダム建設による採石事業に伴う事前調査
					19980511～19980904	2,700	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
駄道東遺跡	古墳	弥生・古墳	方墳　１基 円墳　９基 箱式石棺墓　１基 貯蔵穴　１基 土壙　２基 溝状遺構　１条	弥生土器・土師器・鉄剣・刀子・鉄鏃 鉄斧・敲石・磨石	古墳時代中期の方墳及び円墳群を検出。

駄道東遺跡発掘調査報告書

平成11年３月31日　印刷
平成11年３月31日　発行

編集
発行　倉吉市教育委員会

印刷
製本　山本印刷株式会社